

茨城県教育財団文化財調査報告第114集

一般国道354号(水海道バイパス)道路
改良工事地内埋蔵文化財調査報告書

前原遺跡
大門通遺跡
三本松遺跡

平成8年6月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第114集

一般国道354号(水海道バイパス)道路 改良工事地内埋蔵文化財調査報告書

まえ ほん 遺 跡
だい もん どのり 遺 跡
大 門 通 遺 跡
さん ほん まつ 遺 跡
三 本 松 遺 跡

平成8年6月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団



遺跡遠景 (右から大門通遺跡・三本松遺跡)



三本松遺跡完掘全景

序

茨城県は、一般国道354号の交通渋滞の解消と、鬼怒川を挟んだ水海道周辺地域の相互連絡の強化を目的に、水海道バイパス道路の改良工事事業を推進しております。

水海道周辺地域の普遍的な発展のためには、このような交通体系の整備を進めていくことが重要であります。その予定地内には、前原遺跡をはじめとして、いくつかの埋蔵文化財包蔵地の存在が確認されております。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県から埋蔵文化財発掘調査事業についての委託を受け、平成7年1月から平成7年9月にかけて発掘調査を実施してまいりました。

本書は、前原遺跡、大門通遺跡及び三本松遺跡の調査成果を収録したものであり、本書が学術的な資料としてはもとより、教育・文化の向上の一助として広く活用されますことを希望いたします。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、水海道市教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導、御協力をいただきましたことに対し、衷心より感謝の意を表します。

平成8年6月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 橋 本 昌

例 言

1 本書は、茨城県の委託により、財団法人茨城県教育財団が、平成7年1月から平成7年9月まで発掘調査を実施した茨城県水海道市に所在する前原遺跡、大門通遺跡及び二本松遺跡の発掘調査報告書である。

なお、3遺跡の所在地は次のとおりである。

前原遺跡 水海道市羽生町字前原678番地の87ほか

大門通遺跡 水海道市豊岡町甲134番地の7ほか

二本松遺跡 水海道市豊岡町丁1646番地の1ほか

2 前原遺跡、大門通遺跡、二本松遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理 事 長	鎌 田 勇 橋 本 昌	昭和63年4月～平成7年3月 平成7年4月～	
副 理 事 長	小 林 秀 文 中 島 弘 光 齋 藤 佳 郎	平成6年4月～平成8年3月 平成7年4月～ 平成8年4月～	
専 務 理 事	中 島 弘 光	平成5年4月～平成7年3月	
常 務 理 事	一 木 邦 彦 梅 澤 秀 夫	平成7年4月～平成8年3月 平成8年4月～	
事 務 局 長	藤 枝 宣 一 齋 藤 紀 彦 小 林 隆 郎	平成4年4月～平成7年3月 平成7年4月～平成8年3月 平成8年4月～	
埋 蔵 文 化 財 部 長	安 藏 幸 重 沼 山 文 夫	平成5年4月～平成8年3月 平成8年4月～	
埋 蔵 文 化 財 部 長 代 理	河 野 佑 司	平成6年4月～	
企 画 管 理 課	課 長	水 飼 敏 夫	平成4年4月～平成8年3月
	課 長	小 幡 弘 明	平成8年4月～
	課 長 代 理	根 本 達 夫	平成7年4月～(平成6年4月～平成7年3月係長)
	係 長	清 水 薫	平成8年4月～
	主 任 調 査 員	海 老 澤 稔	平成6年4月～平成8年3月
主 任 調 査 員	小 高 五 十 二	平成8年4月～	
経 理 課	課 長	小 幡 弘 明	平成5年4月～平成8年3月
	課 長	河 崎 孝 典	平成8年4月～
	主 査	鈴 木 三 郎	平成7年4月～平成8年3月(平成5年4月～平成7年3月課長代理)
	主 査	田 所 多 佳 男	平成8年4月～
	課 長 代 理	大 高 春 夫	平成7年4月～(平成6年4月～平成7年3月係長)
	主 任	小 池 孝	平成7年4月～
	主 事	軍 司 浩 作	平成5年4月～平成8年3月
主 事	柳 澤 松 雄	平成8年4月～	

調査第一課	課長(部長兼務)	安 藏 幸 重	平成5年4月～平成8年3月
	調査第一班長	川 井 正 一	平成7年1月～平成7年3月
	調査第三班長	根 本 康 弘	平成7年4月～平成7年9月
	主任調査員	土 生 朗 治	平成7年1月～平成7年9月調査(平成7年1月～平成7年3月調査員)
	調査員	白 田 正 子	平成7年1月～平成7年9月調査
整理課	調 査 員	大 関 武	平成7年4月～平成7年9月調査
	課 長	山 本 静 男	平成7年4月～
	副主任調査員	大 関 武	平成8年4月～平成8年6月整理・執筆・編集

3 本書に使用した記号等については、凡例を参照されたい。

4 本書の作成にあたり、短刀の実測、鑑定については取手市立高井小学校教諭の田中幸夫氏に御指導をいただいた。

5 発掘調査及び整理に際して、御指導、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

6 遺跡の概略

ふりがな	いっばんくどう354ごう(みづかいどうびんばす)どうろかいりょうじちないまいどうふんかざいちようさほうくじしよ						
書 名	一般国道354号(水海道バイパス)道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書						
副 書 名	前原遺跡・大門通遺跡・三本松遺跡						
巻 次							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告						
シリーズ番号	第114集						
編 著 者 名	大 関 武						
編 集 機 関	財団法人 茨城県教育財団						
所 在 地	〒310 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029(225)6587						
発 行 年 月 日	1996(平成8)年6月30日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調 査 原 因
まへはらいせき 前原遺跡	いばらきけんみづかいどうし 茨城県水海道市 出いちょうちようふだまよら 羽生町字前原 678番地の87ほか	08211-0058	36度 02分 37秒	139度 58分 35秒	19950101～ 19950930	3,019㎡	一般国道354号(水海道 バイパス)道路改良工事 に伴う調査
だいもんどおりせき 大門通遺跡	いばらきけんみづかいどうし 茨城県水海道市 とよとくちようごう 豊岡町甲134番地 の7ほか	08211-0056	36度 02分 37秒	139度 58分 15秒		1,137㎡	
さんほんまついせき 三本松遺跡	いばらきけんみづかいどうし 茨城県水海道市 とよとくちようごう 豊岡町丁1646番 地の1ほか	08211-0054	36度 02分 37秒	139度 58分 05秒		6,836㎡	

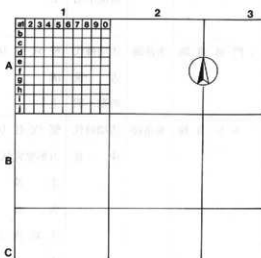
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
前原遺跡	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡 1軒	土師器	古墳時代前期の住居跡で、壁側にベッド状の高まりをもっている。
		時期不明	土坑 15基 溝 1条	須恵器	
大門通遺跡	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡 6軒	土師器・土玉・管状土鉢	古墳時代中期の集落跡で、大形住居と小形住居に分かれる。
		近世	溝 1条	土師質土器・陶器	
		時期不明	土坑 10基		
三本松遺跡	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡 1軒	土師器	中世の遺構が数多く確認され、特に方形竪穴状遺構からは北宋銭が4枚出土している。
		中世	方形竪穴状遺構 6軒	土師質土器・北宋銭	
			土壇墓 43基	土師質土器・陶器・磁器	
			火葬墓 1基	火葬骨片	
			土坑内貝塚 2基	巻貝・二枚貝	
			土坑 1基	短刀	
			井口 3基	陶器	
			溝 5条	陶器・磁石	
			道路状遺構 1条		
			不明遺構 1基	土師質土器・陶器	
		時期不明	土坑 4基 溝 2条		

凡 例

- 1 遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅷ系を原点とし、前原遺跡は $X=+4,040\text{m}$ $Y=+13,560\text{m}$ 、大門通遺跡は $X=+4,080\text{m}$ $Y=+13,160\text{m}$ 、三本松遺跡は $X=+4,080\text{m}$ $Y=+12,720\text{m}$ の交点をそれぞれ基準点(A1a1)とした。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々十等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C……、西から東へ1、2、3……とし、その組み合わせで「A1区」、「B2区」のように呼称した。さらに、小調査区も同様に北から南へa、b、c……j、西から東へ1、2、3……0と小文字を付し、位置を表示する場合は、大調査区の名称を冠し、「A1a1区」、「B2b2区」のように呼称した。(第1図)



第1図 調査区呼称方法概念図

- 2 遺構、遺物及び土層に使用した記号は、次のとおりである。

遺構 住居跡-S I 方形竪穴遺構-S I 土塼墓-S K 火葬墓-S K 土坑内貝塚-S K
土坑-S K 井戸-S E 溝-S D 道路状遺構-S F 不明遺構-S X ビット-P
遺物 土器-P 土製品-D P 石器・石製品-Q 古銭・金属製品-M 拓本土器-T P
土層 擾乱-K

- 3 遺構及び遺物の実測図中の表示は、次のとおりである。

□=加・竈 ▨=焼土・赤彩 ▩=粘土・釉 ▪=炭化物・織蓮土器 ▧=貝 ▦=火葬竹片
●=土器 ■=土製品 □=石器・石製品 △=古銭・金属製品

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

- 5 遺構・遺物実測図の作成方法及び掲載方法については、以下のとおりである。

- 各遺構の実測図は60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。
- 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に $S=1/\bigcirc$ と表示した。
- 「主軸方向」は、加・竈を通る軸線、あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線を主軸とし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。(例 $N-10^{\circ}-E$ $N-10^{\circ}-W$)
なお、[]を付したものは推定である。
- 土器の計測値は、A-口径、B-器高、C-底径、D-高台径(脚部径)、E-高台高(脚部高)とし、単位はcmである。

なお、現存値は()で、推定値は[]を付して示した。

目 次

序

例言

凡例

第1章 調査経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経緯	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3章 前原遺跡	11
第1節 遺跡の概要	11
第2節 基本層序	11
第3節 遺構と遺物	12
1 古墳時代の遺構と遺物	12
(1) 竪穴住居跡	12
2 その他の遺構と遺物	17
(1) 土坑	17
(2) 溝	20
3 遺構外出土遺物	20
第4節 まとめ	21
第4章 大門通遺跡	24
第1節 遺跡の概要	24
第2節 基本層序	24
第3節 遺構と遺物	24
1 古墳時代の遺構と遺物	24
(1) 竪穴住居跡	25
2 その他の遺構と遺物	35
(1) 土坑	35
(2) 溝	36
3 遺構外出土遺物	37
第4節 まとめ	38

第5章 三本松遺跡	41
第1節 遺跡の概要	41
第2節 基本層序	41
第3節 遺構と遺物	42
1 古墳時代の遺構と遺物	42
(1) 竪穴住居跡	42
2 中世の遺構と遺物	47
(1) 方形竪穴状遺構	47
(2) 土墳墓	52
(3) 火葬墓	58
(4) 土坑内貝塚	59
(5) 土坑	60
(6) 井戸	62
(7) 溝	64
(8) 道路状遺構	65
(9) 不明遺構	67
3 その他の遺構と遺物	69
(1) 土坑	69
(2) 溝	69
4 遺構外出土遺物	70
第4節 まとめ	74

写真図版

插图目次

第1图	調査区呼称方法概念图	
第2图	周辺遺跡分布图	7
第3图	前原・大門通・三本松遺跡周辺地形图	8

前原遺跡

第4图	前原遺跡遺構配置图	9・10
第5图	前原遺跡基本土層图	12
第6图	第5号住居跡実測图(1)	13
第7图	第5号住居跡実測图(2)	14
第8图	第5号住居跡出土遺物実測・拓影图	15
第9图	上坑実測・出土遺物拓影图	18
第10图	第1号溝実測图	20
第11图	遺構外出土遺物実測・拓影图	21

大門通遺跡

第12图	大門通遺跡遺構配置图	23
第13图	大門通遺跡基本土層图	24
第14图	第1号住居跡・出土遺物実測图	25
第15图	第2号住居跡実測图	27
第16图	第2号住居跡出土遺物実測・拓影图	28
第17图	第3号住居跡実測图	30
第18图	第3号住居跡出土遺物実測・拓影图	31
第19图	第4号住居跡実測图	32
第20图	第4号住居跡出土遺物実測・拓影图	33
第21图	第5号住居跡実測图	33
第22图	第6号住居跡・出土遺物実測图	34
第23图	土坑実測图	35
第24图	第1号溝実測图	36
第25图	第1号溝出土遺物実測・拓影图	37
第26图	遺構外出土遺物実測・拓影图	37

三本松遺跡

第27图	三本松遺跡遺構配置图	39・40
第28图	三本松遺跡基本土層图	41
第29图	第6号住居跡実測图	43
第30图	第6号住居跡出土遺物実測图(1)	44
第31图	第6号住居跡出土遺物実測・拓影图(2)	45
第32图	第1号方形竪穴状遺構実測・出土遺物 拓影图	47
第33图	第2号方形竪穴状遺構実測图	49
第34图	第3号方形竪穴状遺構実測图	50
第35图	第4号方形竪穴状遺構実測图	51
第36图	第5号方形竪穴状遺構・出土遺物 実測图	51
第37图	第7号方形竪穴状遺構実測图	52
第38图	中世遺構群配置图	53
第39图	上墳墓実測图(1)	54
第40图	上墳墓実測图(2)	55
第41图	土墳墓実測图(3)	56
第42图	土墳墓出土遺物実測图	58
第43图	第50号火葬墓実測图	59
第44图	第55・56号上坑内貝塚実測图	60
第45图	第1号上坑・出土遺物実測图	61
第46图	第1・2・3号井戸・出土遺物実測图	63
第47图	第3・4・5・6・7号溝・ 第1号道路状遺構実測图	66
第48图	第5・7号溝出土遺物実測图	67
第49图	第1号不明遺構・出土遺物実測图	68
第50图	遺構外出土遺物実測・拓影图(1)	71
第51图	遺構外出土遺物実測・拓影图(2)	72
第52图	遺構外出土遺物実測・拓影图(3)	73

表 目 次

表1 周辺遺跡一覧表 6

前原遺跡

表2 前原遺跡住居跡一覧表 17

表3 前原遺跡土坑一覧表 19

大門通遺跡

表4 大門通遺跡住居跡一覧表 34

表5 大門通遺跡土坑一覧表 36

三本松遺跡

表6 三本松遺跡住居跡・方形竪穴状遺構
一覧表 56

表7 三本松遺構土坑・土壇墓類一覧表 61

写真図版目次

前原遺跡

P L 1 遺構確認状況、調査終了状況、第5号住居跡完掘、第5号住居跡炭化材確認状況、第5号住居跡遺物出土状況、第5号住居跡貯蔵穴遺物出土状況

P L 2 第5号住居跡Ps遺物出土状況、第1・3・4・5・7・11・14号土坑完掘

P L 3 第5号住居跡、第11号土坑、遺構外出土遺物

大門通遺跡

P L 4 遺構確認状況、調査終了状況、第1号住居跡完掘、第1号住居跡炭化材確認状況、第2号住居跡完掘、第2号住居跡遺物出土状況、第3号住居跡完掘、第3号住居跡遺物出土状況

P L 5 第4号住居跡完掘、第4号住居跡遺物出土状況、第5・6号住居跡完掘、第1・4・5・6・8・9号土坑完掘

P L 6 第1・2・3・4号住居跡出土遺物

P L 7 第2・3・4・6号住居跡、第1号溝・遺構外出土遺物

三本松遺跡

P L 8 第6号住居跡遺物出土状況、第6号住居跡竈調査状況、第1号方形竪穴状遺構完掘、第1号方形竪穴状遺構遺物出土状況、第2・3・4・5号方形竪穴状遺構完掘

P L 9 第7号方形竪穴状遺構完掘、方形竪穴状遺構群全景、中世遺構群全景、第10・12・14・17・25・23・27・24・26・28号土壇墓完掘

P L 10 第29・31・34・36・37・42・47号土壇墓完掘、第50号火葬墓完掘

P L 11 第55号土坑内貝塚確認状況、第55号土坑内貝塚調査状況、第2・3号井戸調査状況、第3・4・5・6・7号溝、第1号道路状遺構完掘、第1号不明遺構完掘、第1号不明遺構Pa貝出土状況

P L 12 第6号住居跡出土遺物

P L 13 第6号住居跡、第1・5号方形竪穴状遺構、第12・36号土壇墓出土遺物

P L 14 第37号土壇墓、第1号土坑、第3号井戸、第5・7号溝、第1号不明遺構、遺構外出土遺物

P L 15 第6号住居跡、遺構外出土遺物

P L 16 第55・56号土坑内貝塚、第1号不明遺構Pa出土貝類、第50号火葬墓出土火葬骨片

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

主要地方道上浦野田線は、水海道市内を通過する路線で、県南地域と県西地域を結ぶという重要な役割を果たしてきた道路である。しかしながら、沿線地域の近年における目覚ましい発展は交通量の増加を招き、さらなる発展を目指していくには道路網の整備を図ることが必要である。そうした中、主要地方道上浦野田線が一般国道354号に昇格することになり、茨城県は、水海道市から岩井市に通じる水海道バイパス道路の建設を計画した。

工事に先立ち、茨城県は、平成5年3月3日に茨城県教育委員会に対し、この道路改良工事予定地内である水海道市羽生地区及び豊岡地区における埋蔵文化財の有無等についての照会をした。これを受け、茨城県教育委員会は、平成5年9月17日に現地踏査を、同年11月22日に試掘調査を実施した。その結果、平成6年1月7日に工事予定地内に前原遺跡が所在することを茨城県あてに回答した。平成6年1月17日から、茨城県と茨城県教育委員会は、埋蔵文化財の取り扱いについて、文化財保護の立場から慎重な協議を重ねてきた。その結果、平成6年2月1日、前原遺跡については記録保存の措置を講ずることとし、茨城県教育委員会は、茨城県に埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

さらに、茨城県教育委員会は、平成6年11月16日にも現地踏査を実施し、その結果、平成7年2月3日に工事予定地内に大門通遺跡及び三本松遺跡も所在することを茨城県あてに回答した。平成7年3月6日から、茨城県と茨城県教育委員会は、埋蔵文化財の取り扱いについて、文化財保護の立場から慎重な協議を重ねてきた。その結果、平成7年3月9日、大門通遺跡及び三本松遺跡についても記録保存の措置を講ずることとし、茨城県教育委員会は、茨城県に埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

茨城県教育財団は、平成7年1月1日、茨城県と埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を結び、同年1月から前原遺跡の発掘調査を、同年4月から大門通遺跡及び三本松遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

前原遺跡、大門通遺跡及び三本松遺跡の発掘調査は、平成7年1月1日から平成7年9月30日までの9か月間にわたり実施した。以下、調査経過の概要を月ごとに記述する。

前原遺跡

- 1月4日から事前準備を開始し、続いて器材の搬入など発掘調査のための諸準備を行った。11日に調査区内の清掃をし、12日には関係者列席のもとに鉄入れ式を挙行了。13日からは調査区の手掘りによる試掘調査を開始し、遺物及び遺構の存在を確認した。31日からは重機による表土除去を開始した。
- 2月引き続き表土除去を実施し、6日からは遺構確認作業を開始した。表土除去は8日に終え、遺構確認作業も9日には終了し、竪穴住居跡、土坑及び溝等を確認した。10日からは竪穴住居跡を中心とした遺構調査に着手した。15・16日には方眼杭打ち測量（茨城県建設技術公社に委託）を実施した。
- 3月遺構の調査を概ね終え、13日からは補足調査を行った。17日にはすべての調査を終了した。

大門通遺跡・三本松遺跡

- 4 月 3日から事前準備を開始し、11日には現地踏査を行い、続いて器材の搬入など発掘調査のための諸準備を行った。13日からは三本松遺跡の調査区内の清掃及び上物焼却を開始した。17日からは三本松遺跡Ⅰ・Ⅱ区内の工事用仮設道路予定地内の手掘りによる試掘調査を開始し、24日からはⅠ区の手掘りによる試掘調査も開始した。
- 5 月 引き続き三本松遺跡Ⅰ区の試掘調査を実施し、8日からはⅡ区、9日からはⅢ区の試掘調査も開始し、遺物及び遺構の存在を確認した。16日からはⅠ区の試掘グリッドの手掘りによる拡張を開始し、方形竅穴状遺構、土坑及び溝等を確認した。22日からは大門通遺跡の調査区内の伐開及び上物焼却を開始した。24日からは大門通遺跡の手掘りによる試掘調査を開始し、遺物及び遺構の存在を確認した。
- 6 月 6日からは三本松遺跡Ⅰ区の方形竅穴状遺構を中心とした遺構調査に着手した。
- 7 月 Ⅰ区の遺構調査を概ね終え、10日からは三本松遺跡Ⅱ・Ⅲ区の重機による表土除去と遺構確認作業を開始した。三本松遺跡の表土除去は18日に終え、続いて大門通遺跡の重機による表土除去を開始した。三本松遺跡Ⅱ・Ⅲ区の遺構確認作業も19日には終了し、竅穴住居跡、土坑及び溝等を確認した。大門通遺跡の表土除去は20日に終えた。24日からは三本松遺跡Ⅱ区の溝を中心とした遺構調査に、さらに25日からはⅢ区の土坑を中心とした遺構調査に着手した。26・27日には両遺跡の方眼杭打ち測量（茨城県建設技術公社に委託）を実施した。三本松遺跡Ⅱ区の遺構調査を概ね終え、28日からは大門通遺跡の遺構確認作業を開始した。
- 8 月 大門通遺跡の遺構確認作業も8日には終了し、竅穴住居跡、土坑及び溝等を確認した。三本松遺跡Ⅲ区の遺構調査を概ね終え、23日からは大門通遺跡の竅穴住居跡を中心とした遺構調査を開始した。
- 9 月 大門通遺跡の調査を概ね終えたのに伴い、両遺跡の調査区内を清掃して、4日には完掘全景の航空写真撮影を実施した。10日には大門通遺跡及び三本松遺跡の現地説明会を開催し、多数の見学者が来跡した。以降、大門通遺跡及び三本松遺跡Ⅲ区の補足調査を行いながら、撤収準備を開始した。20日にはすべての調査を終了し、25日には撤収作業も完了した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

前原遺跡は茨城県水海道市羽生町字前原678-87ほかに、大門通遺跡は水海道市豊岡町甲134-7ほかに、三本松遺跡は水海道市豊岡町丁1646-1ほかにそれぞれ所在し、水海道市役所の北西2～3kmのところに位置している。

遺跡のある水海道市は、茨城県の南西部に位置し、東はつくば市、谷和原村、西は岩井市、南は守谷町、千葉県野田市、北は石下町と境を接している。市域は、東西約14km、南北約22km、面積約80km²である。市の東側は国道294号線と関東鉄道常総線がほぼ平行して南北に通じ、中央は国道354号線が東西に走っている。

水海道市の地形は、標高20～24mの洪積台地である結城（岡田）台地及び猿島台地と、小貝川、鬼怒川及び旧飯沼、菅生沼水系の沖積低地とからなっており、市の東側には低地が開け、西側には台地が発達している。結城台地は市の北西部に位置し、鬼怒川及び旧飯沼の間を細長く南に伸びており、台地の南端は市内の豊岡町に当たる。台地上は平坦で比較的起伏が少ないが、縁辺部には多数の谷津が複雑に入り組んでいる。猿島台地は市の南西部に位置し、利根川及び旧飯沼の間を南に伸びており、結城台地と同じような地形となっている。栃木県内に水源をもつ小貝川は、市の東端を北から南に流れている。鬼怒川も栃木県内に水源をもち、市の中央を北から南に流れている。市の北西端にはかつて飯沼が存在していたが、江戸時代享保年間の新田開発によって干拓され、現在は水田となっている。また、市の南西端には菅生沼が形成されている。結城台地及び猿島台地の地層は、第四紀洪積世古東京湾時代に堆積した成田層が基盤層となり、下部から上部にかけて成田層下部、成田層上部、竜ヶ崎砂礫層、常総粘土層、関東ローム層、表土層の順で堆積している。堆積状況は水平且つ単調で、褶曲や断層は見られない。

前原遺跡他2遺跡は、水海道市の北西部にあり、鬼怒川と旧飯沼に挟まれた細長い結城台地の南端付近に立地している。前原遺跡は、東側を鬼怒川に、西側を北から入り込んだ鬼怒川水系の小支谷によって挟まれた東西が狭い台地上に立地している。遺跡の標高は17～18mで、台地上と鬼怒川低地面との比高は7～8m、西側谷津低地面との比高は3～5mである。調査前の現況は、山林である。大門通遺跡は、前原遺跡の西側に位置しており、東側を北から入り込んだ先の小支谷に、西側を南から入り込んだ鬼怒川水系の小支谷に挟まれた東西が狭い台地上に立地している。遺跡の標高は16～18mで、台地上と東側谷津低地面との比高は2～5m、西側谷津低地面との比高は4～6mである。調査前の現況は、山林、畑である。三本松遺跡は、大門通遺跡の西側に位置しており、東側を南から入り込んだ先の小支谷に、西側を旧飯沼に挟まれた東西が狭い台地の東側の緩やかな傾斜面上に立地している。遺跡の標高は17～24mで、台地上と東側谷津低地面との比高は3～5m、西側旧飯沼低地面との比高は11～13mである。調査前の現況は、山林、畑である。

参考文献

- ・水海道市史編さん委員会 「水海道市史 上巻」 1983年3月
- ・茨城県農地部農地計画課 「土地分類基本調査 土浦」 1983年12月
- ・茨城県農地部農地計画課 「土地分類基本調査 水海道」 1985年12月
- ・水海道市埋蔵文化財総合調査会 「水海道市埋蔵文化財包蔵地分布地図」（水海道市埋蔵文化財調査報告1）1992年3月

第2節 歴史的環境

前原遺跡⁽¹⁾、大門通遺跡⁽²⁾及び三本松遺跡⁽³⁾の所在する地域は、河川、湖沼、低地、台地と変化に富んだ自然環境をもち、台地上には数多くの遺跡が遺存している。特に、鬼怒川水系、旧飯沼及び養生沼周辺の台地上には、旧石器時代から中世までの遺跡が多数分布している。ここでは、『茨城県遺跡地図』、『水海道市埋蔵文化財包蔵地分布地図』の中で報告されている当該地域の主な遺跡を中心に、時代別に概観することにした。

旧石器時代の遺跡として、結城台地上の三本松遺跡からスクレイパー、稲荷山遺跡⁽²³⁾からブレード、また、猿島台地上の弁天遺跡⁽⁴⁴⁾からナイフ形石器がそれぞれ採集されている。

縄文時代早期の遺跡は、結城台地上の満蔵遺跡⁽⁷⁾、貝塚甲遺跡⁽¹³⁾、貝塚丁遺跡⁽¹⁴⁾、中坪遺跡⁽¹⁷⁾、稲荷山遺跡、猿島台地上の竜沼遺跡⁽²⁹⁾、菟場遺跡⁽³⁰⁾、篠山遺跡⁽³¹⁾、北呂山遺跡⁽³²⁾、山神戸遺跡⁽³⁴⁾、野口遺跡⁽³⁵⁾、西浦遺跡⁽³⁷⁾、菅場遺跡⁽⁴¹⁾、稲荷木郷遺跡⁽⁴⁷⁾等がある。縄文時代前期の遺跡は、結城台地上の向山遺跡⁽⁴⁾、安戸東遺跡⁽⁶⁾、満蔵遺跡、満倉北遺跡⁽⁸⁾、貝塚乙遺跡⁽¹²⁾、猿島台地上の竜沼遺跡、菟場遺跡、篠山遺跡、山神戸遺跡、菅場遺跡、弁天遺跡、稲荷木郷遺跡等がある。縄文時代中期の遺跡は、結城台地上の安戸東遺跡、満蔵遺跡、満倉北遺跡、中坪遺跡、猿島台地上の野口遺跡、菅場遺跡、弁天遺跡、稲荷木郷遺跡等がある。縄文時代後期の遺跡は、結城台地上の満蔵遺跡、満倉北遺跡、満倉東遺跡⁽¹⁰⁾、観音堂遺跡⁽²⁰⁾、大目台遺跡⁽²⁵⁾、猿島台地上の竜ヶ崎遺跡⁽⁴⁰⁾、菅場遺跡、岡ノ内遺跡⁽⁴⁶⁾、稲荷木郷遺跡等がある。縄文時代晩期の遺跡は、結城台地上の満蔵遺跡、満倉東遺跡、猿島台地上の菅場遺跡等がある。その中でも、鬼怒川西岸に位置する満蔵遺跡、貝塚甲遺跡、中坪遺跡の3遺跡と、旧小谷沼北岸に位置する菅場遺跡は、遺跡内に地点貝塚が存在している。以上のように、早期から前期と継続する遺跡は多いが、その後は減少傾向にあり、晩期に至っては確認されている遺跡数が最も少ない。

弥生時代の遺跡は、わずかな弥生土器片が採集された貝置前沼遺跡と木郷南志部遺跡の2遺跡が存在するのみで、現在のところ集落跡と思われるほどの遺跡は確認されていない。両遺跡とも第2図の範囲では、その地点を落とすことができないが、今後他の谷津や小河川に面した台地上に、弥生時代の集落跡が確認される可能性は高いと思われる。

古墳時代の遺跡は、今回報告する前原遺跡、大門通遺跡、三本松遺跡の他に、結城台地上の向山遺跡、入山遺跡⁽⁵⁾、満蔵遺跡、満倉北遺跡、満倉東遺跡、貝塚甲遺跡、中坪遺跡、野村遺跡⁽²¹⁾、大目台遺跡、猿島台地上の竜沼遺跡、菟場遺跡、北呂山遺跡、山神戸遺跡、西浦遺跡、剣崎遺跡⁽³⁸⁾、竜ヶ崎遺跡、菅場遺跡、稲荷木郷遺跡等がある。また、古墳は集落跡と思われる遺跡に付随するように存在している。結城台地上の貝塚古墳⁽¹⁵⁾、中坪古墳群⁽¹⁶⁾、郷原古墳⁽¹⁹⁾、七塚古墳群⁽²²⁾、横曾根下宿古墳⁽²⁶⁾、前原志部古墳群⁽²⁸⁾、猿島台地上の剣崎古墳群⁽³⁹⁾がある。その他にも、前原遺跡、貝塚甲遺跡、西浦遺跡、竜ヶ崎遺跡、菅場遺跡からは埴輪片が採集されており、かつては古墳が存在していたものと思われる。鬼怒川西岸の舌状台地縁辺部に位置する貝塚古墳は円墳で、1958年に発掘調査されている。埋葬施設は、片方の木口部に粘土塊を置いた土坑で、遺物は埴、菱等の土器や、錐形埴輪、円筒埴輪が出土している。さらに、この円墳から20m離れた地点からは、円筒埴輪2個体を使用した埴輪棺が発見されている。鬼怒川西岸の台地縁辺部に位置する七塚古墳群は現在6基の円墳が遺存しているが、かつては10数基存在しており、その中には前方後円墳も含まれている。1946年以降数次にわたって発掘調査されている。埋葬施設は、粘土椁、壁に粘土を充填した土坑、箱式石棺、小口

積み堅穴系石室及び横穴式石室とさまざまなタイプがあり、外表施設として埴輪をもつ古墳も存在している。副葬品には、鉄鏃、直刀、刀子、耳環、馬具、花形座金具、須恵器等がある。以上のような遺跡、古墳を見てみると、4世紀には既に集落が営まれていたが、古墳が出現するのは6世紀に入ってからとすることができる。

奈良・平安時代の遺跡は、結城台地上の向山遺跡、入山遺跡、安戸東遺跡、満蔵遺跡、満倉北遺跡、満倉東遺跡、虎松山遺跡(11)、貝塚甲遺跡、中坪遺跡、野村遺跡、大目台遺跡、猿島台地上の山神戸遺跡、新田遺跡(36)、茸場遺跡、岡ノ内遺跡、稲荷本郷遺跡等がある。しかし、須恵器が出土している遺跡はあまり多いとは言えず、満倉東遺跡、貝塚甲遺跡、中坪遺跡、茸場遺跡の4遺跡が存在するのみである。

中世の遺跡は、今回報告する三本松遺跡の他はすべて城郭跡である。結城台地上の羽牛城跡(49)、横曾根城跡(50)、坂巻城跡(51)、報恩寺城跡(52)、猿島台地上の坂手城跡(53)等がある。羽牛城跡、横曾根城跡、坂巻城跡は羽牛氏系の城跡と言われており、坂手城跡は長東氏系の城跡と言われている。また、報恩寺城跡は報恩寺(浄土真宗)の門徒を抱えていた城跡と言われている。概ね水海道地域は、戦国時代前期までは石下の豊田氏の支配下に置かれていたが、後期に至って豊田氏が下妻の多賀谷氏に滅ぼされるとその支配下に置かれるようになった。しかし、その支配は安定したものではなく、西あるいは南から小田原の北条氏が絶えず進出の機会を伺っていたのである。

※文中の〈 〉内の番号は表1、第2図中の該当番号と同じである。

註

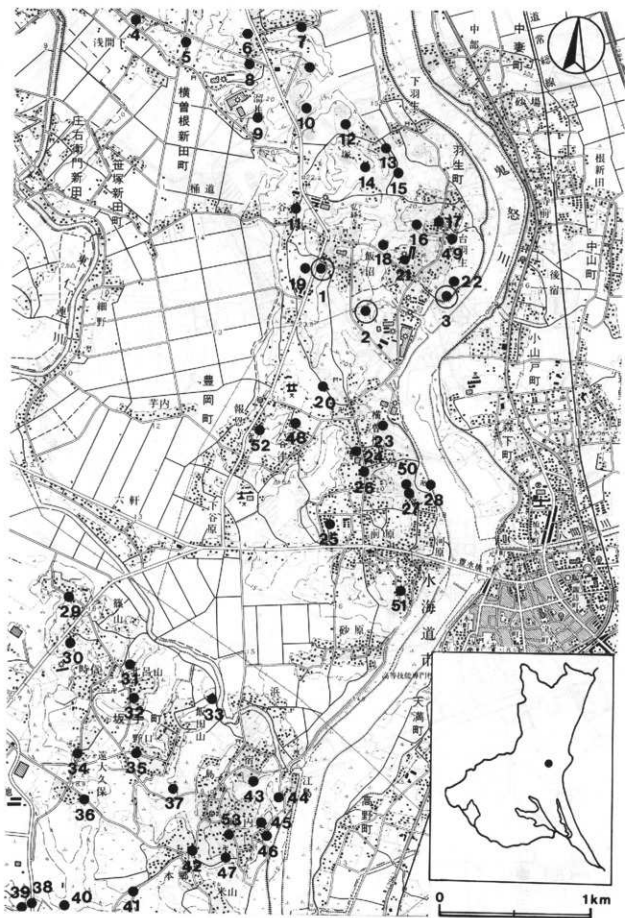
- (1) 茨城県教育委員会 「茨城県遺跡地図」 1990年3月
- (2) 水海道市埋蔵文化財総合調査会 「水海道市埋蔵文化財包蔵地分布地図」(水海道市埋蔵文化財調査報告1) 1992年3月
- (3) 青井 勝 「水海道市豊岡町貝塚古墳の発掘概報」『上智史学4』 1959年7月
- (4) 青井 勝 「茨城県水海道市羽生町七塚第1号墳の調査」『上智史学5』 1960年7月
- (5) 長谷川憲・中塚発夫 「茨城県水海道市羽生町七塚古墳群の調査」『上智史学6』 1961年7月
- (6) 上智大学史学会 「茨城県水海道市七塚古墳群の調査」 1963年9月
- (7) 吉田章一郎 「茨城県水海道市七塚古墳群」『日本考古学年報13』 1965年3月
- (8) 吉田章一郎 「茨城県水海道市羽生七塚第6号墳」『日本考古学年報15』 1967年3月

参考文献

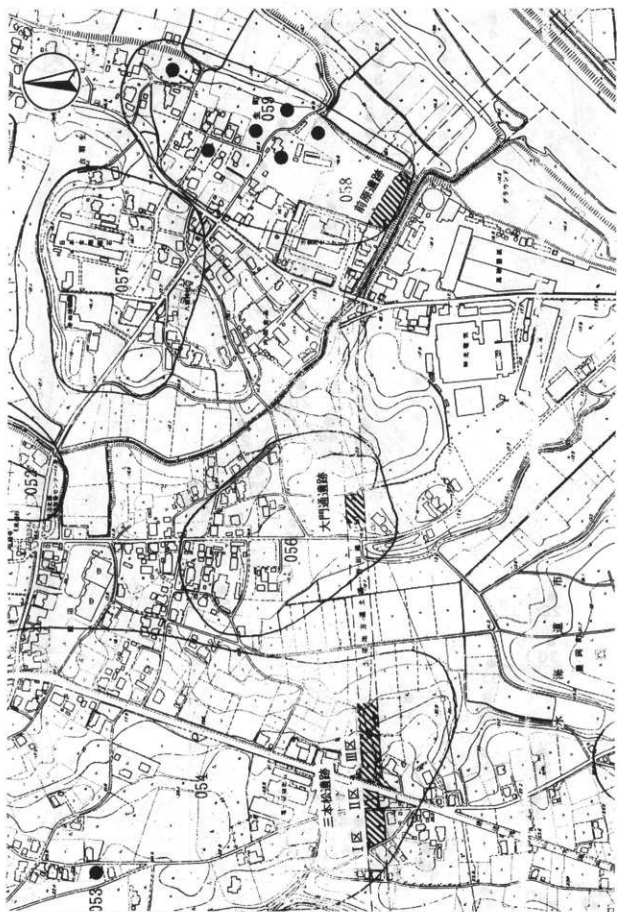
- ・水海道市史編さん委員会 「国説水海道市史」 1973年3月
- ・茨城県史編さん原始古代史部会 「茨城県史料考古資料編 古墳時代」 1974年2月
- ・茨城県教育財団 「茨城県教育財団文化財調査報告第12集」 「人生郷工業団地内埋蔵文化財調査報告書 大生郷遺跡」 1981年9月
- ・水海道市史編さん委員会 「水海道市史 上巻」 1983年3月
- ・草間常四郎 「水海道地方の古墳を語る」『歴史みつかいどう4』 1984年3月
- ・横島広一 「水海道地方に於ける戦国時代の城・館2」『歴史みつかいどう4』 1984年3月
- ・横島広一 「水海道郷土史物語」 1984年11月
- ・茨城県教育財団 「茨城県教育財団文化財調査報告第29集」 「水海道都市計画事業・内守谷土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書1 奥山B遺跡・奥山下根遺跡」 1985年3月
- ・茨城県教育財団 「茨城県教育財団文化財調査報告第31集」 「水海道都市計画事業・内守谷土地区画整理

表1 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	県遺跡番号	時代						番号	遺跡名	県遺跡番号	時代					
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良平安	中世以降				旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良平安	中世以降
①	前原遺跡	当遺跡	○		○	○			28	前原志部古墳群	6045				○		
②	大門通遺跡	当遺跡	○		○	○			29	籠沼遺跡			○		○		
③	三本松遺跡	当遺跡	○	○		○	○	○	30	籠場遺跡			○		○		
4	向山遺跡			○		○	○		31	篠山遺跡			○				
5	入山遺跡			○		○	○		32	北呂山遺跡			○		○		
6	安戸東遺跡			○			○		33	飯田山遺跡			○				
7	満蔵遺跡	3521		○		○	○		34	山神戸遺跡			○		○	○	
8	満倉北遺跡			○		○	○		35	野口遺跡			○				
9	満倉南遺跡	3522				○			36	新田遺跡			○			○	
10	満倉東遺跡			○		○	○		37	西浦遺跡			○		○		
11	虎松山遺跡			○			○		38	剣崎遺跡					○		
12	貝塚乙遺跡			○					39	剣崎古墳群					○		
13	貝塚甲遺跡	2364		○		○	○		40	竜ヶ崎遺跡			○		○		
14	貝塚丁遺跡			○					41	萱場遺跡					○	○	
15	貝塚古墳	2524				○			42	本郷遺跡			○				
16	中坪古墳群	6049				○			43	宿遺跡			○				
17	中坪遺跡	6048		○		○	○		44	弁天遺跡			○	○			
18	寿亀山遺跡			○				○	45	嶋遺跡			○				
19	郷原古墳	6047				○			46	岡ノ内遺跡			○			○	
20	観音堂遺跡			○					47	稲荷本郷遺跡			○		○	○	
21	野村遺跡			○		○	○		48	谷津遺跡	6046		○				
22	七塚古墳群	2358				○			49	羽生城跡							○
23	稲荷山遺跡		○	○					50	横曾根城跡							○
24	下宿北遺跡			○					51	坂巻城跡							○
25	大日台遺跡			○		○	○		52	報恩寺城跡							○
26	横曾根下宿古墳	2359				○			53	坂手城跡							○
27	下宿屋敷遺跡	6044		○													

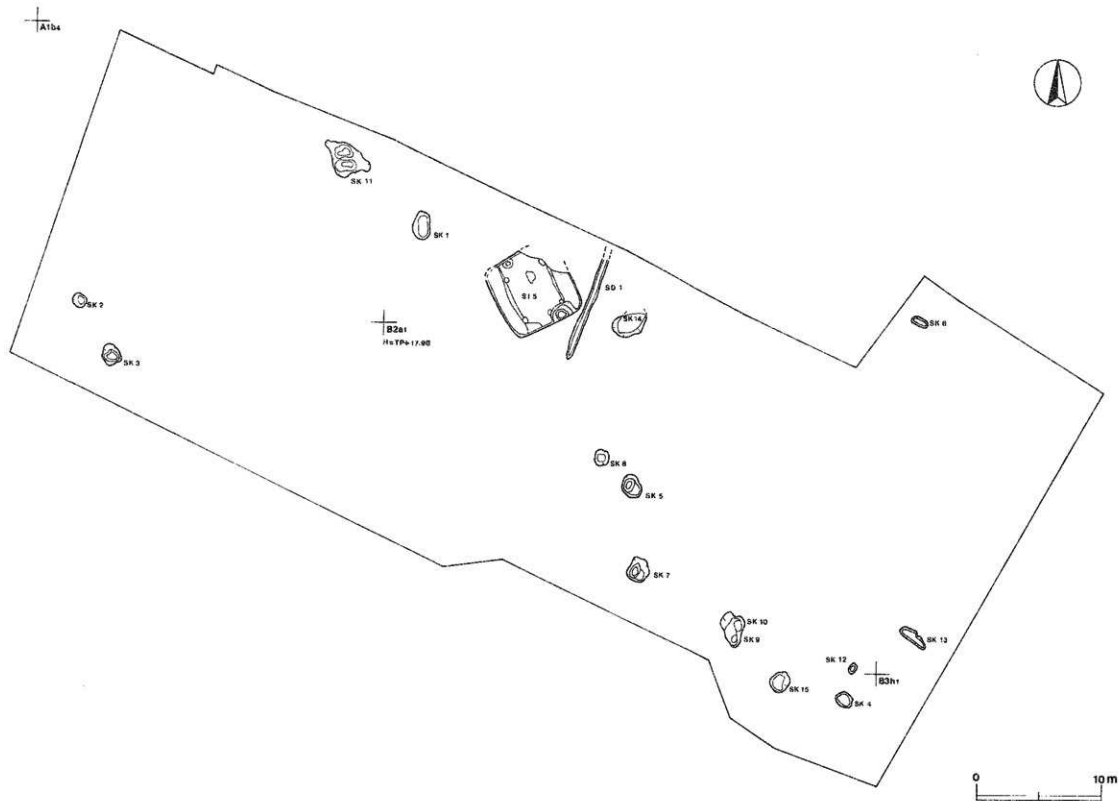


第2図 周辺遺跡分布図



第3図 前原・大門通・三本松遺跡周辺地形図

『水海道市埋蔵文化財包蔵地分布地図』に加筆・転載



第4図 前原遺跡遺構配置図

第3章 前原遺跡

第1節 遺跡の概要

前原遺跡は、水海道市の西北部に位置し、東側を鬼怒川の本流に、西側を北から入り込んだ鬼怒川水系の小支谷によって挟まれた東西が狭い結城台地上に立地している。台地の標高は17~18mで、鬼怒川低地面との比高は7~8m、西側谷津低地面との比高は3~5mである。調査区域は東西約92m、南北約64m、面積3,019㎡で、現況は山林である。当遺跡は、縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡であり、遺跡内には七塚古墳群も存在している。

平成5年2~3月に調査区の北側隣接地の発掘調査が水海道市教育委員会によって行われ、古墳時代前期の竪穴住居跡4軒、古墳時代後期の古墳4基が確認された。¹⁾

今回の調査では、古墳時代前期の竪穴住居跡1軒、時期不明の上坑15基及び溝1条を確認した。この住居跡は、水海道市教育委員会の調査の際に確認された住居跡群と時期的にもほぼ同じで、同一集落を構成していたものと思われる。²⁾

遺物は、遺物収納箱(60×40×20cm)に4箱出土した。古墳時代の遺物としては、住居跡から高坏、装飾高坏、器台、埴、壺、小形丸底甕、甕、小形甕及び付台甕等の土師器や、炭化米、炭化種子が出土している。その他に、縄文時代中期~晩期の土器片及び石鏃、古墳時代の須恵器片、埴輪片及び管状土師器等が、表土層、遺構確認面及び覆土中から出土している。

註

- (1) 平成5年2~3月に水海道市教育委員会によって行われた前原遺跡の発掘調査は、現在報告書作成中である。
- (2) 調査後の混乱を避けるため、水海道市教育委員会と協議した結果、水海道市教育委員会が行った調査を「前原遺跡第1次調査」(S1-1~4)、当教育財団が行った調査を「前原遺跡第2次調査」(S1-5)とすることとなり、遺構番号は第1次、第2次と継続して付けることとなった。

第2節 基本層序の検討

前原遺跡においては、調査区北部のB2a7区にテストピットを設定し、第5図に示すような土層の堆積状況を確認した。

第1層は、表土直下の褐色の漸移層で、厚さは25~30cmである。

第2層は、やや暗い褐色のブラックバンドで、厚さは15~20cmである。

第3層は、第2層の影響を受けた褐色のハードローム層で、厚さは10~25cmである。

第4層は、やや明るい褐色のハードローム層で、厚さは25~40cmである。

第5層は、硬く締まった褐色のハードローム層で、厚さは40~60cmである。

第6層は、ハードローム層間の褐色の漸移層で、厚さは15~25cmである。

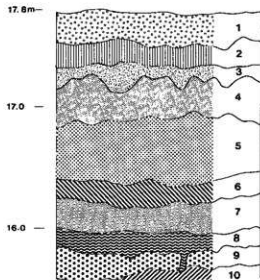
第7層は、第5層よりやや暗いハードローム層で、厚さは20~30cmである。

第8層は、緻密に詰まった褐色のローム層で、厚さは10～20cmである。

第9層は、鉄分を多く含むにぶい褐色のローム層で、締まりも粘性もあり、厚さは10～30cmである。

第10層は、第9層よりやや明るく白みを帯びたローム層で、締まりも粘性もある。

前原遺跡の遺構は、表土下30～50cmの第1層上面で確認した。



第5図 前原遺跡基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査では、調査区の北部中央付近から竪穴住居跡1軒を確認した。焼失家屋で、時期は古墳時代前期のものと考えられる。形状は隅丸方形で、東西両壁側にベッド状の高まりを有している。以下、確認した遺構と遺物について記載する。

(1) 竪穴住居跡

第5号住居跡（第6・7区）

位置 調査区の北部、A2j区。

規模と平面形 長軸6.40m、短軸6.16mの隅丸方形。北コーナーは攪乱を受けている。

主軸方向 N-29°-W

壁 壁高は32～50cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。P₅の掘り込み角度より、当初の壁高は90～100cmと推定される。

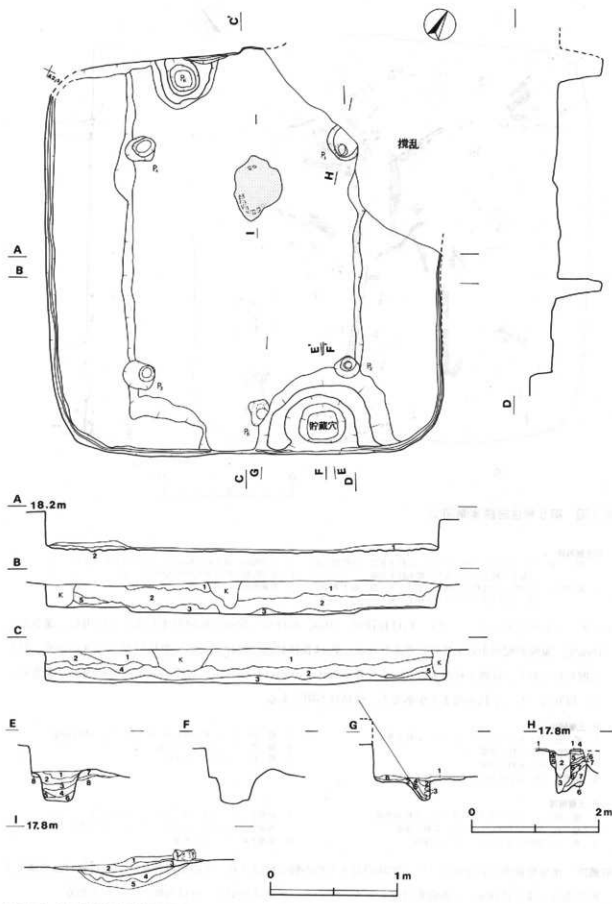
壁溝 貯蔵穴、P₅の部分を除き、壁下を周回している。上幅約10cm、下幅約5cm、深さ約5cmで、断面形は「U」字形をしている。

床 東西両壁側にベッド状の高まりを持つ。中央部は平坦で、硬く踏み固められている。貯蔵穴、P₆を囲むように、それぞれ「U」字状の高まりがある。ベッド状遺構は荒掘りした住居の底面に土を盛って構築されており、床はその後さらに土を貼って構築されている。

ベッド状遺構・貼床土層解説

- 1 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量
- 2 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量、やや軟らかい

炉 中央付近からやや北寄りに付設され、平面形は長径90cm、短径72cmの不整楕円形で、床面を10cm掘り穿めた地床である。炉床面は火熱を受け、赤変硬化している。灰覆土中から炭化米、炭化種子が検出されている。



第6图 第5号住居跡实测图(1)



第7図 第5号住居跡実測図(2)

炉土層解説

- | | | | |
|-------|--|--------|-------------------|
| 1 褐色 | ローム中・小ブロック・ローム粒子多量、炭化物・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量 | 3 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、炭化物・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | 炭化物・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子多量、ローム小ブロック・ローム粒子少量 | 4 赤褐色 | 炉床面下の火熱を受けた層 |
| | | 5 明黄褐色 | ローム主体 |

ピット 6か所 (P₁~P₆)。P₁~P₄は長径40~50cm、短径35~40cmの楕円形または不整楕円形、深さ55~70cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。P₅は長径42cm、短径32cmの不整楕円形、深さ36cmで、斜めに掘られており、位置から出入口ピットと考えられる。P₆は長径46cm、短径40cmの不整楕円形、深さ10cmで、周りに「U」字状の高まりがあるが、性格は不明である。

P₁土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------|------|----------------------|
| 1 褐色 | ローム中・小ブロック・ローム粒子多量 | 5 褐色 | ローム大・中・小ブロック・ローム粒子中量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量 | 6 褐色 | ロームブロック主体 |
| 3 褐色 | ローム粒子多量 | 7 褐色 | ソフトローム主体 |
| 4 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量 | | |

P₆土層解説

- | | | | |
|------|--------------------|-------|--------------------|
| 1 褐色 | ローム中・小ブロック・ローム粒子多量 | 4 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量 |
| 2 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 | 5 暗褐色 | ローム中・小ブロック・ローム粒子中量 |
| 3 褐色 | 地山の落下ロームブロック主体 | 6 暗褐色 | ローム粒子少量 |

貯蔵穴 南東壁側中央右寄りの「U」字状の高まりの内側に付設され、平面形は長軸50cm、短軸44cmの隅丸方形である。深さは48cmで、断面形は逆台形をしている。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

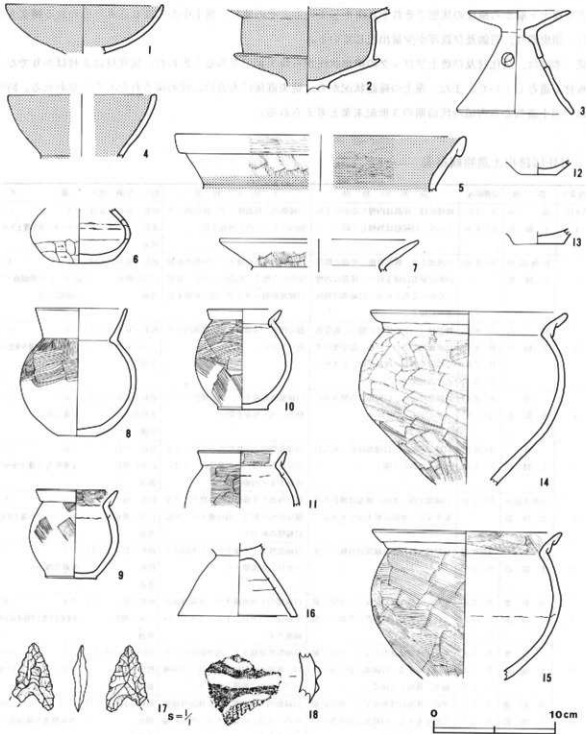
貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|-------|--|-------|----------------------|
| 1 褐色 | ローム中・小ブロック・ローム粒子多量、炭化物・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量 | 4 褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・炭化粒子・焼土少量 | 6 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 3 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子多量 | 7 褐色 | ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量 |
| | | 8 暗褐色 | ローム粒子少量 |

覆土 5層からなる。上層は自然堆積であるが、下層は人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|--|-------|--|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 | 4 暗褐色 | 多量、ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 2 褐色 | ローム中・小ブロック・ローム粒子多量、炭化物・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量 | 5 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 | 炭化材・炭化物・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子 | | ローム小ブロック・ローム粒子多量、炭化物・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量 |



第8図 第5号住居跡出土遺物実測・拓影図

遺物 図示した土師器及びそれ以外の土師器片が覆土中層から床面にかけて多量に出土している。第8図1の高坏は西コーナー寄りの覆土下層から逆位の状態で、2の菱飾高坏は南コーナー寄りの床面直上から正位の状態で、3の器台はP4付近及び北東壁寄りの床面直上から横位の状態で、6の小形丸底壺は西コーナー寄りの覆土中層から逆位の状態でそれぞれ出土している。また、8の小形甕は南東壁寄りの覆土下層及び貯蔵穴の覆土から散乱した状態で、9の小形甕は東コーナー寄りの覆土下層から横位の状態で、10の小形甕は南東壁寄りの床面直上から正位の状態で、11の小形甕は南東壁寄りの覆土下層、中央部の床面直上及び貯蔵穴の覆土から散乱した状態で、14及び15の台付甕はP4付近の床面直上から逆位の状態で、16の台付甕は南東壁寄り覆土下層から横位の状態でそれぞれ出土している。その他に、覆土中から流れ込みと思われる縄文土器片、須恵器片、石炭及び鉄滓が少量出土している。

所見 本跡は、炭化材及び焼土ブロックの検出状況から焼失家屋であると思われ、炭化材は九材ばかりでなく、板材も遺存していた。また、覆土の確認状況から、焼失直後に人為的に埋め戻されたものと思われる。時期は、出土遺物から古墳時代前期の3世紀末葉と考えられる。

第5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(mm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第8図1	高坏 土師器	A 13.0 B (4.0)	脚部欠損。耳部は内押しながら立ち上がり、口縁部は外傾して開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。内・外面赤色。	砂粒・長石・雲母 赤色	P 1 30% 西コーナー寄り覆土下層
2	菱飾高坏 土師器	B (6.3)	口縁部上平。脚部欠損。坏部と脚部の間に疑似口縁を持つ。坏部は内押しながら立ち上がり、口縁部は外反ぎみに開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面傾位のヘラ焼き、内面ヘラナデ。疑似口縁部外面ヘラナデ。内・外面赤色。	砂粒・長石・雲母 にふい・褐色 普通	P 2 40% 南コーナー床面直上 外面傾付葺
3	器台 土師器	A 8.6 B 8.5 D 9.8 E 6.3	脚部は「ハ」の字状に開く。器受部は直線的に立ち上がる。器受部の中心に孔を有し、脚部中位にも透かし孔が2孔開く。	器受部内・外面横ナデ。脚部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英 にふい・黄褐色 普通	P 3 95% P4付近・北東壁寄り貯蔵穴直上
4	埴土師器	A [12.4] B (5.1)	口縁部の破片。口縁部は内反ぎみに立ち上がる。	口縁部外面横ナデ。内面傾位のヘラ焼き。内・外面赤色。	砂粒・長石・雲母 赤褐色 普通	P 4 20% 貯蔵穴覆土
5	壺 土師器	A [24.0] B (4.5)	口縁部の破片。口縁部は折り返し口縁で、外傾して開く。	口縁部外面上半横位のハケ目、下半斜位のハケ目、内面傾位のハケ目。外面下半・内面赤色。	砂粒・雲母 にふい・褐色 普通	P 6 5% 北東壁寄り覆土中層
6	小形丸底壺 土師器	B (4.5)	口縁部欠損。丸底。体部は球長の球形を呈し、中位に最大径を有する。	体部外面上半横位のヘラ焼き、下半傾位のヘラ割り、内面横ナデ。内面に輪積み痕有り。	砂粒・長石 褐色 普通	P 5 40% 西コーナー寄り覆土中層
7	甕 土師器	A [16.4] B (2.6)	口縁部の破片。口縁部は外傾して開く。	口縁部外面上半横ナデ、下半斜位のハケ目、内面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P 7 5% 貯蔵穴覆土
8	小形甕 土師器	A 7.6 B 10.7 C 3.2	平底。体部は球形を呈し、中位に最大径を有する。口縁部は外傾して開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面上半斜位のハケ目、下半ヘラナデ、内面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 にふい・褐色 普通	P 8 80% 南東壁寄り覆土下層・貯蔵穴直上
9	小形甕 土師器	A 6.8 B 7.3 C 4.6	平底。体部は球形を呈し、中位に最大径を有する。口縁部は折り返し口縁で、外傾して開く。	口縁部外面横ナデ。内面傾位のハケ目。体部外面傾位のハケ目、内面横ナデ。内面に輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母 褐色 普通	P 9 100% 西コーナー寄り覆土下層
10	小形甕 土師器	A 5.2 B 8.3 C 4.2	平底。体部は球形を呈し、中位に最大径を有する。口縁部は折り返し口縁で、外傾して開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面傾位のハケ目、内面横ナデ。内面に輪積み痕有り。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P 10 95% 南東壁寄り床面直上

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・地味	備考
第8図 11	小形差 土師器	A 7.4 B(4.5)	底部欠損。体部は内凹しながら立ち上がる。1線部は折り返し口縁で、外縁して開く。	口縁部外面横ナデ、内面横段のハケ目。体部外面斜位のハケ目、内面横ナデ。内面に輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英 にふい棕色 普通	F11 30% 兵庫県西宮市下野中・中央部 部表面直土・野庭式覆土
	小形差 土師器	B(1.0) C 3.0	底部の破片。平底。		砂粒・長石・雲母 黄棕色 普通	F12 10% 北宮り覆土
13	小形差 土師器	B(0.9) C(4.2)	底部の破片。平底。		砂粒・長石・雲母 棕色 普通	F13 10% F付近床面直土
	台付差 土師器	A 16.4 B(14.3)	台部欠損。体部は瓶形を呈し、上位に最大径を有する。1線部は折り返し口縁で、外反ぎみに開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面斜位のハケ目、内面ヘラナデ。口縁部外面に明瞭な輪積み痕有り。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	F14 70% F付近床面直土
15	台付差 土師器	A 15.8 B(12.3)	台部欠損。体部は瓶形を呈し、上位に最大径を有する。口縁部は折り返し口縁で、外反ぎみに開く。	口縁部外面横ナデ、内面斜位のハケ目。体部外面斜位のハケ目、内面ヘラナデ。内面に輪積み痕有り。1線部外面に明瞭な輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母 棕色 普通	F15 50% F付近床面直土
	台付差 土師器	B(6.0) D 9.8 E 5.0	台部の破片。台部は「ハ」の字状に開く。	台部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 棕色 普通	F16 30% 兵庫県西宮市下野中

図版番号	種類	計測値				現存率 (%)	石質	出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)				
第8図17	石 鏝	1.8	(1.1)	0.4	(0.5)	90	チャート	西コーナ-寄り覆土中層	Q1

第8図18は縄文時代中期後葉の土器片で、縄文と帯帯が施されている。

表2 前原遺跡住居跡一覧表

住居跡 番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	内 部 施 設					壁土 入否	主な遺物	備 考	
							壁溝	土柱穴	貯蔵穴	ピット	出入口				炉・竈
5	A2)	N 29° W	隅丸方形	6.49×6.16	32~50	ベッド状	1	4	1	1	1	加1	人形	1線部(内面)・雲母(内面)・雲母(外表面)・石英(外表面)・石英(外表面)・石英(外表面)	古墳時代前期(3世紀前半)・縄文時代後葉

2 その他の遺構と遺物

今回の調査では、土坑15基、溝1条を確認した。以下、確認した遺構と遺物について記載する。

(1) 土坑

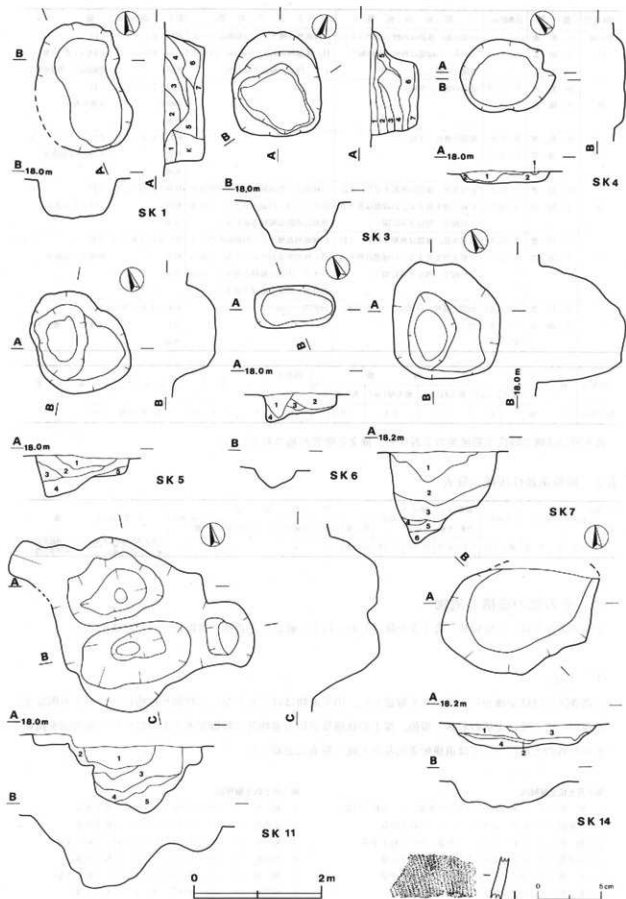
調査区のはほぼ全域から土坑15基を確認した。出土遺物はほとんどなく、時期や性格についても不明な部分が多い。ここでは土坑の形状、規模、覆土の状態及び出土遺物等に特徴があるものについて実測図を掲載し、それ以外の土坑については遺構配置図及び土坑一覧表に記載した。

第1号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム大・中・小ブロック多量、ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子中量
- 3 褐色 ローム中・小ブロック多量、ローム粒子中量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック多量、ローム粒子中量
- 5 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子中量
- 6 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 7 褐色 ローム主体

第3号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量
- 2 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子中量
- 3 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量
- 4 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子中量
- 5 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量
- 6 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量
- 7 褐色 ローム主体



第9圖 土坑実測・出土遺物拓影圖

第4号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム主体

第5号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子中量
- 3 褐色 ローム粒子少量
- 4 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 5 褐色 ローム主体

第6号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量
- 4 褐色 ローム主体

第7号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
- 2 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量
- 3 暗褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子中量
- 4 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量
- 5 暗褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子中量
- 6 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量

第11号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量、ローム大・中・小ブロック少量
- 2 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量
- 3 褐色 ローム中・小ブロック多量
- 4 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量
- 5 褐色 ローム主体

第14号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子多量
- 3 黄褐色 ローム粒子多量
- 4 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量

土坑出土遺物観察

第9図1は第11号土坑の覆土中から出土した古墳時代後期の須恵器甕の体部片で、外面に平行叩きが施されている。

表3 前原遺跡土坑一覧表

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	長 幅		傾 斜	傾 斜 角度(°)	傾 斜 方向	土 質	主 要 遺 物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(cm)						
1	B11	N-2°-W	不整形円形	2.06 × 1.33	63	外傾	平坦	人為	土師器片		
2	A1j	N-52°-W	円形	1.02 × 1.00	59	外傾	円凸	自然			
3	B2h	N-25°-W	楕円形	1.68 × 1.40	75	外傾	平坦	人為	土師器片		
4	B2h	N-45°-W	不整形円形	1.50 × 1.12	17	傾斜	平坦	自然			
5	B2d	N-57°-W	円形	1.60 × 1.55	68	外傾	円凸	自然	土師質土器片		
6	B3a	N-65°-W	楕円形	1.25 × 0.64	31	傾斜	圓状	自然			
7	B2c	N-29°-E	円形	1.80 × 1.71	140	外傾	円凸	人為	縄文土器片・土師器片・須恵器片・ 土師質土器片・黒曜石製片		
8	B2d	N-2°-W	円形	1.25 × 1.08	58	外傾	円凸	人為			
9	B2g	N-15°-E	不定形	(1.13)×(1.13)	53	外傾	平坦	自然			
10	B2g	N-10°-W	不定形	(1.35)×(1.08)	55	外傾	平坦	自然			
11	A1k	N-90°-E	不定形	3.00 × 2.75	112	外傾	円凸	自然	土師器片・須恵器片(変)		
12	B2o	N-5°-E	楕円形	0.70 × 0.56	27	傾斜	圓状	自然			
13	B3h	N-54°-E	不整形長方形	2.48 × 0.80	15	傾斜	圓状	自然			
14	B2b	N-72°-E	楕円形	2.53 × 1.69	41	傾斜	圓状	人為	縄文土器片・土師器片・須恵器片		
15	B2h	N-3°-E	円形	1.53 × 1.45	75	外傾	平坦	自然			

(2) 溝

当遺跡からは溝1条を確認した。出土遺物はなく、時期や性格についても不明な部分が多い。以下、確認した溝について記載する。

第1号溝(第10図)

位置 調査区の北部から中央部、A2is～B2a区。

規模と形状 確認できた部分は全長8.5mで、直線的に延びており、北端部は調査区外に続いている。上幅は50～65cm、下幅は25～40cm、深さは5cmで、断面形は皿状をしている。

方向 N-20°-E

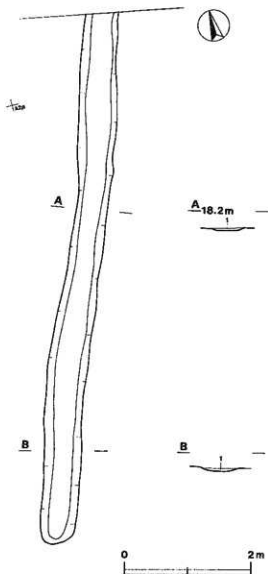
覆土 1層からなる。自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子中量

遺物 本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡の時期及び性格については不明である。



第10図 第1号溝実測図

3 遺構外出土遺物

当遺跡からは、表土層及び遺構確認面から遺構に伴わない遺物が出土している。ここでは、縄文土器片、古墳時代の須恵器片、埴輪片及び管状土鍾など特徴的なものについて実測図及び拓影図を掲載し、解説等は一覧表に記載した。

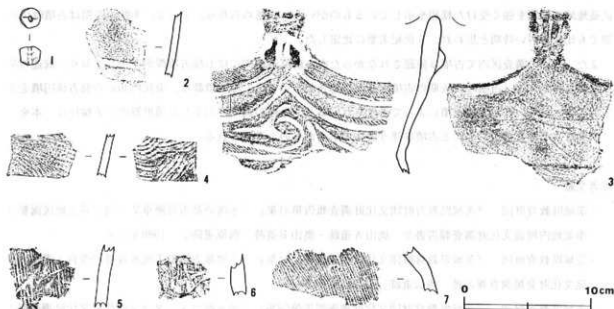
遺構外出土遺物観察表

図録番号	種別	計測値					現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第11図1	管状土鍾	1.5	1.6	1.6	0.5	(3.3)	90	B2a区付近確認面	図1

第11図2は縄文時代後期中葉の土器片で、縄文と沈線文が施されている。3は縄文時代晩期の安行3a式の口縁部片である。

4は古墳時代後期の須恵器製の体部片で、櫛櫛文と平行叩きが施されており、内面に同心円状の当て具痕を残している。5、6は古墳時代後期の埴輪片で、縦位のハケ目が施されている。7は古墳時代後期の形象埴輪

の台部片で、斜位のハケ目が施されている。



第11図 遺構外出土遺物実測・拓影図

第4節 まとめ

今回の調査で確認した遺構は、竪穴住居跡1軒、土坑15基及び溝1条である。ここでは、主として古墳時代の遺構と出土遺物についての概要を述べ、まとめとする。

縄文時代

中期後葉～晩期の縄文土器片や石鏡が少量出土している。しかし、今回の調査では縄文時代の遺構は確認されなかった。

古墳時代

当遺跡の中心となる時期で、竪穴住居跡1軒を確認した。第5号住居跡は焼失家屋で、時期は前期の3世紀末葉と考えられる。平成5年2～3月に水海道市教育委員会によって行われた「前原遺跡第1次調査」の際には、本跡とほぼ同時期と考えられる竪穴住居跡4軒が確認されている。また、昭和35年に上智大学によって行われた七塚第1号墳の発掘調査の際にも、1号墳に先行する前期の竪穴住居跡1軒が確認されている。これらの住居跡群は、ほぼ同時期に同一の台地上に存在していたものと思われ、当遺跡はある程度のまとまりをもった古墳時代前期の集落跡と考えられる。

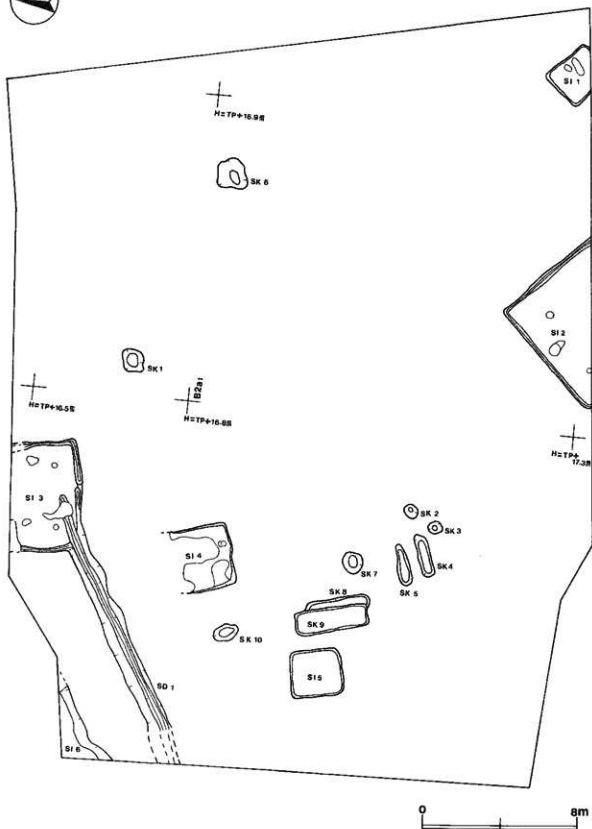
第5号住居跡は、隅丸方形で、東西両壁側にベッド状の高まりを有している。土器の組成を見てみると、土師器の高坏、装飾高坏、器台、埴、壺、小形丸底壺、甕、小形甕及び台付甕とバラエティーに富んでいる。台付甕は、口縁部外面に明瞭な輪積み痕を有しており、これには装飾的な意味合いがあったものと考えられる。このような口縁部に輪積み痕を有する台付甕は、茨城県内では同じ水海道市奥山A遺跡の第2号住居跡、つくば市境松遺跡の第22・23・34号住居跡、竜ヶ崎市長峰遺跡の第31号住居跡等にその類例が認められる。また、

高坏と裝飾高坏は、上毛地域及び畿内等の他地域の影響をうかがわせる資料である。以上のような本跡の土器群には、常陸地域とは異なった、いわゆる南関東系の弥生時代後期後葉から続く古い様相、特に下総あるいは武蔵地域の影響を強く受けた様相を示しているものがいくつか認められる。よって、本跡の時期は古墳時代前期でも比較的古い時期と思われ、3世紀末葉に比定した。

また、今回の調査区内で古墳は確認されなかったが、前原遺跡内には七塚古墳群が存在しており、前述の第1次調査の際には、古墳時代後期の古墳4基が確認されている。七塚古墳群は、全長約30mの前方後円墳を盟主的古墳として、10数基の古墳によって構成されており、今回の調査で出土した須恵器片や埴輪片は、本来はこの七塚古墳群を構成している古墳に伴う遺物であったものと考えられる。

参考文献

- ・茨城県教育財団 『茨城県教育財団文化財調査報告第31集』 「水海道都市計画事業・内守谷土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2 奥山A遺跡・奥山B遺跡・西原遺跡」 1986年3月
- ・茨城県教育財団 『茨城県教育財団文化財調査報告第41集』 「主要地方道取手筑波線道路改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書 境松遺跡」 1987年3月
- ・茨城県教育財団 『茨城県教育財団文化財調査報告第58集』 「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書19 長峰遺跡」 1990年3月



第12図 大門通遺跡遺構配置図

第4章 大門通遺跡

第1節 遺跡の概要

大門通遺跡は、水海道市の北西部に位置し、東側を北から入り込んだ鬼怒川水系の小支谷に、西側を南から入り込んだ鬼怒川水系の小支谷によって挟まれた東西が狭い結城台地上に立地している。台地の標高は16~18mで、東側谷津低地面との比高は2~5m、西側谷津低地面との比高は4~6mである。調査区域は東西約44m、南北約36m、面積1,137㎡で、現況は山林、畑である。当遺跡は、縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡である。

今回の調査では、古墳時代中期の竪穴住居跡6軒、近世の溝1条と、時期不明の土坑10基を確認した。

遺物は、遺物収納箱(60×40×20cm)に4箱出土した。古墳時代の遺物としては、住居跡から坏、椀及び壺等の土師器や、土玉及び管状土鏝等の土製品、炭化米、炭化種子が出土している。近世の遺物としては、溝から平底かわらけ等の土師質土器及び瀬戸等の陶器が出土している。その他に、縄文時代前期~後期の土器片及び磨石、近世の泥面子、近代の磁器及び半銭銅貨等が、表土層、遺構確認面及び覆土中から出土している。

第2節 基本層序の検討

大門通遺跡においては、調査区北部のB1b区にテストピットを設定し、第13図に示すような上層の堆積状況を確認した。

第1層は、表土直下の褐色の漸移層で、厚さは25~30cmである。

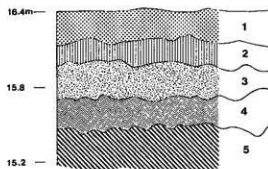
第2層は、褐色のソフトローム層で、厚さは15~20cmである。

第3層は、やや明るい褐色のハードローム層で、厚さは15~30cmである。

第4層は、やや暗い褐色のブラックバンドで、厚さは20~30cmである。

第5層は、緻密に詰まった褐色のローム層である。

大門通遺跡の遺構は、表土下30~50cmの第1層上面で確認した。



第13図 大門通遺跡基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査では、調査区のはほぼ全域から竪穴住居跡6軒を確認した。大半の住居跡は、一部が調査区外に延びていたり、木根による擾乱を受けていたりして、遺存状態は良好とは言えない。時期は6軒とも古墳時代中期のものと考えられる。以下、確認した遺構と遺物について記載する。

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡(第14図)

位置 調査区の南東部, B2e3区。

規模と平面形 長軸2.67m, 短軸2.22mの方形。南コーナーは調査区外に延びており, 北東壁の一部は木根による攪乱を受けている。

主軸方向 N-43°-W

壁 壁高は2~5cmで, ほほ垂直に立ち上がる。

床 平坦であるが, 踏み固められている面はあまり認められない。

炉 2か所。炉1は中央付近からやや東寄りに付設され, 平面形は長径104cm, 短径36cmの不整楕円形で, 床面を10cm掘り窪めた地床炉である。炉床面は火熱を受け, 赤変硬化している。炉2は北東壁寄りに付設され, 平面形は長径40cm, 短径30cmの不整楕円形で, 床面を4cm掘り窪めた地床炉である。炉床面は火熱を受け, 赤変硬化している。

炉1土層解説

1 暗赤褐色 焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子多量, ローム粒子少量

炉2土層解説

1 暗赤褐色 焼土中・小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子多量, ローム粒子少量

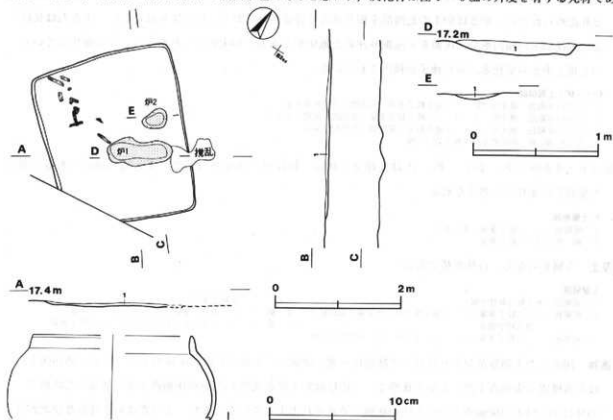
覆土 1層からなる。覆土が極めて薄いため, 自然堆積か, 人為堆積か不明である。

土層解説

1 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子中量, 炭化物・炭化粒子・焼土粒子少量

遺物 図示した土師器及びそれ以外の土師器片が覆土中から少量出土している。第14図1の甕は北コーナー寄りの覆土中から出土している。その他に, 覆土中から流れ込みと思われる縄文土器片が少量出土している。

所見 本跡は, 炭化材の検出状況から焼失家屋であると思われる, 炭化材は径4~6cmの外皮を有する丸材であ



第14図 第1号住居跡・出土遺物実測図

った。また、柱穴は1か所も確認されず、規模が一辺2.5m前後の小形住居のタイプと思われる。時期は、出土遺物から古墳時代中期の5世紀末葉と考えられる。

第1号住居跡出土遺物観察表

図面番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第14図	鉢	A(12.6)	底部欠損。底部は内側しなら立ち	11線部外面横ナデ、内周縁位のヘラ	砂粒・長石・出母	20%
1	土師器	B(6.7)	上がり、11線部は直立きみに開く。	磨き。体部内・外面ヘラナデ。	褐色 香濃	北コーナー寄り覆土

第2号住居跡(第15図)

位置 調査区の南部、B2c2区。

規模と平面形 長軸6.93m、短軸(5.7)mの方形と思われる。南側半分は調査区外に延びている。

主軸方向 N-40°-W

壁 壁高は26-28cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

登溝 壁下を全周している。上幅約15cm、下幅約8cm、深さ約10cmで、断面形は「U」字形をしている。

壁土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量、軟らかい
- 2 褐色 ローム小ブロック、ローム粒子中量

床 平坦で、壁際以外は全体的に硬く踏み固められている。

炉 2か所。炉1は北西壁寄りに付設されているが、北西部をか2によって掘り込まれており、か2よりは古い。平面形は長径78cm、短径40cmの楕円形で、床面を6cm掘り窪めた地床炉である。炉床面の赤変硬化はあまり認められない。か2はか1の北西部を掘り込んで付設されており、か1よりは新しい。平面形は長径58cm、短径45cmの楕円形で、床面を6cm掘り窪めた地床炉である。炉床面は火熱を受け、赤変硬化している。か2覆土中から炭化米、炭化種子が検出されている。

炉1・炉2土層解説

- 1 濃い赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量、炭化物・炭化粒子少量
- 2 濃い赤褐色 焼土中・小ブロック・焼土粒子多量、炭化物・炭化粒子少量
- 3 濃い赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 4 暗赤褐色 炉床面下の火熱を受けた層

ピット 2か所(P₁、P₂)。P₁、P₂は長径30-40cm、短径28-38cmの円形で、深さ50-56cmである。規模や配列から主柱穴と考えられる。

P土層解説

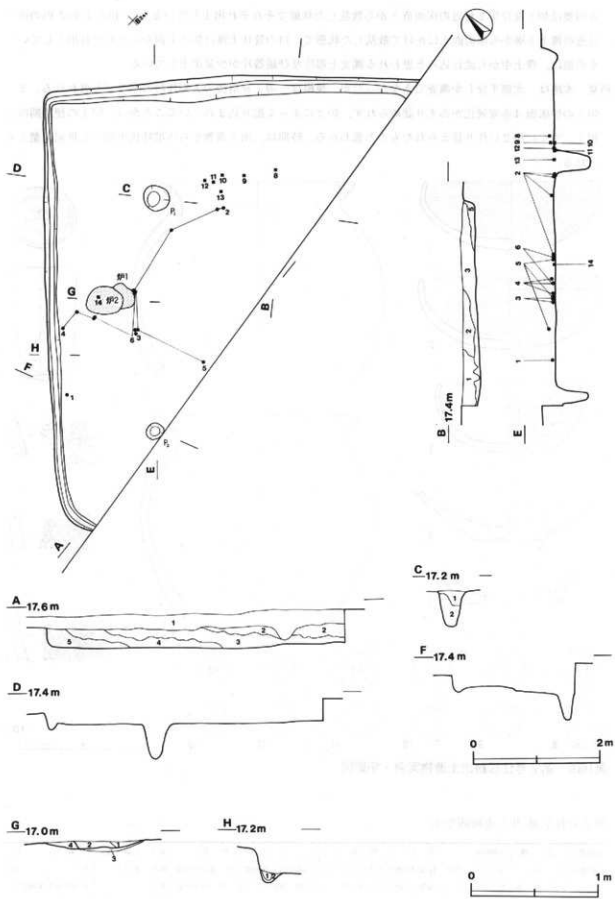
- 1 暗褐色 ローム粒子多量、軟らかい
- 2 褐色 ローム粒子多量

覆土 5層からなる。自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 表土層(耕作土層)
- 2 暗褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック少量、炭化粒子
・焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック・炭化粒子・焼
- 4 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量
- 5 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量

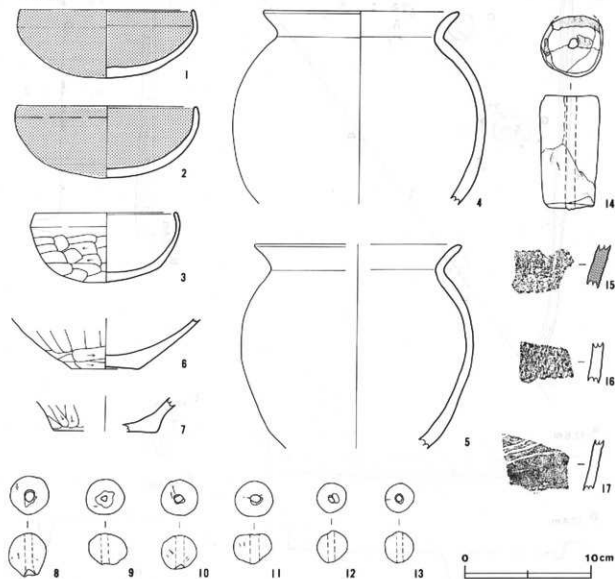
遺物 図示した土師器及びそれ以外の土師器片が覆土中層から床面にかけて中量出土している。第16図1の坏は北西壁寄り床面直上から正位の状態で、2の坏はか1付近及びP₁付近の床面直上から散乱した状態で、3の坏はか1付近の床面直上から正位の状態でそれぞれ出土している。また、4の甕はか2付近及び北西壁寄りの床面直上から散乱した状態で、5の甕はか2付近の床面直上及び中央部の覆土中層から散乱した状態で、



第15图 第2号住居跡实测图

6の甕は炉1及び炉2付近の床面直上から散乱した状態でそれぞれ出土している。8-13の土玉はP1の南東付近の覆土下層から床面直上にかけて散乱した状態で、14の管状土鍾は炉2上面からそれぞれ出土している。その他に、覆土中から流れ込みと思われる縄文土器片及び磁器片が少量出土している。

所見 本跡は、北側半分しか調査できなかったが、規模は一辺7m前後の大形住居のタイプと思われる。また、炉1の炉床面は赤変硬化があまり認められず、炉2によって掘り込まれていることから、炉1の使用期間は短く、すぐに炉2に作り替えられたものと思われる。時期は、出土遺物から古墳時代中期の5世紀末葉と考えられる。



第16図 第2号住居跡出土遺物実測・拓影図

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第16図 1	坏 土器	A 13.8 B 5.4	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底部内・外面ヘラナデ。内・外面赤彩。	砂粒・雲母 赤色 普通	F 2 80% 北西壁寄り床面直上

図版番号	器種	寸法(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・紋成	備考
第16回 2	土師器	A 14.2	丸底。体部は内押しながら立ち上がり、口縁部は直立ちみに開く。	口縁部内・外面横ナテ。体部及び底部内・外面ヘラナテ。内・外面赤彩。	砂粒・赤母 赤褐色 普通	P 3 30% P1・P2付近床面直上
		B 5.7				
3	土師器	A 11.2	丸底。体部は内押しながら立ち上がり、口縁部との境に強い段を持つ。口縁部は内縮する。	口縁部内・外面横ナテ。体部及び底部外面横位のヘラ削り。内面ヘラナテ。	砂粒・赤母 褐色 普通	P 4 70% P1付近床面直上
		B 5.5				
4	土師器	A 15.2	底面欠損。体部は球形を呈し、中央に最大径を有する。口縁部は外反立ちみに開く。	口縁部内・外面横ナテ。体部内・外面ヘラナテ。	砂粒・長石・雲母 褐色 普通	P 5 50% P1付近西壁寄り床面直上
		B (15.2)				
5	土師器	A (16.2)	底面欠損。体部は縦長の球形を呈し、上段に最大径を有する。口縁部は外反立ちみに開く。	口縁部内・外面横ナテ。体部内・外面ヘラナテ。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	P 6 30% P1付近西壁寄り床面直上
		B (16.2)				
6	土師器	B (4.0)	底面の破片。底面は平底で、中央がやや凹む。	体部下縁及び底部外面横位のヘラ削り。内面ヘラナテ。	砂粒・赤母 にぶい褐色 普通	P 7 20% P1・P2付近床面直上
		C 5.4				
7	土師器	B (2.2)	底面の破片。平底。	体部下縁及び底部外面横位のヘラ削り。内面ヘラナテ。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P 8 5% 西寄り直上
		C (8.4)				

図版番号	種別	計 測 値					現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	孔 径(cm)	重 量(g)			
第16回 8	土 玉	3.5	3.1	3.1	0.8	25.8	100	P1南東付近遺土下層	DP1
9	土 玉	2.5	3.1	3.1	0.6	19.2	100	P1南東付近遺土下層	DP2
10	土 玉	2.6	2.9	2.9	0.6	19.6	100	P1南東付近床面直上	DP3
11	土 玉	2.4	3.1	3.1	0.8	(15.7)	90	P1南東付近床面直上	DP4
12	土 玉	2.5	2.3	2.3	0.6	10.3	100	P1南東付近床面直上	DP5
13	土 玉	2.5	2.3	2.3	0.6	8.9	100	P1南東付近床面直上	DP6
14	管状土師	9.0	5.0	5.0	0.8	(237.8)	90	壁直上	DP7

第16回15は縄文時代前期前葉の縄織土器片で、斜縄文が施されている。16は縄文時代中期後葉の土器片で、斜縄文が施されている。17は縄文時代後期中葉の土器片で、沈線文が施されている。

第3号住居跡(第17回)

位置 調査区の北部、A15区。

重複関係 本跡は第1号溝に南西部を掘り込まれており、第1号溝よりは古い。

規模と平面形 長軸6.20m、短軸(3.5)mの方形と思われる。北側半分は調査区外に延びており、北西部は擾乱を受けている。

主軸方向 N-12°-W

壁 壁高は15~26cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 南壁中央部を除き、壁下を周回している。上幅約15cm、下幅約8cm、深さ約6cmで、断面形は「U」字形をしている。

床 平坦で、壁際以外は全体的に硬く踏み固められている。P1とP2の間の床面は、木根による擾乱を受けている。

炉 2か所。炉1は東壁寄りに付設され、平面形は長径55cm、短径45cmの不整形円形で、床面を4cm掘り窪めた地床炉である。炉床面は火熱を受け、赤変硬化している。炉2は西壁寄りに付設され、平面形は長径40cm、短径38cmの不整形円形で、床面を4cm掘り窪めた地床炉である。炉床面は火熱を受け、赤変硬化している。

ピット 2か所 (P₁, P₂)。P₁, P₂は長径28-35cm, 短径25-35cmの円形, 深さ40-50cmで, 規模や配列から主柱穴と考えられる。

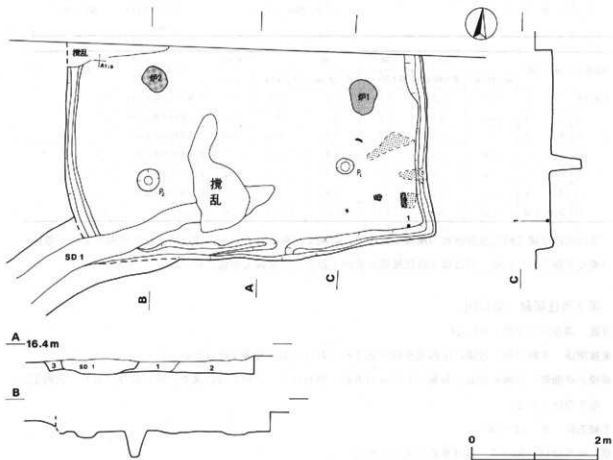
覆土 3層からなる。上層は自然堆積であるが, 下層は人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量, ローム大・小ブロック・炭化物・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量
- 3 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子中量, 炭化物・炭化粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量

遺物 図示した土師器及びそれ以外の土師器片が覆土中層から床面に掛けて多量に出土している。第18図1の甕は南東コーナー寄りの床面直上から正位の状態出土している。その他に, 覆土中から流れ込みと思われる縄文土器片, 陶器片及び泥面子が少量出土している。

所見 本跡は, 炭化材及び焼土ブロックの検出状況から焼失家屋であると思われ, 東壁寄りの炭化材及び落下焼土を中心に遺存していた。また, 覆土の確認状況から, 焼失直後に東側あるいは北側から人為的に埋め戻されたものと思われる。時期は, 出土遺物から古墳時代中期の5世紀後葉と考えられる。



第17図 第3号住居跡実測図

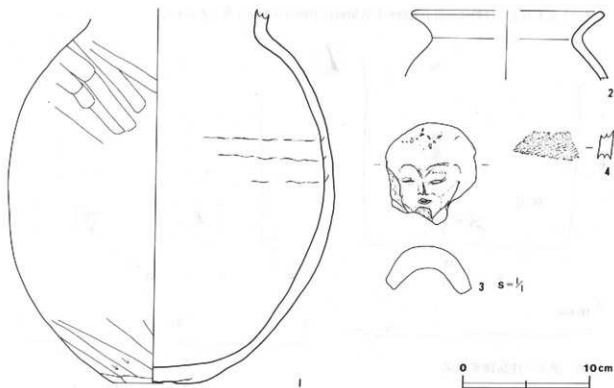
第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第18図 1	甕 土師器	B (29.2) C 6.6	口縁部欠損。底部は平底で, 中央がやや凹む。体部は縦長の球形を呈し, 中位に最大径を有する。	体部内・外面ヘラナデ。体部下層及び底部外面縦位のヘラ削り。内面に輪積み痕有り。	砂粒・長石・雲母にふい赤褐色 普通	P 9 70% 南東コーナー寄り床面直上 外面壁付着

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第18図 2	甕 土師器	A(15.4) B(5.3)	口縁部の破片。口縁部は外反ぎみに開く。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・定峰 棕色 普通	P10 西寄り覆土 外面保存者

図版番号	種別	計測値					現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第18図3	泥團子	(2.6)	(2.4)	1.1	—	(4.4)	80	東寄り覆土	伊8

第18図4は縄文時代中期後葉の土器片で、斜縄文が施されている。



第18図 第3号住居跡出土物実測・拓影図

第4号住居跡(第19図)

位置 調査区の西部, B1a区。

規模と平面形 長軸3.38m, 短軸(2.9)mの方形と思われる。北部は攪乱を受けている。

主軸方向 N-17°-W

壁 壁高は10-26cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 木根による攪乱を受けているが、遺存している部分は平坦で、壁際以外は全体的に硬く踏み固められている。P₁の周囲には深さ1-2cmの円形の凹みが認められる。

ピット P₁は長径22cm, 短径20cmの円形, 深さ18cmで、斜めに掘られており、位置から出入口ピットと考えられる。

P₁土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, 軟らかい
- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量

覆土 3層からなる。自然堆積である。

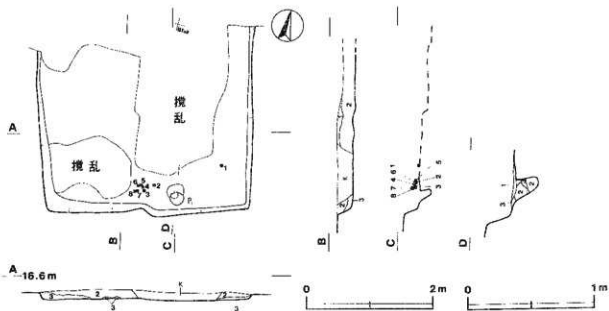
土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
 2 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量

- 3 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量

遺物 図示した土師器及びそれ以外の土師器片が覆土中層から床面にかけて少量出土している。第20図1の施は南東コーナー寄りの床面直上から正位の状態で出土している。2～8の土玉はP1の西側付近の覆土中層から下層にかけてまとまった状態で出土している。その他に、覆土中から流れ込みと思われる縄文土器片、半銭銅貨が少量出土している。

所見 本跡は、木根等による掘乱を受け、遺存状態が良好ではなかったが、規模は一辺3.5m前後の小形住居のタイプと思われる。時期は、出土遺物から古墳時代中期の5世紀後葉と考えられる。



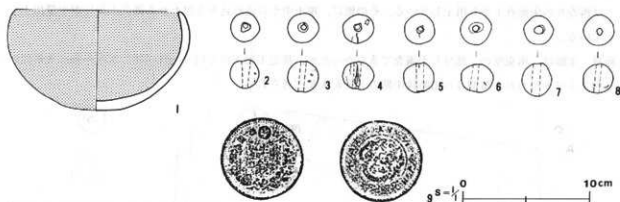
第19図 第4号住居跡実測図

第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第20図 1	土師器	A 13.2 B 7.9	丸底。体部は内層しながら立ち上がり、口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底面斜・長石・石英・雲母	赤褐色	P11 95% 南東コーナー寄り床面直上

図版番号	種別	計測値						現存率(%)	出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	孔径(cm)	重量(g)				
第20図2	土玉	2.2	2.3	2.3	0.8	10.0	100	P1西側付近覆土下層	DP9	
3	土玉	2.4	2.4	2.4	0.4	13.2	100	P1西側付近覆土下層	DP10	
4	土玉	2.2	2.4	2.4	0.7	10.3	100	P1西側付近覆土下層	DP11	
5	土玉	2.3	2.4	2.4	0.6	10.2	100	P1西側付近覆土下層	DP12	
6	土玉	2.3	2.5	2.5	0.5	12.0	100	P1西側付近覆土下層	DP13	
7	土玉	2.6	2.5	2.5	0.7	11.1	100	P1西側付近覆土中層	DP14	
8	土玉	2.3	2.6	2.6	0.5	11.9	100	P1西側付近覆土中層	DP15	

図版番号	図 種	発 行 年		現存率 (%)	出 土 地 点	備 考
		時 代	年 号 (西暦)			
第20図9	手執調査	明 治	明治14年 (1881)	100	南西コーナー寄り覆土上層	W1



第20図 第4号住居跡出土遺物実測・拓影図

第5号住居跡 (第21図)

位置 調査区の西部, B1b7区。

規模と平面形 長軸2.70m, 短軸2.46mの方形。

主軸方向 N-14°-W

壁 壁高は3~7cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

床 木根による攪乱を受けているが, 遺存している部分は平坦で, 壁際以外は全体的に硬く踏み固められている。

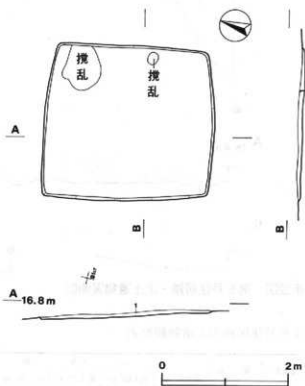
覆土 1層からなる。覆土が極めて薄いため, 自然堆積か, 人為堆積か不明である。

土層解説

1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量

遺物 本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡は, 遺物が出土していないが, 主軸方向や周りの住居跡の配置から, 一辺2.5m前後の小形住居のタイプと思われる, 時期は古墳時代中期の5世紀後葉と考えられる。



第21図 第5号住居跡実測図

第6号住居跡 (第22図)

位置 調査区の北西部, A11a区。

規模と平面形 確認できたのは南東壁の一部4.3mだけで, 大半は調査区外に延びており, 北東端は木根による攪乱を受けている。

主軸方向 [N-38°-W]

壁 壁高は6~26cmで, 外傾して立ち上がる。

床 凹凸が認められるが, 壁際以外は全体的に硬く踏み固められている。

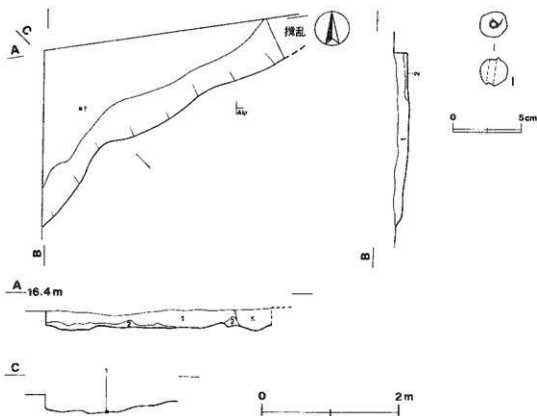
覆土 2層からなる。自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小アロック・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム大・中・小アロック・ローム粒子中量

遺物 図示した土玉及びそれ以外の土師器片が覆土中層から床面ににかけて少量出土している。第22図1の土玉は西寄りの床面直上から出土している。その他に、覆土中から流れ込みと思われる縄文土器片が少量出土している。

所見 本跡は、南東壁の一部しか調査できなかったが、推定主軸方向や周りの住居跡の配置から、大形住居のタイプと思われ、時期は古墳時代中期の5世紀末葉と考えられる。



第22図 第6号住居跡・出土遺物実測図

第6号住居跡出土遺物観察表

図版番号	類別	計測値					現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
第22図1	土玉	2.1	2.0	2.0	0.5	6.1	100	西寄り床面直上	DP16

表4 大門通遺跡住居跡一覧表

住居跡番号	方位	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高	床面	内部施設				覆土	主な遺物	備考	
							障壁	柱穴	貯蔵穴	ピット				
1	82e	N-43°-W	方形	2.67×2.22	2~5	平拱	-	-	-	-	9~2	不明	土師器(輪)	古墳時代中期(5世紀末葉)・飛鳥堂跡
2	82e	N-40°-W	方形	4.83×3.7	26~28	平拱	全周	2	-	-	9~2	自然	土師器(床・壁), 土玉, 瓦, 鉄土師, 灰化床, 灰化土層	古墳時代中期(5世紀末葉)
3	A11	N-12°-W	方形	6.20×3.1	15~25	平拱	柱29個	2	-	-	9~2	人為	土師器(壁)	古墳時代中期(5世紀末葉)
4	B1a	N-17°-W	方形	2.38×2.9	10~26	平拱	-	-	1	-	-	自然	土師器(輪), 土玉	古墳時代中期(5世紀末葉)
5	B1b	N-14°-W	方形	2.30×2.46	3~7	平拱	-	-	-	-	-	不明	-	古墳時代中期(5世紀末葉)
6	A11	(N-28°-E)	不明	不明	6~25	円凸	-	-	-	-	-	自然	土玉	古墳時代中期(5世紀末葉)

2 その他の遺構と遺物

今回の調査では、土坑10基、溝1条を確認した。以下、確認した遺構と遺物について記載する。

(1) 土坑

調査区のほぼ全域から土坑10基を確認した。出土遺物はほとんどなく、時期や性格についても不明な部分が多いが、ここでは土坑の形状、規模、覆土の状態及び出土遺物等に特徴があるものについて実測図を掲載し、それ以外の土坑については遺構配置図及び土坑一覽表に記載した。

第1号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム主体

第4号土坑土層解説

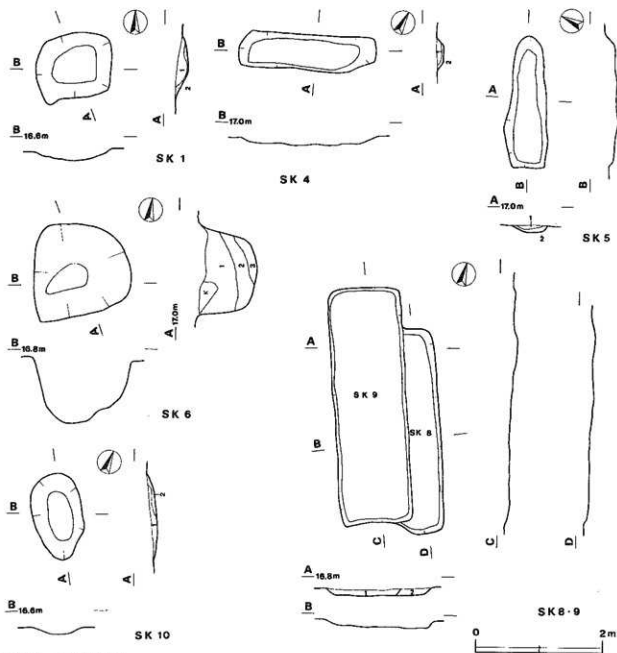
- 1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム主体

第5号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム主体

第6号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量



第23図 土坑実測図

第8・9号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック・炭化粒子少量
 2 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック・炭化粒子少量
 1層よりやや暗い

第10号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
 2 褐色 ローム主体

表5 大門通遺跡土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	上 々 遺 物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(m)					
1	82 ₁	N-86°E	方 形	1.18 × 1.00	15	縦斜	皿状	自然		
2	81d ₂	N-7°E	円 形	0.76 × 0.66	72	外傾	円凸	自然		
3	81d ₂	N-4°E	円 形	0.88 × 0.72	51	外傾	皿状	自然		
4	81d ₂	N-68°E	長 方 形	2.26 × 0.56	13	縦斜	平坦	人為	土師器片	
5	81c ₂	N-72°E	長 方 形	2.08 × 0.55	18	縦斜	平坦	人為		
6	82a ₁	N-36°E	方 形	1.76 × 1.68	100	外傾	円凸	人為		
7	81c ₂	N-10°E	円 形	1.02 × 1.02	20	縦斜	皿状	自然		
8	81c ₂	N-14°W	長 方 形	3.25 × 0.70	7	縦斜	平坦	人為		SK-9より古い
9	81c ₂	N-13°W	長 方 形	3.74 × 1.15	12	縦斜	平坦	人為	縄文土器片・土師質土器片	SK-8より新しい
10	81c ₂	N-26°W	楕 円 形	1.37 × 0.76	10	縦斜	皿状	自然		

(2) 溝

当遺跡からは近世の溝1条を確認した。

以下、確認した溝について記載する。

第1号溝 (第24図)

位置 調査区の西部から北部、Ali₉~Blas₉区。

重複関係 本跡は第3号住居跡の南西部を掘り込んでおり、第3号住居跡よりは新しい。

規模と形状 確認できた部分は全長15.3mで、直線的に延びており、西端部は調査区外に続いている。上幅は94~100cm、下幅は13~25cm、深さは20~55cmで、断面形は「V」字形あるいは皿状をしている。

方向 N-60°E

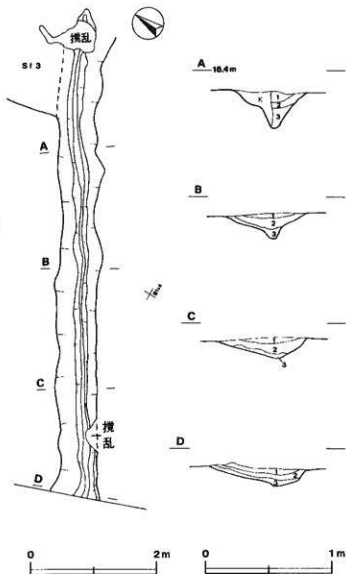
覆土 3層からなる。自然堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量
 2 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量
 3 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量

遺物 図示した土師質土器、陶器、墨書土器

及びそれ以外の陶磁器片が覆土中から少量出土している。第25図1の平底かわらけ及び2の瀬戸・美濃系の灯明皿は東寄りの覆土中から、墨書土器は西寄りの覆土中からそれぞれ出土している。その他に、覆土中



第24図 第1号溝実測図

から流れ込みと思われる縄文土器片及び土師器片が少量出土している。

所見 本跡は、調査区の北側隣接地に存在する近世墓地と関連のある区画溝と思われる。時期は、出土遺物から近世後半の18～19世紀と考えられる。



第25図 第1号溝出土遺物実測・拓影図

第1号溝出土遺物観察表

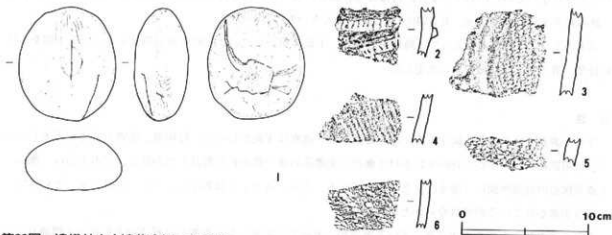
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第25図 1	平底かわけ土師質土器	A〔5.8〕	平底。体部及び口縁部は外傾しながら立ち上がる。	ロクロ成形。底面に回転糸切り痕有り。	砂粒・灰石・石英・雲母 褐色 普通	P12 西寄り覆土 古地系
		B 1.8				
		C〔2.8〕				
2	灯明皿陶器	A〔5.0〕	平底。体部及び口縁部は内傾しながら立ち上がる。	ロクロ成形。内面～口縁部外面に鉄軸を施軸。底部内面に輪トチン痕有り。	砂粒 胎土：にぶい黄褐色 軸：明赤褐色 普通	P13 西寄り覆土 瀬戸・美濃系
		B 2.0				
		C〔3.6〕				

第25図3は瀬戸・美濃系陶器の底部片で、底部外面に「清水□」の墨書がある。

4は縄文時代後期中業の土器片で、斜縄文が施されている。

3 遺構外出土遺物

当遺跡からは、表土層及び遺構確認面から遺構に伴わない遺物が出土している。ここでは、縄文土器片、縄文時代の磨石など特徴的なものについて実測図及び拓影図を掲載し、解説等は一覧表に記載した。



第26図 遺構外出土遺物実測・拓影図

遺構外出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値				現存率 (%)	石質	出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)				
第26図1	磨石	8.9	7.7	4.2	393.5	100	硬質砂岩	81c区付近確認面	Q1

第26図2は縄文時代中期中業の土器片で、隆帯と角押文が施されている。3～5は縄文時代中期後業の土器片で、縄文や隆帯が施されている。6は縄文時代後期中業の土器片で、斜縄文が施されている。

第4節 ま と め

今回の調査で確認した遺構は、堅穴住居跡6軒、土坑10基及び溝1条である。ここでは、主として古墳時代の住居跡及び近世の溝と出土遺物についての概要を述べ、まとめとする。

縄文時代

前期前葉～後期中葉の縄文土器片や磨石が少量出土している。しかし、今回の調査では縄文時代の遺構は確認されなかった。

古墳時代

当遺跡の中心となる時期で、堅穴住居跡6軒を確認した。そのうち第1・3号住居跡の2軒は焼失家屋である。また、住居跡の規模を見てみると、一辺が6m以上の大形住居のタイプと一辺が3.5m未満の小形住居のタイプに分けることができる。時期は中期の5世紀後葉～末葉と考えられ、住居跡の主軸方向から2時期が想定される。

第1期と考えた住居跡は、主軸方向がN-12°-17°-Wの第3・4・5号住居跡である。このうち第3号住居跡が大形住居で、第4・5号住居跡が小形住居である。あまり良好とは言えないが、遺物の組成を見てみると、第3号住居跡では土師器の甕、第4号住居跡では内・外面が赤彩された土師器の椀に土製品として土玉が加わる。

第2期と考えた住居跡は、主軸方向がN-38°-43°-Wの第1・2・6号住居跡である。このうち第2・6号住居跡が大形住居で、第1号住居跡が小形住居である。遺物の組成を見てみると、第1号住居跡では土師器の椀、第2号住居跡では土師器の甕、甕に土製品として土玉と管状土鉢が加わる。甕は内・外面が赤彩されたものとされないものがあり、また、口縁部と体部との境に弱い稜を持つものと持たないものがある。管状土鉢は長さ9cm、直径5cm、重さ240g弱と極めて大きいものである。

以上のように主軸方向によって2時期を想定し、土器様相からその2時期の新旧関係を考え、第1期を5世紀後葉、第2期を5世紀末葉に比定した。

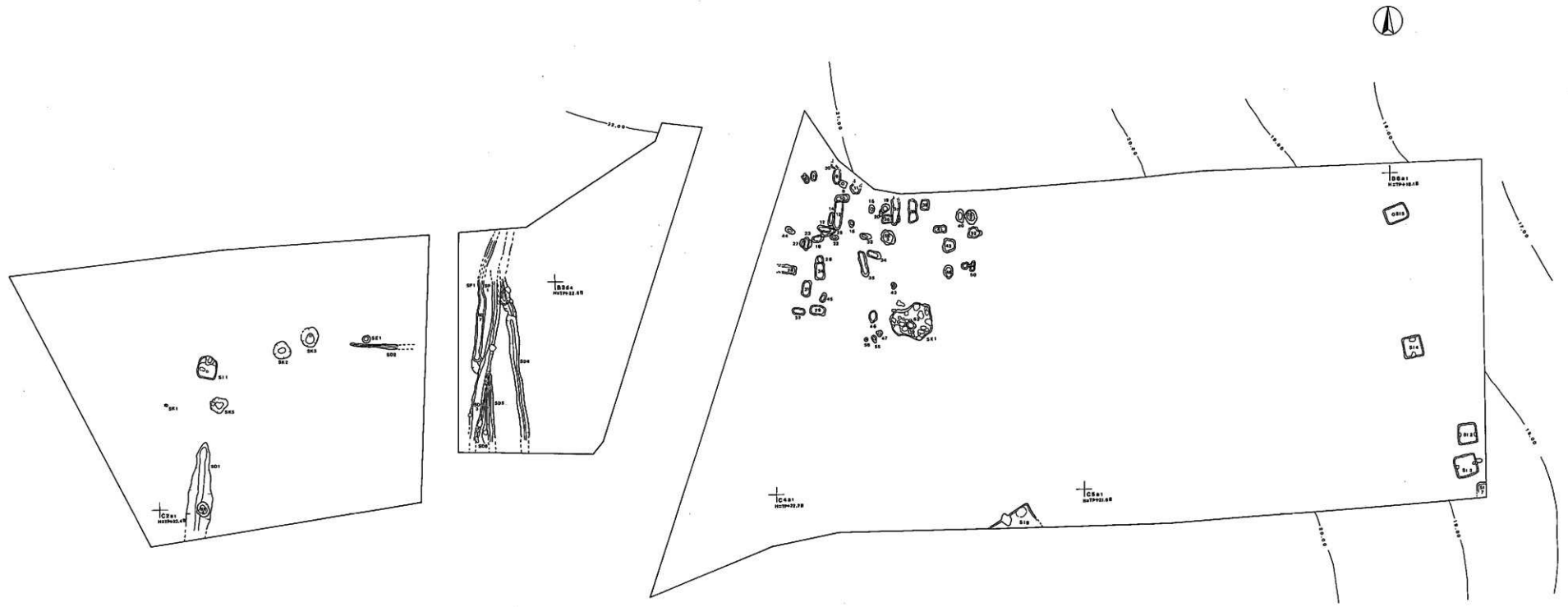
近 世

今回の調査では当該期に属する溝1条を確認した。遺物は平底かわらけ、灯明皿、墨書土器等が出土している。灯明皿は、1670年から1860年にかけて瀬戸・美濃系の窯で焼かれた製品と思われる。墨書土器は、瀬戸・美濃系陶器の底部外面に「清水□」と書かれている。この「清水」とは名字で、「□」内は「家」という字の一部分が書かれているのではないと思われる。

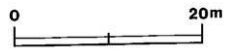
なお、当遺跡の西側を南北に通っている市道が、遺跡名の由来となった飯沼弘経寺の表参道「大門通り」である。弘経寺蔵の江戸時代文化年間の絵図によると、今回の調査区域のほとんどは弘経寺所有の山林となっていたようである。調査区の北側隣接地に存在する近世墓地は、近代の墓地整理を受けているが、第1号溝を南辺の区画溝としていたものと考えられる。

参考文献

- ・吹野富美夫 「八幡前遺跡における古墳時代後期の土器様相」『研究ノート4号』 茨城県教育財団 1995年6月



第27図 三本松遺跡遺構配置図



第5章 三本松遺跡

第1節 遺跡の概要

三本松遺跡は、水海道市の北西部に位置し、東側を南から入り込んだ鬼怒川水系の小支谷に、西側を旧飯沼によって挟まれた東西が狭い結城台地の東側の緩やかな傾斜面上に立地している。台地の標高は17～24mで、東側谷津低地面との比高は3～5m、西側旧飯沼低地面との比高は11～13mである。調査区域は東西に約192m、南北に約60m、面積6,836m²で、現況は山林、畑である。当遺跡は、旧石器時代から中世にわたる複合遺跡である。

なお、県道鴻野山・水海道線及び市道が調査区を縦断して通っており、それらの道路によって調査区が3区に分かれるため、西側から東側に向かって、それぞれⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区と呼称することにした。

今回の調査では、古墳時代後期の竪穴住居跡1軒、中世の方形竪穴状遺構6軒、土壌墓43基、火葬墓1基、土坑内貝塚2基、土坑1基、井戸3基、溝5条、道路状遺構1条及び不明遺構1基、時期不明の土坑4基及び溝2条を確認した¹⁾。

遺物は、遺物収納箱(60×40×20cm)に12箱出土した。古墳時代の遺物としては、住居跡から坏、鉢及び甕等の土師器が出土している。中世の遺物としては、方形竪穴状遺構、土壌墓、土坑、井戸及び溝から丸底かわらけ、平底かわらけ及び内耳鍋等の土師質土器、瀬戸及び常滑等の陶器、染付等の輸入陶磁器、砥石等の石器、北宋銭、短刀、鉄釘及び鉄鍋等の金属製品が出土している。また、火葬墓からは火葬骨片、土坑内貝塚からは巻貝及び二枚貝がそれぞれ出土している。その他に、縄文時代早期～後期の土器片、土器片鉢、石鏃、磨製石斧、磨石及び礫器、弥生土器片、平安時代の須恵器片、近世の陶器、磁器、泥面子、砥石、寛永通寶、火打金及び鉄滓、近代の薬莖等が、表土層、遺構確認面及び覆土中から出土している。

註

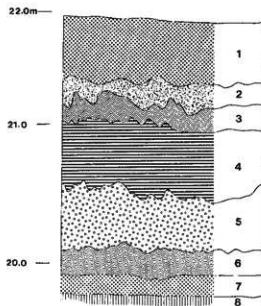
(1) 竪穴住居跡と方形竪穴状遺構の記号はS1とし、遺構番号は連続して付けている。また、土壌墓、火葬墓、土坑内貝塚及び土坑の記号はSKとし、遺構番号は連続して付けている。

第2節 基本層序の検討

三本松遺跡においては、調査区西部のB319区にテストピットを設定し、第28図に示すような上層の堆積状況を確認した。

第1層は、表土直下の褐色の漸移層で、厚さは45～55cmである。

第2層は、やや暗い褐色のブラックバンドで、厚さは10～25cmである。



第28図 三本松遺跡基本土層図

第3層は、第2層の影響を受けた褐色のハードローム層で、厚さは10~25cmである。

第4層は、やや明るい褐色のハードローム層で、厚さは45~55cmである。

第5層は、硬く締まった褐色のハードローム層で、厚さは40~50cmである。

第6層は、緻密に詰まった褐色のローム層で、厚さは20~25cmである。

第7層は、鉄分を多く含むにぶい褐色のローム層で、締まりも粘性もあり、厚さは10~15cmである。

第8層は、第7層より鉄分を多く含む明褐色のローム層で、締まりも粘性もある。

三本松遺跡の遺構は、表土下30~70cmの第1層上面で確認した。

第3節 遺構と遺物

1 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査では、調査Ⅲ区の南部中央付近から竪穴住居跡1軒を確認した。竈を持ち、時期は古墳時代後期のものと考えられる。以下、確認した遺構と遺物について記載する。

(1) 竪穴住居跡

第6号住居跡(第29図)

位置 調査Ⅲ区の南部、C4b区。

規模と平面形 確認できたのは北コーナー付近の北西壁の一部5.8mと、北東壁の一部2.3mだけで、大半は調査区外に延びているが、一辺6.5m前後の方形と思われる。

主軸方向 N-32°-W

壁 壁高は56~58cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 竈の部分を除き、壁下を周回している。上幅約10cm、下幅約5cm、深さ約5cmで、断面形は「U」字形をしている。

床 平坦で、壁際以外は全体的に硬く踏み固められている。

竈 北西壁中央部に付設されており、焚き口部から煙道口部までの長さ150cm、両袖幅102cm、壁から煙道口部までは36cmで、壁外への掘り込みは煙道の掘り方を含めると48cmになる。袖部は白色粘土粒子及び砂粒を多量に含むにぶい褐色粘土を用いて芯材としており、さらにその外側を芯材の粘土にロームを混ぜた土で覆うようにして構築している。火床面は床面を12cm掘り窪めており、皿状をしている。煙道部の平面形は三角形で、2段に掘り込まれており、下半部は約15度の傾斜で、上半部はほぼ垂直に立ち上がる。袖の内側及び火床面は火熱を受け、厚さ7cm前後にわたって赤変硬化しており、長期間使用したものと思われる。

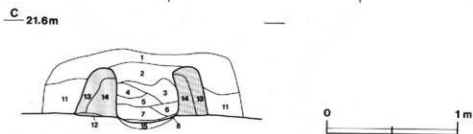
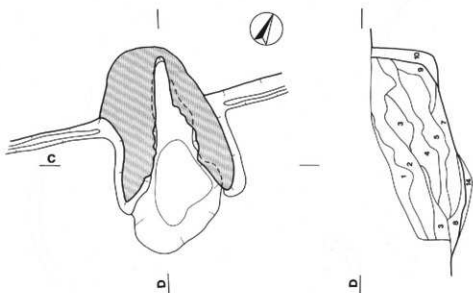
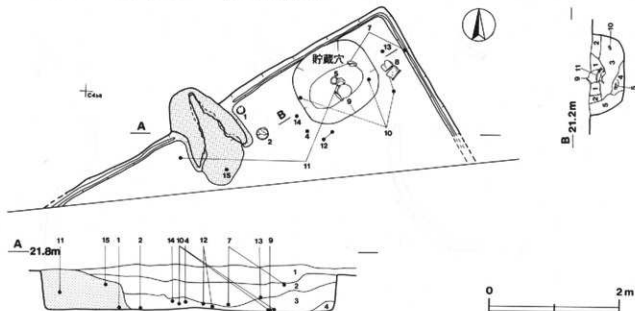
壁土層解説

1 暗褐色	ローム中・小ブロック・ローム粒子・砂粒・粘土中・小ブロック・粘土粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量	8 暗赤褐色	面の両袖焼土の埋積層 炭化物・炭化粒子・焼土粒子中量、火床面上の黒焼灰の埋積層
2 暗褐色	ローム粒子・砂粒・粘土中・小ブロック・粘土粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量	9 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂粒・粘土粒子多量、ローム小ブロック・粘土小ブロック・粘土粒子微量
3 暗褐色	ローム中・小ブロック・ローム粒子・砂粒・粘土中・小ブロック・粘土粒子多量、炭化粒子少量、焼土粒子微量	10 暗褐色	ローム粒子・砂粒・粘土粒子多量、ローム小ブロック・焼土粒子・粘土小ブロック少量
4 にぶい赤褐色	焼土中・小ブロック・焼土粒子多量、炭化粒子・砂粒・粘土粒子少量、天井部内面あるいは袖部内面の崩落層上の埋積層	11 暗褐色	ローム中・小ブロック・ローム粒子・砂粒・粘土中・小ブロック・粘土粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
5 にぶい赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂粒・粘土粒子多量、炭化粒子少量	12 黒褐色	ローム粒子少量
6 にぶい赤褐色	ローム粒子・焼土粒子・砂粒・粘土粒子多量、焼土小ブロック・炭化粒子少量	13 にぶい褐色	ローム粒子・砂粒・白色粘土粒子多量
7 にぶい赤褐色	焼土中・小ブロック・焼土粒子多量、炭化粒子・砂粒・粘土粒子少量、天井部内面あるいは袖部内	14 にぶい褐色	砂粒・白色粘土粒子多量、竈袖部の芯材の粘土層、内面は赤変硬化
		15 暗赤褐色	火床面上の火熱を受けた層

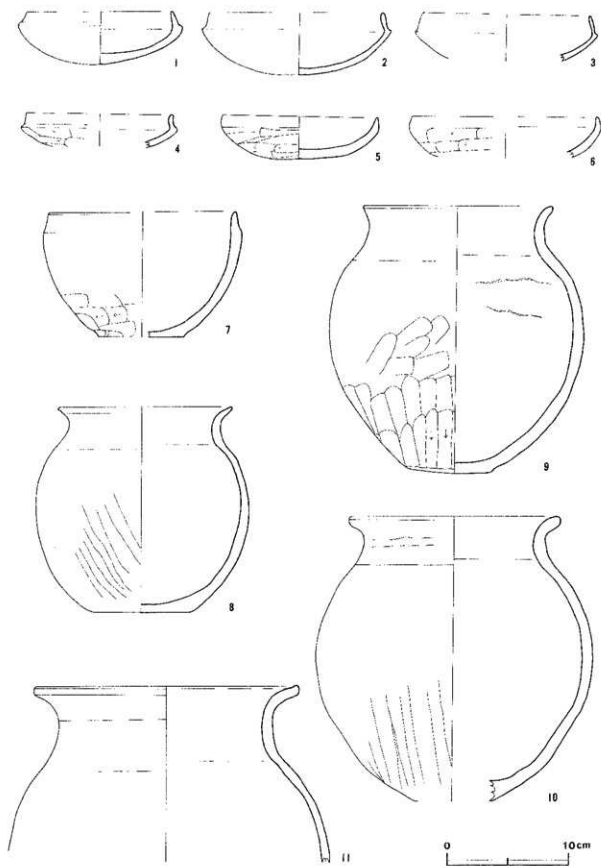
貯蔵穴 北コーナー竈寄りに付設され、平面形は長軸125cm、短軸110cmの隅丸方形である。深さは52cmで、断面形は逆台形をしている。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

貯蔵穴土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------------|------|----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子・焼土粒子少量 | 4 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 2 褐色 | ローム中・小ブロック・ローム粒子多量 | 5 褐色 | ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量 |
| 3 褐色 | ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量, 炭化粒子少量 | | |



第29図 第6号住居跡実測図



第30圖 第6号住居跡出土遺物実測圖(1)

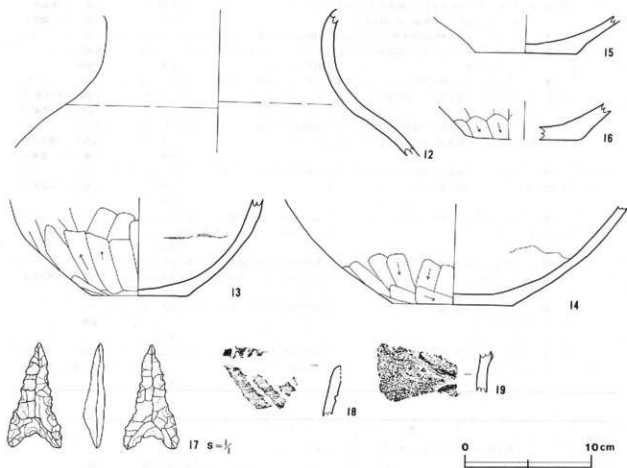
覆土 4層からなる。自然堆積である。

土層解説

- | | | |
|---|-----|----------------------------------|
| 1 | 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム中・小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 | 暗褐色 | ローム中・小ブロック・ローム粒子多量、炭化粒子少量、焼土粒子微量 |
| 4 | 暗褐色 | ローム中・小ブロック・ローム粒子多量 |

遺物 図示した土師器及びそれ以外の土師器片が覆土中層から床面にかけて多量に出土している。第30図1の坏は竈東袖寄りの床面直上から逆位の状態で、2の坏は竈東袖寄りの床面直上から正位の状態で、5の坏は貯蔵穴の覆土から正位の状態で、7の鉢は北東壁寄りの覆土中層及び貯蔵穴上面の覆土下層から散乱した状態でそれぞれ出土している。また、8の甕は貯蔵穴東側の床面直上、貯蔵穴の覆土及び竈の覆土から散乱した状態で、9の甕は貯蔵穴の覆土から横位の状態で、10の甕は竈西袖寄りの覆土下層、貯蔵穴東側の床面直上及び貯蔵穴の覆土から散乱した状態で、11の甕は竈西袖寄りの覆土下層、貯蔵穴の覆土及び竈の覆土から散乱した状態で、第31図12の甕は貯蔵穴南側の床面直上から散乱した状態で、13の甕は貯蔵穴東側の覆土中層から正位の状態で、14の甕は貯蔵穴西側の覆土中層及び貯蔵穴の覆土から散乱した状態でそれぞれ出土している。その他に、覆土中から流れ込みと思われる縄文土器片、石鏃及び鉄製品が少量出土している。

所見 本跡は、北コーナー、竈及び貯蔵穴付近しか調査できなかったが、比較的良好な遺物が遺存していた。時期は、出土遺物から古墳時代後期の6世紀後葉と考えられる。



第31図 第6号住居跡出土遺物実測・拓影図2)

第6号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(mm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考		
第30回 1	土 師 器	A 12.2	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に縁を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底面内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母にふい・褐色 普通	P 4	95%	龍宮崎寄り床面直上内・外面埋付層
		B 4.3						
2	土 師 器	A[14.4]	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に縁を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底面内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・雲母にふい・褐色 普通	P 6	20%	龍宮崎寄り覆土下層外面埋付層
		B 5.1						
3	土 師 器	A[14.0]	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に縁を持つ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母にふい・褐色 普通	P 8	95%	貯蔵穴北側覆土下層
		B(3.8)						
4	土 師 器	A[12.2]	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に縁を持つ。口縁部は直立ちみに開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母にふい・褐色 普通	P 10	30%	貯蔵穴北側覆土下層
		B(2.6)						
5	土 師 器	A 13.0	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に縁を持つ。口縁部は直立ちみに開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部及び底面外面横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母にふい・褐色 普通	P 12	100%	貯蔵穴北側覆土下層
		B 3.7						
6	土 師 器	A[15.4]	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に縁を持つ。口縁部は直立ちみに開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母にふい・黄褐色 普通	P 14	40%	龍宮崎寄り覆土下層・貯蔵穴東側覆土下層
		B(3.3)						
7	土 師 器	A[15.4]	平底。体部は下球形を呈する。口縁部は直立ちみに開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面直上平ヘラナデ、下層横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母にふい・褐色 普通	P 16	40%	貯蔵穴東側覆土下層
		B 10.3						
8	土 師 器	A 14.3	平底。体部は球形を呈し、中位に最大径を有する。口縁部は外反立ちみに開き、口縁端部に鋭い縁を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・雲母にふい・褐色 普通	P 18	5%	龍宮崎寄り覆土下層
		B 16.9						
9	土 師 器	A 15.6	平底。体部は球形を呈し、中位に最大径を有する。口縁部は外反立ちみに開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。体部下層及び底面外面横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母にふい・褐色 普通	P 20	30%	龍宮崎寄り覆土下層・貯蔵穴東側覆土下層
		C 7.0						
10	土 師 器	A 17.4	平底。体部は球形を呈し、中位に最大径を有する。口縁部は外反立ちみに開く。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母にふい・褐色 普通	P 22	100%	貯蔵穴北側覆土下層
		B 23.5						
11	土 師 器	A 21.8	底部欠損。口縁部は外反立ちみに開き、口縁端部にわずかなつまみ上げを持つ。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母にふい・黄褐色 普通	P 24	40%	龍宮崎寄り覆土下層・貯蔵穴東側覆土下層
		B(14.6)						
第31回 18	土 師 器	B(11.3)	口縁端部が欠損している口縁部から底部の破片。	口縁部及び底部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母にふい・褐色 普通	P 26	40%	貯蔵穴東側覆土下層
		B(7.8)	底部の破片。平底。	体部下層及び底面外面横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。内面に輪模み痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母にふい・褐色 普通	P 27	10%	貯蔵穴西側覆土下層
13	土 師 器	C 7.6	底部の破片。平底。	体部下層及び底面外面横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。内面に輪模み痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母にふい・褐色 普通	P 28	5%	龍宮崎寄り覆土下層
		B(8.0)	底部の破片。平底。	体部下層及び底面外面横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・雲母にふい・褐色 普通	P 29	5%	龍宮崎寄り覆土下層
14	土 師 器	C(9.4)	底部の破片。平底。	体部下層及び底面外面横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・雲母にふい・褐色 普通	P 30	5%	龍宮崎寄り覆土下層
		B(2.7)	底部の破片。平底。	体部下層及び底面外面横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・雲母にふい・褐色 普通	P 31	5%	龍宮崎寄り覆土下層
15	土 師 器	C 8.2	底部の破片。平底。	体部下層及び底面外面横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・雲母にふい・褐色 普通	P 32	5%	龍宮崎寄り覆土下層
		B(2.5)	底部の破片。平底。	体部下層及び底面外面横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・雲母にふい・褐色 普通	P 33	5%	龍宮崎寄り覆土下層
16	土 師 器	C(9.4)	底部の破片。平底。	体部下層及び底面外面横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・雲母にふい・褐色 普通	P 34	5%	龍宮崎寄り覆土下層
		B(2.5)	底部の破片。平底。	体部下層及び底面外面横位のヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・雲母にふい・褐色 普通	P 35	5%	龍宮崎寄り覆土下層

図版番号	種 別	計 測 値				現存率 (%)	石 質	出 土 地 点	備 考
		最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重 量(g)				
第31回17	石 鏝	2.8	1.5	0.6	1.1	100	チャート	龍宮崎寄り覆土	Q5

第31回18, 19は縄文時代中期中葉の土器片で、隆帯や角押文が施されている。

2 中世の遺構と遺物

今回の調査では、中世と思われる遺構として、Ⅰ区から方形竪穴状遺構1軒、土坑1基及び井戸1基、Ⅱ区から溝5条及び道路状遺構1条、Ⅲ区から方形竪穴状遺構5軒、土塚墓43基、火葬墓1基、土坑内貝塚2基、井戸2基及び不明遺構1基を確認した。以下、確認した遺構と遺物について記載する。

(1) 方形竪穴状遺構

第1号方形竪穴状遺構（第32図）

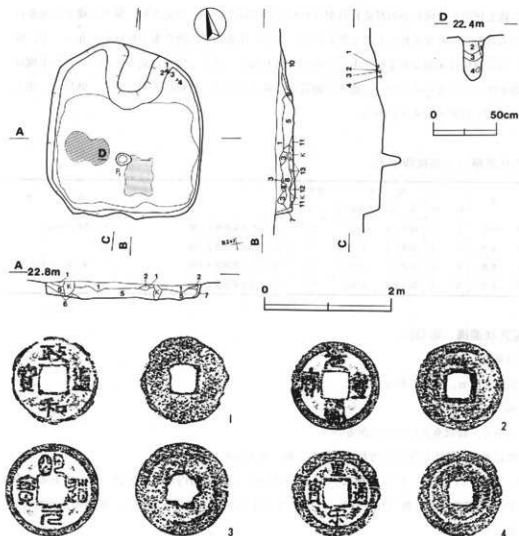
位置 調査Ⅰ区の北部、B2e区。

規模と平面形 長軸2.63m、短軸2.45mの隅丸方形。

主軸方向 N-15°-E

壁 壁高は20~30cmで、ほぼ垂直に立ち上がるが、北壁中央部は階段状になっている。

床 北壁中央部に階段状の高まりを持つが、位置から出入口施設と考えられる。中央部は平坦で、壁際以外は全体的に黒色の汚れが目立ち、硬く踏み固められている。中央付近からやや南寄りに長辺65cm、短辺45cm、厚さ8cmの長方形の粘土塊が貼り付いている。また、中央付近からやや西寄りに長径70cm、短径50cmの範囲で炭化物が集中している。



第32図 第1号方形竪穴状遺構実測・出土遺物拓影図

ピット P₁は長径24cm, 短径20cmの楕円形, 深さ35cmである。中央の1本柱であるが, 主柱穴と考えられる。

P₁土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 3 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量, 粘土大・中・小ブロック・粘土粒子少量

覆土 13層からなる。人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------------|---------|------------------------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子多量 | 8 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・粘土小ブロック・粘土粒子少量 |
| 2 褐色 | ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量 | 9 褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量 | 10 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 4 暗褐色 | 粘土大・中・小ブロック・粘土粒子多量, ローム粒子少量 | 11 暗褐色 | ローム粒子・粘土粒子少量 |
| 5 褐色 | ローム粒子・炭化物・炭化粒子少量 | 12 暗褐色 | 粘土中・小ブロック・粘土粒子多量, ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子・炭化物・炭化粒子少量 | 13 濃い褐色 | 粘土大ブロック主体 |
| 7 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子多量 | | |

遺物 図示した4枚の北宋銭は, 出入口部北東隅の覆土下層からまかれたような状態で出土している。第32図1の政和通寶及び2の元豊通寶は横位の状態で, 3の明道元寶は正位の状態で, 4の阜東通寶は南東にやや離れたところから逆位の状態でそれぞれ出土している。その他に, 覆土中から流れ込みと思われる縄文土器片及び安山岩剥片が少量出土している。

所見 本跡は, 南側に存在する第1号土坑と関連のある方形竪穴状遺構と思われる。北宋銭の出土状況から, 竪穴の廃絶時に銭を使用した何らかの祭祀行為が行われたのではないかと想定され, 覆土の確認状況から, 出入口付近から人為的に埋め戻されたものと思われる。また, 床面に炭化物の集中地点が存在したが, 焼土は認められず, 火の使用は床面より上層であったものと思われる。同じく床面に貼り付いていた粘土塊は, 焼土及び炭化物が伴っていないことから, 籠等の施設とは考えられず, 性格は不明である。時期は, 出土遺物から中世前半の12-13世紀と考えられる。

第1号方形竪穴状遺構出土遺物観察表

図版番号	銭種	初 始 年		現存率 (%)	出 上 地 点	備 考
		時 代	年 号 (西暦)			
第32図1	政和通寶 (分幣)	北 宋	政和元年 (1111)	95	出入口部北東隅覆土下層	M1, 墨銭 (磨輪)
2	元豊通寶 (篆書)	北 宋	元豊元年 (1078)	100	出入口部北東隅覆土下層	M2
3	明道元寶 (篆書)	北 宋	明道元年 (1032)	100	出入口部北東隅覆土下層	M3, 加土銭 (星形孔)
4	阜東通寶 (真書)	北 宋	寛元元年 (1038)	100	出入口部北東隅覆土下層	M4

第2号方形竪穴状遺構 (第33図)

位置 調査Ⅱ区の東部, B6i2区。

規模と平面形 長軸2.67m, 短軸2.46mの方形。

主軸方向 N-89°-E

壁 壁高は36-44cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦で, 壁際以外は全体的に黒色の汚れが目立ち, 硬く踏み固められている。

ピット 2か所 (P₁, P₂)。P₁, P₂は長径32-36cm, 短径26-28cmの楕円形, 深さ44-52cmである。P₁は西壁際中央, P₂は東壁際中央に掘られており, どちらもやや内傾ぎみに立ち上がる。壁際の2本柱であるが, 主柱穴と考えられる。

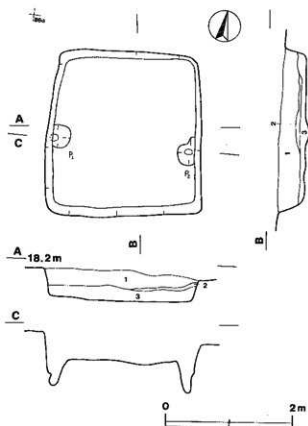
覆土 3層からなる。人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物 覆土中から土師器片及び土師質土器片が少量出土している。

所見 本跡は、覆土の確認状況から、堅穴廃絶時に東側あるいは北側から人為的に埋め戻されたものと思われる。時期は、覆土の状態や周りの方形堅穴状遺構の配置から中世前半の12~13世紀と考えられる。



第33図 第2号方形堅穴遺構実測図

第3号方形堅穴遺構 (第34図)

位置 調査Ⅲ区の東部、B6j3区。

規模と平面形 長軸2.85m、短軸2.82mの方形。

主軸方向 N-79°-E

壁 壁高は46~60cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 東壁中央部に「U」字状の張り出し部を持つが、位置から出入口施設と考えられる。中央部は平坦で、壁際以外は全体的に黒色の汚れが目立ち、硬く踏み固められている。南西コーナー寄り及びP1西側に粘土塊が貼り付いている。また、中央付近に長径55cm、短径45cmの範囲で炭化物が集中している。

ビット 2か所 (P1, P2)。P1, P2は長径26~30cm、短径24~30cmの円形あるいは楕円形、深さ38~42cmである。P1は西壁際中央、P2は東壁際中央に掘られており、どちらもやや内傾ぎみに立ち上がる。壁際の2本柱であるが、支柱穴と考えられる。

覆土 7層からなる。人為堆積である。

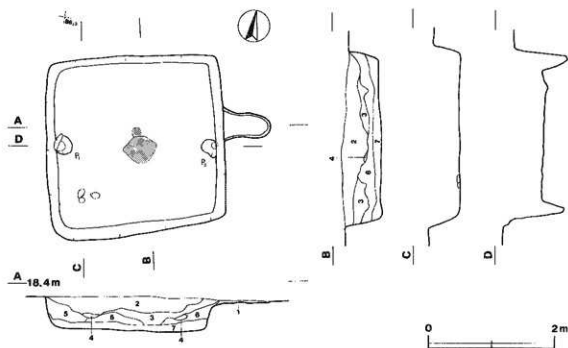
土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------------|-------|--|
| 1 暗褐色 | ローム大・中・小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子少量 | 4 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム大・中ブロック中量 | 5 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム大・中・小ブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム大・中ブロック少量 | 6 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム大・中ブロック中量 |
| | | 7 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・炭化粒子・粘土小ブロック・粘土粒子少量 |

遺物 覆土中から縄文土器片、土師器片及び鉄滓が少量出土している。

所見 本跡は、床面に炭化物の集中地点が存在したが、焼土は認められず、火の使用は床面より上層であったものと思われる。同じく床面に貼り付いていた粘土塊は、焼土及び炭化物が伴っていないことから、竈等の施設とは考えられず、性格は不明である。時期は、覆土の状態や周りの方形堅穴状遺構の配置から中世前半

の12-13世紀と考えられる。



第34図 第3号方形竪穴状遺構実測図

第4号方形竪穴状遺構 (第35図)

位置 調査Ⅲ区の東部、B6f区。

規模と平面形 長軸2.76m、短軸2.45mの長方形。

主軸方向 N-4°-E

壁 壁高は30-40cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦で、壁際以外は全体的に黒色の汚れが目立ち、硬く踏み固められている。中央付近に長径96cm、短径52cmの範囲で炭化物が集中している。

ピット 2か所 (P₁, P₂)。P₁, P₂は長径52-84cm、短径50-62cmの不整楕円形、深さ30cmである。P₁は北壁際からやや離れて、P₂は南壁際からやや離れて掘られており、どちらもやや内傾ぎみに立ち上がる。

壁際の2本柱であるが、主柱穴と考えられる。

P₁・P₂土層解説

- 1 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量、軟らかい
- 2 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子中量
- 3 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量

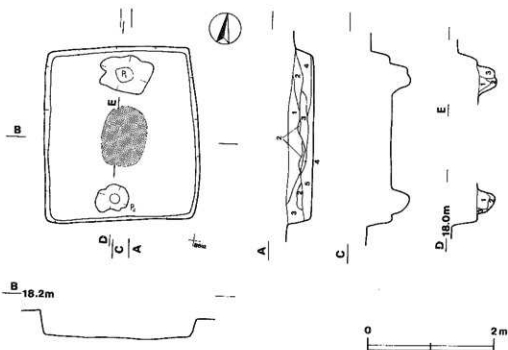
覆土 5層からなる。人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム中・小ブロック多量、ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック中量
- 4 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量
- 5 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量、炭化物・炭化粒子少量

遺物 覆土中から土師器片、須恵器片及び土師質土器片が少量出土している。

所見 本跡は、床面に炭化物の集中地点が存在したが、焼上は認められず、火の使用は床面より上層であったものと思われる。また、ピットの平面形及び覆土の確認状況から、2回以上の柱の立て替えがあったものと推定される。時期は、覆土の状態や周りの方形竪穴状遺構の配置から中世前半の12-13世紀と考えられる。



第35図 第4号方形竪穴状遺構実測図

第5号方形竪穴状遺構（第36図）

位置 調査Ⅲ区の東部、B6b区。

規模と平面形 長軸2.97m、短軸2.18mの隅丸長方形。

主軸方向 N-70°-E

壁 壁高は28~32cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦で、壁際以外は全体的に黒色の汚れが目立ち、硬く踏み固められている。

ピット Pは直径20cmの円形、深さ20cmである。中央の1本柱であるが、主柱穴と考えられる。

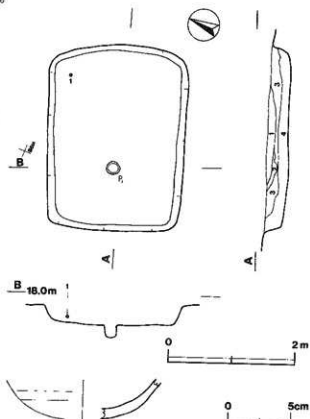
覆土 4層からなる。人為堆積である。

土層解説

- 1 断褐色 ローム中・小ブロック中量、ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム中・小ブロック多量、ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック中量
- 4 断褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子中量

遺物 第36図1の丸底かわらけは、北コーナー寄りの覆上下層から出土している。その他に、覆上中から流れ込みと思われる縄文土器片が少量出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から中世前半の12~13世紀と考えられる。



第36図 第5号方形竪穴状遺構・出土遺物実測図

第5号方形竪穴状遺構出土遺物観察表

図取番号	器種	寸法(m)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第37図 1	丸底かわらけ 上師製土器	径(3.0)	口縁部及び底部欠け。丸底。底部は内押しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。底部外面へラナデ、内面横ナデ。	砂粒・長石 褐色	P3 10% 北コーナー寄り層上F層 在継系

第7号方形竪穴状遺構(第37図)

位置 調査Ⅲ区の東部、C6a区。

規模と平面形 確認できたのは北西コーナー付近の西壁の一部0.75mと、北壁の一部0.75mだけで、大半は調査区外に延びているが、一辺2.5m前後の方形と思われる。

主軸方向 N-85°-E

壁 壁高は58-64cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平床で、壁際以外は全体的に黒色の汚れが目立ち、硬く踏み固められている。調査区内と調査区外との接点部に炭化物が見られる。

覆土 4層からなる。人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、ローム中・小ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子多量、ローム大・中・小ブロック中量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量、ローム大・中・小ブロック中量、炭化物・炭化粒子少量

遺物 覆土中から上師製土器が少量出土している。

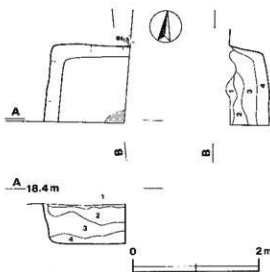
所見 本跡は、床面に炭化物の集中地点が存在したが、土上は認められず、火の使用は床面より上層であったものと思われる。時期は、覆土の状態や周りの方形竪穴状遺構の配置から中世前半の12-13世紀と考えられる。

表6 三本松遺跡住居跡・方形竪穴状遺構一覧表

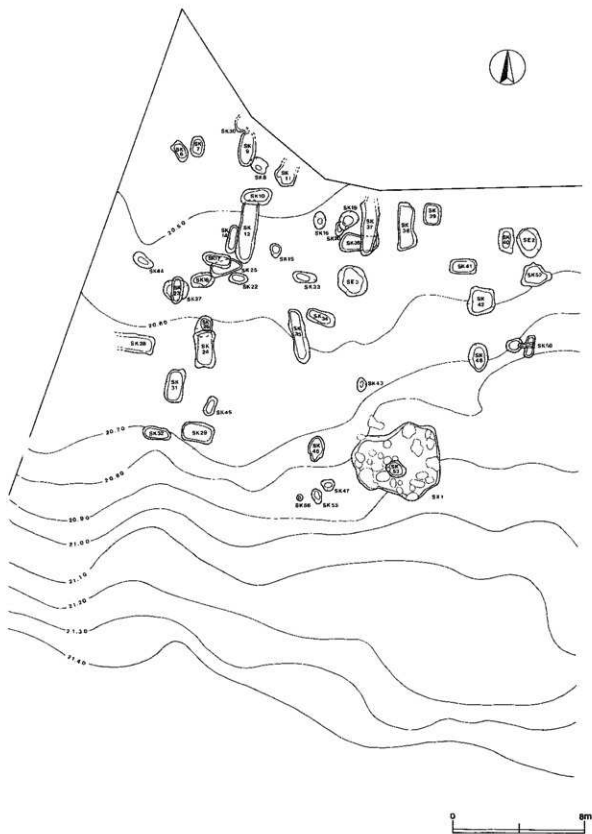
住居跡 方形竪穴 状遺構 番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	内部施設						覆土	主な遺物	備考
							壁溝	土柱穴	貯蔵穴	灶	出入口	炉・竈			
1	B0c	N-15°-E	隅丸方形	2.0×2.45	20-30	平床 一部傾斜	-	1	-	-	1	-	丸底	土実機(串通元筒・串通筒 蓋・瓦葺溝蓋・鉄片高蓋)	中世前半 (12-13世紀)
2	B6i	N-89°-E	方形	2.0×2.46	35-44	平床	-	2	-	-	-	-	丸底	中世前半 (12-13世紀)	
3	B6j	N-79°-E	方形	2.85×2.82	66-60	平床	-	2	-	-	1	-	丸底	中世前半 (12-13世紀)	
4	B0i	N-87°-W	長方形	2.8×2.46	30-40	平床	-	2	-	-	-	-	丸底	中世前半 (12-13世紀)	
5	B0b	N-70°-E	隅丸長方形	2.87×2.18	28-32	平床	-	1	-	-	-	-	丸底	上師製土器(丸底かわらけ)	中世前半 (12-13世紀)
6	C4b	N-32°-W	方形	5.8×7.21	58-38	平床	ほぼ平床	-	1	-	-	電1	白土	土師器(埴・鉢・甕)	古墳時代前期 (6世紀前半)
7	C6a	N-85°-E	方形	10.25×10.25	58-64	平床	-	-	-	-	-	-	丸底	中世前半 (12-13世紀)	

(2) 土壌墓

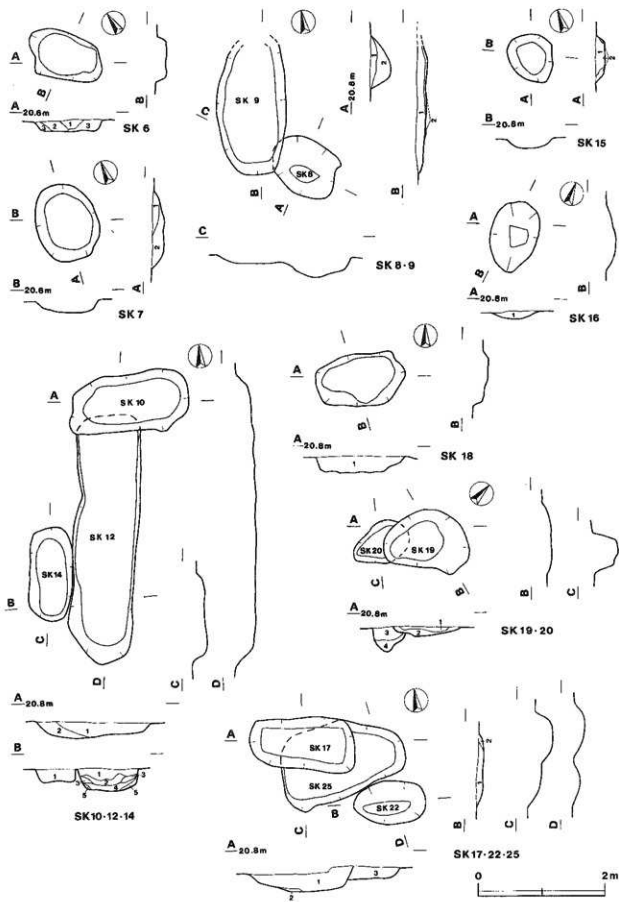
調査Ⅲ区の北西部から中世の土壌墓4基を確認した。この内の2基は粘土貼土壌墓である。ここでは土壌墓及び出土遺物の実測図だけを掲載し、内容等については土坑・土壌墓一覧表に記載した。



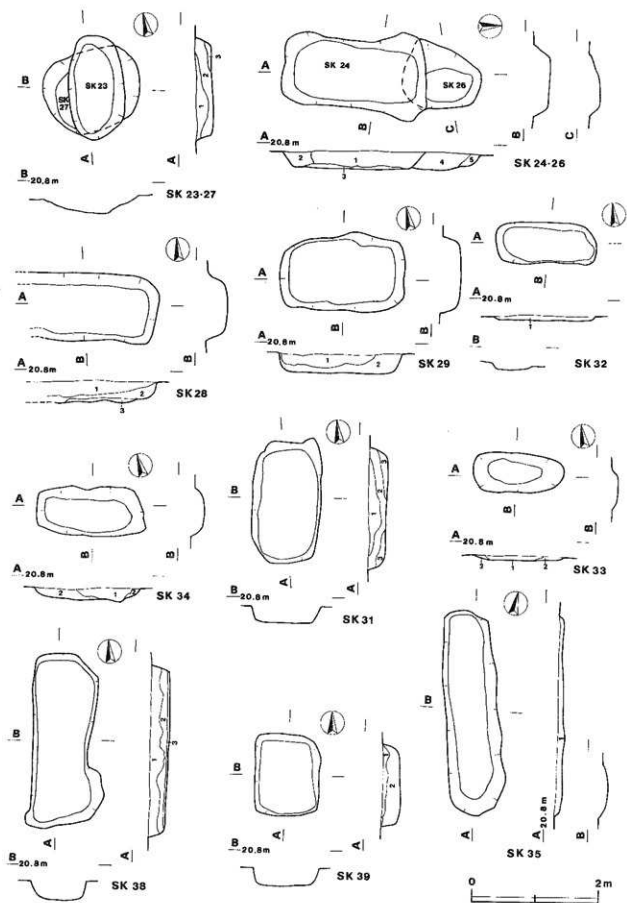
第37図 第7号方形竪穴状遺構実測図



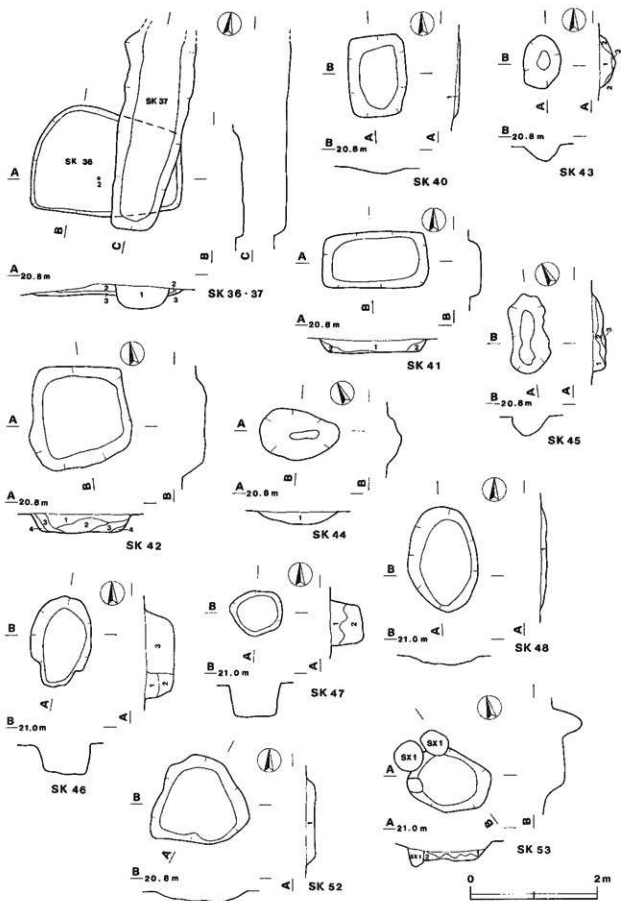
第38圖 中世遺構群配置圖



第39图 土壤基实测图(1)



第40图 土墳墓实测图(2)



第41图 土壤基实测图(3)

第6号土壤基土層解説

- 1 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量

第7号土壤基土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量

第8号土壤基土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量

第9号土壤基土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子中量、粘土粒子少量
- 2 にぶい褐色 粘土を貼り付けた層

第10号土壤基土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 極暗褐色 ローム粒子少量

第12号土壤基土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 4 極暗褐色 ローム粒子微量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量

第14号土壤基土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量

第15号土壤基土層解説

- 1 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子中量

第16号土壤基土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量

第17・25号土壤基土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、ローム大・中・小ブロック中量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量

第22号土壤基土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量

第18号土壤基土層解説

- 1 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量

第19・20号土壤基土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、粘土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量

第23号土壤基土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック多量、ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム大・中・小ブロック多量、ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量

第24・26号土壤基土層解説

- 1 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 4 黒褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量

第28号土壤基土層解説

- 1 黒褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、粘土小ブロック・粘土粒少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量

第29号土壤基土層解説

- 1 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量
- 2 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子中量

第31号土壤基土層解説

- 1 黒褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子中量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量

第32号土壤基土層解説

- 1 黒褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子少量

第33号土壤基土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量

第34号土壤基土層解説

- 1 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 2 黒褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量

第35号土壤基土層解説

- 1 黒褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量

第36・37号土壤基土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、粘土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・粘土粒子少量
- 3 にぶい褐色 粘土を貼り付けた層

第38号土壤基土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム大・中ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

第39号土壤基土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 2 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子中量

第40号土壤基土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量

第41号土壤基土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量

第42号土壤基土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子中量

第43号土壤基土層解説

- 1 暗褐色 ローム中・小ブロック多量、ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量

第44号土壤基土層解説

- 1 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子微量

第45号土壤基土層解説

- 1 黒褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子多量
- 3 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量

第46号土壌墓土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量

第47号土壌墓土層解説

- 1 暗褐色 ローム中・小ブロック中量, ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量

第48号土壌墓土層解説

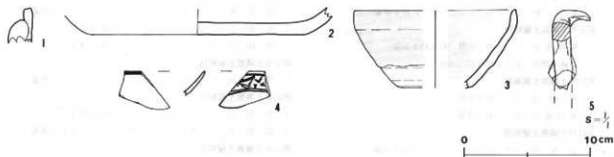
- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

第52号土壌墓土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量

第53号土壌墓土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック, ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量



第42回 土壌墓出土遺物実測図

第12号土壌墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第42回 1	甕 陶器	B(2.6)	口縁部の破片。口縁端部に緑帯をめぐらす。	模造り成形。口縁部内・外面横ナデ。口縁部内・外面に自然軸が分かる。	胎土・色調・焼成 砂粒・長石 胎土：褐色 軸：暗赤褐色 普通	P20 東寄り覆土 常滑系

第36号土壌墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第42回 2	内耳罎 土師質土器	B(2.1) C(17.0)	底部の破片。平底。	体部下端及び底部内・外面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	P21 南寄り覆土 在地系
3	天目罎 陶器	A(12.8) B(6.2) C(5.8)	高台部欠損。体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。口縁部は直立ぎみに開く。	ロクロ成形。内面～体部外面中位に鉄軸を施軸。	砂粒 胎土：灰褐色 軸：黒褐色 普通	P22 北寄り覆土 瀬戸・美濃系
4	染付皿 磁器	B(2.0)	口縁部の破片。	ロクロ成形。口縁端部外面に乳須による緑取り。口縁部内面に乳須による手描き文様有り。全面に透明軸。	- 胎土：灰褐色 軸：透明 良好	P23 北寄り覆土 明染付

第37号土壌墓出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値				現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)			
第42回5	鉄釘	(2.1)	1.1	0.6	(2.0)	50	東寄り覆土	M7

(3) 火葬墓

第50号火葬墓(第43回)

位置 調査Ⅲ区の北西部, B4c1区。

規模と平面形 全長1.76m, 東側の土壌は長軸1.24m, 短軸0.54mの長方形, 西側の土壌は長径0.92m, 短径

0.82mの円形で、東側の土壌と西側の土壌の間に長さ1.04m、上幅30cm、下幅20cmの溝が入る。

長軸方向 N-88°-W

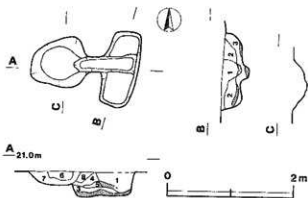
壁 東側の土壌の深さは34cmで、外傾して立ち上がり、断面形は逆台形をしている。西側の土壌の深さは24cmで、緩やかに立ち上がり、断面形は皿状をしている。間の溝の深さは14cmで、断面形は「U」字形をしている。東側の土壌及び間の溝の壁面の一部は火熱を受け、赤変している。

底面 東側の土壌の底面は、中央部の間の溝を除いて平坦である。西側の土壌の底面は皿状をしている。東側の土壌及び間の溝の底面の一部は火熱を受け、赤変している。

覆土 8層からなる。人為地積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 炭化物・炭化粒子・火葬骨片多量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子中量
- 4 に近い赤褐色 焼土小ブロック中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 5 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量
- 7 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子中量
- 8 地山のローム層



第43図 第50号火葬墓実測図

遺物 覆上下層には火葬骨片及び炭化物の純層が見られる。その他に、覆土中から流れ込みと思われる鉄滓が少量出土している。

所見 本跡は、西側に存在する中世土壌墓群と同連のある火葬墓と思われる。本跡を構成している東側の土壌は、火葬骨片、炭化物及び焼土の検出状況から、遺骸を火葬にした土壌と考えられ、東側の土壌から西に延びる間の溝は、火葬竈に空気を入れる空気孔と考えられる。また、西側の土壌は空気孔の口部としては大きすぎ、その機能について詳細は不明であるが、本跡とは関係のない別の土坑であるとは考えにくく、東側の土壌（火葬竈）及び間の溝（空気孔）と同じように本跡（火葬墓）を構成するものと思われる。時期は、覆土の状態や周りの遺構配置から中世後半の15-16世紀のものと考えられる。

(4) 土坑内貝塚

第55号土坑内貝塚（第44図）

位置 調査Ⅲ区の北西部、B4f区。

規模と平面形 長径0.65m、短径0.58mの円形。

長径方向 N-3°-W

壁 深さは71cmで、外傾して立ち上がる。断面形は「U」字形をしている。

底面 凹凸がある。

覆土 3層からなる。人為堆積である。

土層解説

- 1 紅褐色
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、貝片微量
- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、貝片少量

遺物 貝層から検出された貝は、巻貝（オオタニシ約2,070g）及び二枚貝（イシガイ約60g、ヌマガイ約30g）である。イシガイ及びヌマガイは、下層だけで上層には認められなかった。

所見 本跡は、西側に存在する第56号土坑内貝塚や東側に存在する第1号不明遺構（P₈）と同連のある土坑

内貝塚と思われる。時期は、覆土の状態や周りの遺構配置から中世後半の15-16世紀のものと考えられる。

第56号土坑内貝塚 (第44図)

位置 調査Ⅲ区の北西部, B4f区。

規模と平面形 一辺0.29mの方形。

長径方向 N-10°-W

壁 深さは45cmで、外傾して立ち上がる。断面形は「U」字形をしている。

底面 凹凸がある。

覆土 2層からなる。人為堆積である。

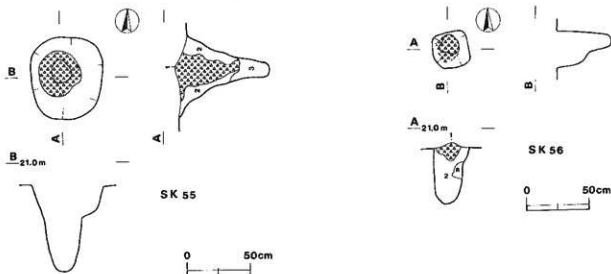
土層解説

1 貝層

2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 貝片微量

遺物 貝層から検出された貝は、巻貝(オオタニシ約40g)及び二枚貝(イシガイ約80g)である。

所見 本跡は、東側に存在する第55号土坑内貝塚及び第1号不明遺構(Ps)と関連のある土坑内貝塚と思われる。時期は、覆土の状態や周りの遺構配置から中世後半の15-16世紀のものと考えられる。



第44図 第55・56号土坑内貝塚実測図

(5) 土坑

第1号土坑 (第45図)

位置 調査Ⅰ区の西部, B2g区。

規模と平面形 長径0.25m, 短径0.22mの円形。

長軸方向 N-48°-W

壁 深さは37cmで、外傾して立ち上がる。断面形は「U」字形をしている。

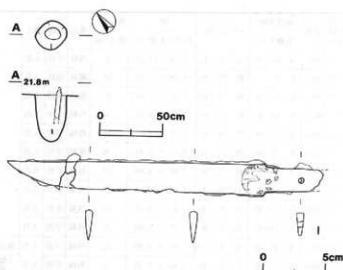
底面 皿状である。

覆土 1層からなる。人為堆積である。

土層解説

1 褐色 ローム粒子多量, ローム中・小ブロック少量

遺物 第45図1の短刀は、中央部から鋒を下、
茎を上にして埋納されたような状態で出土
している。鋒部分は北東方向に折れていた。
木質部分の遺存状態から、埋納当初は木製
の柄があったものと思われる。また、刀身
の部分は埋納当初からむき出して、鞘の中
に納まっていなかったものと思われる。本
遺物は、「呑口式腰刀」と呼ばれる短刀に
属するものと考えられる。



所見 本跡は、北側に存在する第1号方形堅
穴と関連のある土坑と思われる。刀の出土
状況から、刀を使用した何らかの祭祀行為
が行われたのではないかと想定される。時期は、出土遺物から中世前半の12~13世紀と考えられる。

第45図 第1号土坑・出土遺物実測図

第1号土坑出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値						現存率 (%)	出土地点	備考		
		全長(cm)	刀身長(cm)	刀身幅(cm)	刃厚(cm)	茎長(cm)	茎幅(cm)				目釘穴径(cm)	
第4501	短刀	(25.0)	(20.2)	2.6	0.6	(4.8)	1.9	0.6	径0.4	80	中央部	呑口式腰刀、平造り

表7 三本松遺跡土坑・土坑墓類一覧表

土坑 土層 番号	位置 (長軸方向 (長軸方向))	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な遺物	備考
			長径×短径(m)	深さ(m)					
1	B2j1 N-48°-W	円形	0.25 × 0.22	37	外傾	凹状	人為	短刀(呑口式腰刀)	中世前半(12~13世紀)
2	B2e1 N-70°-W	楕円形	2.34 × 2.05	130	外傾	凹凸	人為		
3	B2e2 N-29°-E	楕円形	2.47 × 2.20	78	外傾	凹凸	人為		
4	B2j2 N-18°-W	楕円形	1.93 × 1.55	100	外傾	凹凸	人為		
5	B2g2 N-82°-W	不定形	2.15 × 1.85	130	外傾	凹凸	人為		
6	B3j1 N-40°-W	不整形円形	1.24 × 0.75	18	傾斜	平坦	人為		中世後半(15~16世紀)
7	B3j3 N-0°	楕円形	1.25 × 0.98	22	傾斜	凹状	人為		中世後半(15~16世紀)
8	B4a1 N-45°-W	(不整形円形)	(1.14) × 0.88	34	傾斜	凹状	人為		中世後半(15~16世紀) SK-9より古い
9	B3j3 N-0°	(長方形)	(2.04) × 1.16	14	外傾	平坦	人為		中世後半(15~16世紀) SK-8より新しい、粘土質土層
10	B4a1 N-90°-E	長方形	1.85 × 0.98	28	外傾	平坦	人為		中世後半(15~16世紀) SK-12より新しい
11	B4a1 N-35°-E	(楕円形)	1.39 × (1.10)	16	傾斜	凹状	人為		中世後半(15~16世紀)
12	B4b1 N-6°-E	(長方形)	(4.94) × 1.11	34	外傾	凹状	人為	陶器(常滑系)・縄文土器片・土 師器片・土師質土器片	中世後半(15~16世紀) SK-10より古い
14	B4b2 N-8°-E	長方形	1.50 × 0.71	24	外傾	平坦	人為		中世後半(15~16世紀)
15	B4b1 N-7°-W	楕円形	0.75 × 0.69	16	傾斜	平坦	人為	縄文土器片	中世後半(15~16世紀)
16	B4a1 N-3°-W	楕円形	1.16 × 0.72	17	傾斜	平坦	人為		中世後半(15~16世紀)
17	B4b2 N-75°-W	長方形	1.67 × 0.85	32	外傾	平坦	人為		中世後半(15~16世紀) SK-25より新しい
18	B4b1 N-84°-E	長方形	1.43 × 0.85	26	外傾	平坦	人為		中世後半(15~16世紀)
19	B4a1 N-38°-E	不整形円形	1.32 × 1.05	14	傾斜	凹状	人為		中世後半(15~16世紀) SK-20より新しい
20	B4a1 N-10°-E	楕円形	(0.96) × 0.70	42	外傾	凹状	人為		中世後半(15~16世紀) SK-19より古い
22	B4b1 N-84°-W	楕円形	1.15 × 0.70	10	傾斜	凹状	人為	陶器片	中世後半(15~16世紀)
23	B4c2 N-7°-E	長方形	1.55 × 0.88	28	外傾	平坦	人為	土師器片	中世後半(15~16世紀) SK-27より新しい
24	B4c1 N-6°-E	長方形	4.28 × 1.45	30	外傾	平坦	人為		中世後半(15~16世紀) SK-28より新しい

土坑 土層 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形		規 模		壁面	底面	掘土	主 要 遺 物	類 号
			長 方 形	長径×短径(m)	深さ(cm)						
25	B4b1	N-85°-W	長方形	1.98×1.24	34	外傾	平坦	人為		中世後半(15-16世紀) S3-17より古い	
26	B4c1	N-0°	楕円形	1.28×1.10	26	縦斜	屈状	人為		中世後半(15-16世紀) S3-24より古い	
27	B1c1	N-90°-E	楕円形	1.55×1.34	20	縦斜	屈状	人為		中世後半(15-16世紀) S3-23より古い	
28	B4c1	N-85°-W	長方形	2.08×1.07	36	外傾	平坦	人為		中世後半(15-16世紀)	
29	B4c1	N-75°-W	長方形	1.97×1.25	34	外傾	平坦	人為		中世後半(15-16世紀)	
30	B3j1	N-50°-W	楕円形	1.00×0.48	26	縦斜	平坦	人為		中世後半(15-16世紀)	
31	B4d1	N-5°-E	長方形	1.98×1.09	28	外傾	平坦	人為		中世後半(15-16世紀)	
32	B4c1	N-86°-W	長方形	1.60×0.63	10	外傾	平坦	人為		中世後半(15-16世紀)	
33	B4b1	N-75°-W	長方形	1.45×0.65	10	外傾	平坦	人為		中世後半(15-16世紀)	
34	B4c1	N-69°-W	長方形	1.75×0.80	20	外傾	平坦	人為		中世後半(15-16世紀)	
35	B4c1	N-15°-E	長方形	3.27×0.89	12	外傾	平坦	人為	陶器片	中世後半(15-16世紀)	
36	B4b1	N-90°-E	長方形	2.40×1.75	16	外傾	平坦	人為	土師質土器(内耳鍋)・陶器(大石鍋) ・磁器(茶付箱)・鉄製品	中世後半(15-16世紀) S3-27より古い、土師質土器 中世後半(15-16世紀) S3-28より古い	
37	B4b1	N-2°-E	長方形	3.20×1.10	20	外傾	平坦	人為	鉄製品(釘)・土師質土器	中世後半(15-16世紀)	
38	B4b1	N-0°	長方形	2.80×1.24	32	外傾	平坦	人為		中世後半(15-16世紀)	
39	B3a1	N-3°-E	長方形	1.33×1.00	30	外傾	平坦	人為		中世後半(15-16世紀)	
40	B4b1	N-0°	長方形	1.34×0.93	10	外傾	平坦	人為		中世後半(15-16世紀)	
41	B4b1	N-90°-E	長方形	1.68×0.89	22	外傾	平坦	人為		中世後半(15-16世紀)	
42	B4c1	N-6°-E	長方形	1.65×1.60	35	外傾	平坦	人為	縄文土器片・土師器片・磁器片	中世後半(15-16世紀)	
43	B4d1	N-0°	楕円形	0.85×0.60	26	縦斜	屈状	人為		中世後半(15-16世紀)	
44	B4b1	N-48°-W	楕円形	1.25×0.78	34	縦斜	屈状	人為		中世後半(15-16世紀)	
45	B4c1	N-28°-E	不規則形	1.27×0.65	32	外傾	屈状	人為		中世後半(15-16世紀)	
46	B4c1	N-12°-E	長方形	1.45×0.98	50	外傾	平坦	人為		中世後半(15-16世紀)	
47	B4c1	N-85°-W	円形	0.85×0.74	54	外傾	平坦	人為		中世後半(15-16世紀)	
48	B4c1	N-3°-W	長方形	1.67×1.11	16	外傾	平坦	人為		中世後半(15-16世紀)	
50	B4c1	N-88°-W	-	-	-	-	-	人為	火葬骨片・鉄滓	中世後半(15-16世紀) 火葬墓	
52	B4b1	N-75°-E	不規則形	1.60×1.44	29	縦斜	屈状	人為		中世後半(15-16世紀)	
53	B4c1	N-54°-W	楕円形	1.28×0.95	30	外傾	平坦	人為		中世後半(15-16世紀) S3-1より古い	
55	B4f1	N-3°-W	円形	0.65×0.58	71	外傾	凹み	人為	鉄製オオキリシ、二枚貝(イシガイ)	中世後半(15-16世紀) 土師質土器	
56	B4f1	N-10°-W	円形	0.29×0.29	45	外傾	凹み	人為	磁器(オオキリシ)、二枚貝(イシガイ)	中世後半(15-16世紀) 土師質土器	

(6) 井戸

第1号井戸(第46図)

位置 調査I区の東部, B2e1区。

規模と形状 長径2.05m, 短径1.90mの円形。断面形はラッパ状をしている。

長径方向 N-15°-W

壁 確認面から1mの深さまでは急傾斜で下がり, そこからは円筒形となっている。確認面から1.8mの深さまで掘り下げたが, 底面には達しなかった。

覆土 5層からなる。人為堆積である。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|---------------------|---|-----|-------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量 | 4 | 暗褐色 | ローム大・中・小ブロック・ローム粒子少量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック微量 | 5 | 暗褐色 | ローム大・中・小ブロック多量, ローム粒子少量 |
| 3 | 暗褐色 | ローム小ブロック少量, ローム粒子微量 | | | |

遺物 覆土中から縄文土器片, 土師器片, 埴輪片, 土師質土器片, 鉄製品及び貝類が少量出土している。

所見 本跡は, 底面まで掘り下げることができなかったため確実な時期は不明であるが, 周りの遺構配置から中世のものと考えられる。

第2号井戸 (第46図)

位置 調査Ⅲ区の北西部, B4b区。

規模と形状 長径1.70m, 短径1.48mの楕円形。断面形はラッパ状をしている。

長径方向 N-17°-W

壁 確認面から60cmの深さまでは急傾斜で下がり, そこから下は円筒形となっている。確認面から1.7mの深さまで掘り下げたが, 底面には達しなかった。

覆土 3層からなる。人為堆積である。

土層解説

1 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量

2 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量

3 暗褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子少量

遺物 覆土中から縄文土器片及び土師器片が少量出土している。

所見 本跡は, 底面まで掘り下げることができなかったため確実な時期は不明であるが, 周りの遺構配置から中世土壌墓群に伴う副葬用の井戸と考えられる。

第3号井戸 (第46図)

位置 調査Ⅲ区の北西部, B4b区。

規模と形状 長径2.06m, 短径1.78mの楕円形。断面形はラッパ状をしている。

長径方向 N-42°-W

壁 確認面から60cmの深さまでは急傾斜で下がり, そこから下は円筒形となっている。確認面から1.7mの深さまで掘り下げたが, 底面には達しなかった。

覆土 4層からなる。人為堆積である。

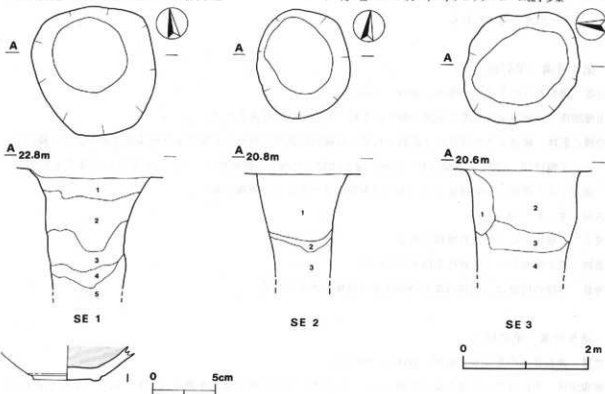
土層解説

1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子少量

2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

3 暗褐色 ローム粒子少量

4 褐色 ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量



第46図 第1・2・3号井戸, 出土遺物実測図

遺物 図示した陶器及びそれ以外の土師質土器片、陶器片が覆土中から少量出土している。第46図1の瀬戸・美濃系の平碗は束寄りの覆土中から出土している。その他に、覆土中から流れ込みと思われる土師器片が少量出土している。

所見 本跡は、底面まで掘り下げることができなかったため確実な時期は不明であるが、周りの遺構配置から中世土城墓群に伴う副冪の井戸と考えられる。

第3号井戸出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	粘土・色調・焼成	備 考
第46図	平 碗	D (2.2)	口縁部欠損、底部は平底で、断面形	ロクワ成形。削り出し高台。内面に	砂粒	P24 30%
1	陶 器	D 5.2	が逆台形の輪成台が付く。体厚は内	灰釉を塗施。	粘土：淡黄色	束寄り覆土
		E 0.3	壁しながら立ち上がる。		釉：淡黄色	瀬戸・美濃系
					普通	

(7) 溝

第3号溝（第47図）

位置 調査Ⅱ区の北部から南部、B3c₄～B3h₁区。

重複関係 本跡は第4、5、6、7号溝を掘り込んでおり、調査Ⅱ区の溝の中では一番新しい。

規模と形状 確認できた部分は全長21.6mで、直線的に伸びており、北端部及び南端部は調査区外に続いている。上幅は122～138cm、下幅は20～80cm、深さは28～32cmで、断面形は「U」字形あるいは皿状をしている。

方向 N-11°-E

覆土 2層からなる。自然堆積である。

遺物 本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡は、西側に存在する第1号道路状遺構と関連のある側溝と思われる。時期は、周辺の溝との関係から中世～近世と考えられる。

第4号溝（第47図）

位置 調査Ⅱ区の北部から南部、B3b₂～B3h₂区。

重複関係 本跡は第3号溝に北部を掘り込まれており、第3号溝よりは古い。

規模と形状 確認できた部分は全長26.0mで、直線的に伸びており、北端部及び南端部は調査区外に続いている。上幅は76～130cm、下幅は10～34cm、深さは22～72cmで、断面形は「V」字形あるいは皿状をしている。

確認できた部分の中央付近には、出入口を想定させるような障壁がある。

方向 N-6°-W

覆土 5層からなる。人為堆積である。

遺物 覆土中からメノウ割片が出土している。

所見 本跡の時期は、周辺の溝との関係から中世と考えられる。

第5号溝（第47図）

位置 調査Ⅱ区の北部から南部、B3f₁～B3h₁区。

重複関係 本跡は第6号溝の東部を掘り込んでいるが、第3号溝に北部を掘り込まれており、第6号溝よりは新しいが、第3号溝よりは古い。

規模と形状 確認できた部分は全長9.2mで、直線的に延びており、南端部は調査区外に続いている。上幅は74～112cm、下幅は20～40cm、深さは22～24cmで、断面形は「U」字形あるいは皿状をしている。

方向 N-2°-W

覆土 2層からなる。自然堆積である。

遺物 図示した陶器、砥石及びそれ以外の土師質土器片が覆土中から少量出土している。第48図1の瀬戸・美濃系の壺及び2の砥石は南寄りの覆土下層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物及び周辺の溝との関係から中世と考えられる。

第6号溝（第47図）

位置 調査Ⅱ区の北部から南部、B3g1～B3h1区。

重複関係 本跡は第3号溝に西部を、第5号溝に東部を掘り込まれており、第3、5号溝よりは古い。

規模と形状 確認できた部分は全長7.3mで、直線的に延びており、南端部は調査区外に続いている。上幅は160cm、下幅は14～80cm、深さは8～26cmで、断面形は「U」字形あるいは皿状をしている。

方向 N-1°-W

覆土 2層からなる。自然堆積である。

遺物 覆土中から陶器片が少量出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物及び周辺の溝との関係から中世と考えられる。

第7号溝（第47図）

位置 調査Ⅱ区の、北部から南部、B3b2～B3f1区。

重複関係 本跡は第3号溝に南部を掘り込まれており、第3号溝よりは古い。また、本跡の上面に第1号道路状遺構が造られており、第1号道路状遺構よりも古い。

規模と形状 確認できた部分は全長17.6mで、北端部は調査区外に延びている。上幅は68～115cm、下幅は30～70cm、深さは14～18cmで、断面形は「U」字形あるいは皿状をしている。

方向 N-5°-E

覆土 2層からなる。人為堆積である。

遺物 図示した陶器及びそれ以外の土師質土器片、陶器片が覆土中から少量出土している。第48図1の常滑系の壺は南寄りの覆土中から出土している。その他に、覆土中から流れ込みと思われるメノウ剥片が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物及び周辺の溝との関係から中世と考えられる。

(8) 道路状遺構

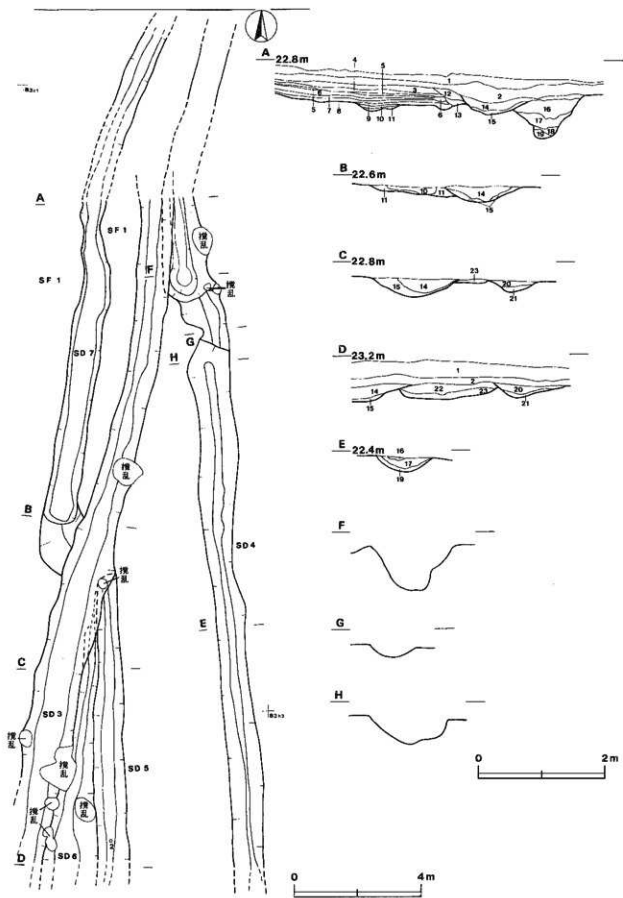
第1号道路状遺構（第47図）

位置 調査Ⅱ区の北部から南部、B3c2～B3h1区。

重複関係 本跡は第7号溝の上面に造られており、第7号溝よりは新しい。

規模と形状 確認できた部分は全長24m、最大幅4.5mで、直線的に延びており、北端部、南端部及び西部は調査区外に続いている。

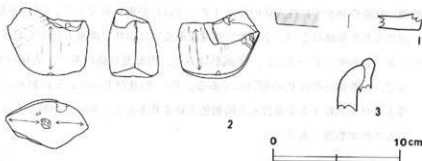
方向 N-11°-E



第47图 第3·4·5·6·7号沟, 第1号道路状遺構実測図

遺物 本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡の土層断面を観察すると、7～8面にわたる硬化面が確認できる。時期は、周辺の溝との関係から中世～近世と考えられる。また、本跡の東側に沿うように存在する



第48図 第5・7号溝出土遺物実測図

第3号溝は、本跡の側溝であると思われる。

第3・4・5・6・7号溝、第1号道路状遺構土層解説

- | | | | |
|--------|---|--------|----------------------------------|
| 1 褐色 | ローム粒子・砂粒多量、炭化粒子・粘土粒子微量 | 11 暗褐色 | 砂粒中量、ローム粒子少量、ローム小ブロック微量、硬く締まっている |
| 2 褐色 | ローム中・小ブロック・ローム粒子・砂粒中量 | 12 暗褐色 | ローム粒子中量、砂粒少量、軟らかい |
| 3 暗褐色 | ローム粒子中量、砂粒・炭化粒子少量、硬く締まっている | 13 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量、砂粒少量、軟らかい |
| 4 暗褐色 | ローム粒子中量、砂粒・炭化粒子・粘土小ブロック・粘土粒子少量、硬く締まっている | 14 褐色 | ローム中・小ブロック・ローム粒子・砂粒少量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子・砂粒少量、硬く締まっている | 15 褐色 | ローム粒子・砂粒多量 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子・砂粒・焼土粒子・炭化粒子微量、硬く締まっている | 16 暗褐色 | ローム大・中・小ブロック・ローム粒子中量 |
| 7 暗褐色 | ローム粒子・砂粒少量、焼土粒子微量、硬く締まっている | 17 暗褐色 | ローム大・中・小ブロック・ローム粒子多量 |
| 8 暗褐色 | ローム粒子・砂粒・炭化粒子微量、硬く締まっている | 18 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 9 暗褐色 | ローム粒子・砂粒少量、炭化粒子微量、硬く締まっている | 19 暗褐色 | ローム中・小ブロック・ローム粒子多量 |
| 10 暗褐色 | ローム粒子多量、ローム小ブロック・砂粒少量、硬く締まっている | 20 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| | | 21 褐色 | ローム粒子中量 |
| | | 22 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| | | 23 褐色 | ローム粒子少量 |

第5号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第48図 1	壺 陶器	B(1.0) C(11.2)	底部の破片。平底。	口口成形。外面に灰輪を施す。	胎土：色調・焼成 砂粒 粘土：浅黄色 輪：灰オリーブ色 普通	P1 5% 南寄り覆土 瀬戸・美濃系

図版番号	種別	計測値				現存率 (%)	石質	出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)				
第48図2	紙石	5.3	6.3	4.0	(138.2)	80	硬質凝灰岩	南寄り覆土下層	04

第7号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第48図 3	壺 陶器	B(4.1)	口縁部の破片。口縁部に緑帯をめぐらす。	轆造り成形。口縁部内・外面横ナデ。口縁部外面に自然輪が少かる。	砂粒・長石・石英 胎土：褐灰色 輪：黒色 普通	P2 5% 南寄り覆土 常陸系

(9) 不明遺構

第1号不明遺構(第49図)

位置 調査Ⅲ区の北東部、B4es区。

重複関係 本跡は第53号土壌墓の上面に造られており、第53号土壌墓よりは新しい。

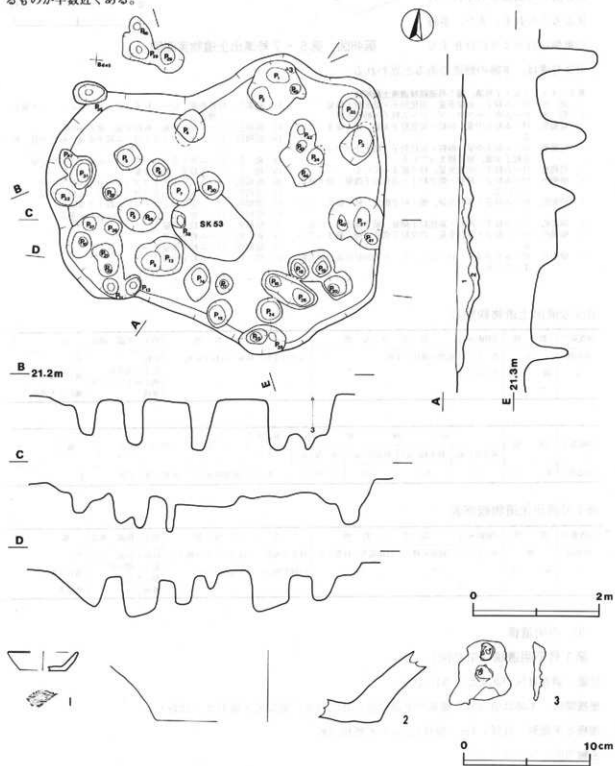
規模と平面形 長径5.4m、短径4.3mの不整形円形。

主軸方向 N-72°-W

壁 壁高は16-20cmで、外傾して立ち上がる。

底面 底面の48か所に柱穴状の小穴（P₁～P₄₈）が掘られていて、凹凸が激しい。それ以外のところも踏み固められた形跡はない。全体的に階段状あるいは皿状に南東方向から北西方向へ傾斜している。

ピット 48か所（P₁～P₄₈）。平面形は方形、円形及び楕円形で、直径は30～50cmである。深さの平均は54cmで、一番深いのはP₂の87.8cmである。P₃、P₄及びP₃₄のように斜めに掘られたものもある。ピット内覆土はローム粒子を少量含んだ暗褐色土層を基本としており、中層から下層にかけて方形の柱痕が確認できるものが半数近くある。



第49図 第1号不明遺構・出土遺物実測図

覆土 2層からなる。自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量

遺物 図示した土師質土器、陶器、鉄鍋及びそれ以外の土師質土器、鉄製品が覆土中やピットの覆土から少量出土している。第49図1の平底かわらけ及び2の常滑系の甕は東寄りの覆土中から、3の鉄鍋はP₁の覆土からそれぞれ出土している。また、P₆の覆土下層から二枚貝(イシガイ約1,050g、マツカサガイ約160g)が検出された。その他に、覆土中から流れ込みと思われる縄文土器片及び土師器片が少量出土している。

所見 本跡は、西側に存在する第55、56号土坑内貝塚や北側に存在する中世土壌墓群と関連のある遺構と思われるが、性格については不明である。しかし、方形の柱痕が確認されたことから角柱が想定され、上層構造の存在や、墓標あるいは卒塔婆的なものの樹立の可能性も考えられる。時期は、出土遺物や周りの遺構配置から中世後半の15~16世紀のものと考えられる。

第1号不明遺構出土遺物観察表

図取番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	新土・色調・焼成	備考
第49図1	平底かわらけ 土師質土器	A(5.4)	平底。体部及び1縁部は外傾しながら立ち上がる。	ロクロ成形。底面に回転糸切り痕有り。	砂粒・雲母にぶい褐色 普通	P25 東寄り覆土 在地系
		B 1.5				
		C(3.6)				
2	甕 陶器	B (4.4)	底部の破片。底部は平底で、中央がやや凹む。	越造り成形。体部ト端及び底部内・外面へラナダ。	砂粒・長石・雲母 新土：灰黄褐色 外面：灰褐色 普通	P26 東寄り覆土 常滑系
		C(17.8)				

図取番号	種別	計測値				現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)			
第49図3	鉄鍋	(5.2)	(4.8)	1.4	(20.3)	5	P ₁ 覆土	MS

3 その他の遺構と遺物

今回の調査では、他にも調査Ⅰ区から土坑4基、溝2条を確認した。以下、確認した遺構と遺物について記載する。

(1) 土坑

調査Ⅰ区からは第1号土坑の他に土坑4基を確認した。いずれからも出土遺物はなく、時期や性格についても不明な部分が多い。これらの土坑については遺構配置図及び土坑・土壌墓類一覧表に記載した。

なお、調査Ⅲ区で番号を付けた第13、21、49、51、54号土坑については、調査及び整理の過程で遺構でない判断したため欠番とした。

(2) 溝

調査Ⅰ区からは溝2条を確認した。出土遺物はほとんどなく、時期や性格についても不明な部分が多い。これらの溝については遺構配置図だけの記載とした。

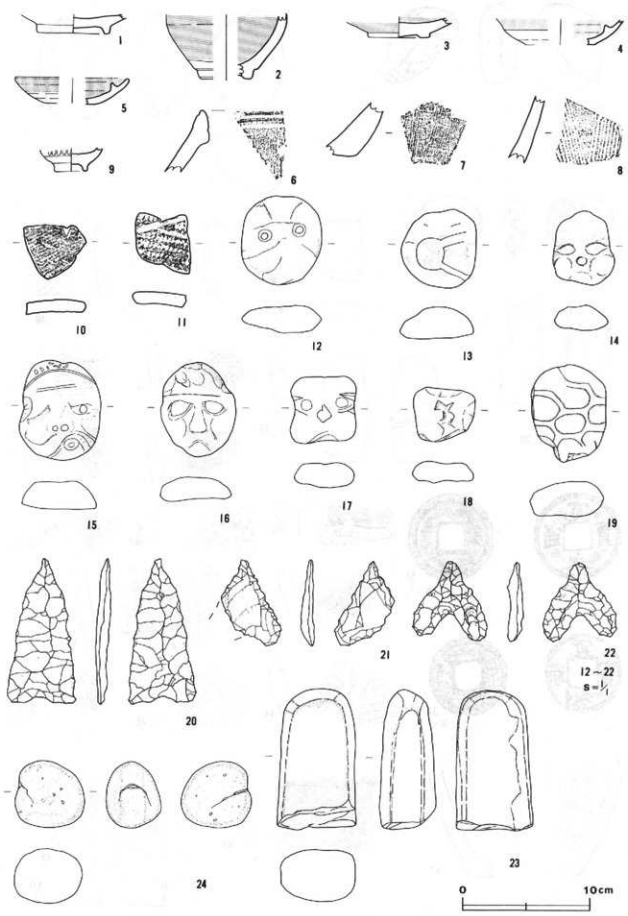
4 遺構外出土遺物

当遺跡からは、表土層及び遺構確認面から、遺構に伴わない遺物が出土している。ここでは、Ⅰ区から出土した縄文土器片、縄文時代の磨石及び礫器、近世の泥面子、砥石及び寛永通寶、Ⅲ区から出土した縄文土器片、縄文時代の土器片鏃、石鏃、磨製石斧及び磨石、弥生土器片、平安時代の須恵器片、近世の陶器片、磁器片、泥面子、砥石、寛永通寶及び火打金、近代の葉巻など特徴的なものについて実測図及び拓影図を掲載し、解説等は一覧表に記載した。

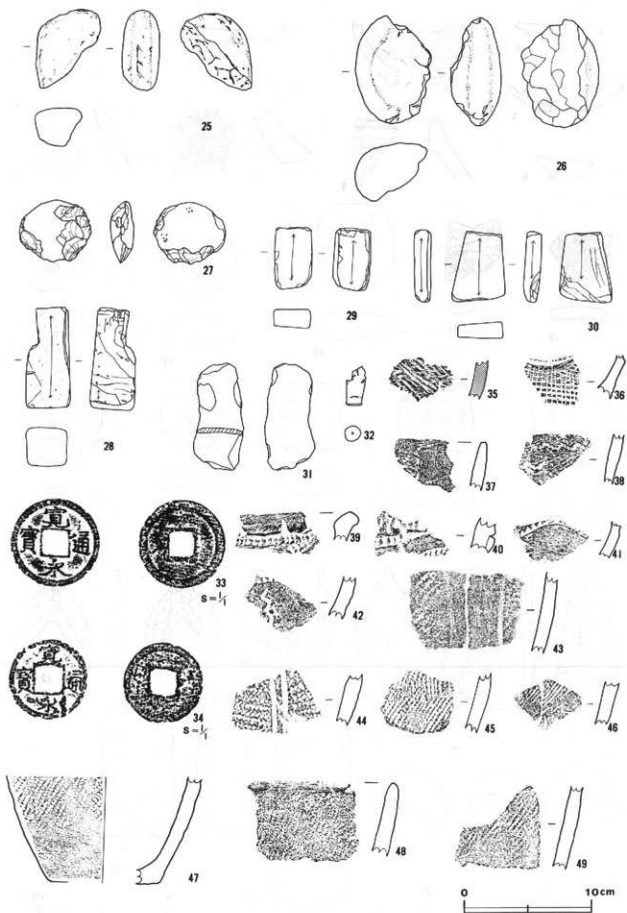
遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第50図 1	平 碗	B (1.3)	底部の破片。底部は平底で、断面形が逆台形の輪高台が付く。	ロクロ成形。貼り付け高台。	砂粒・長石 胎土：灰白色 青濁	P 27 20%
	陶 器	D 5.5				Ⅲ区B6f区付近表土
		B 0.6				瀬戸・美濃系
2	天 皿	B (5.1)	口縁部欠損。底部は平底で、断面形が逆台形の輪高台が付く。体部は内彎しながら立ち上がる。	ロクロ成形。傾り出し高台。内面・体部外面下位に鉄軸を施軸。	砂粒・長石 胎土：灰黄褐色 釉：黒褐色 青濁	P 28 10%
	陶 器	D [3.8]				Ⅲ区B6d区付近表土
		B 0.7				瀬戸・美濃系
3	丸 皿	B (1.2)	底部の破片。底部は平底で、断面形が逆台形の輪高台が付く。	ロクロ成形。傾り出し高台。内面・高台外面に鉄軸を施軸。底部内面に足込目跡4有り。	砂粒・長石 胎土：灰黄褐色 釉：明赤褐色 青濁	P 29 20%
	陶 器	D 4.8				Ⅲ区B4c区付近表土
		B 0.4				唐津系
4	灯明受 皿	B (2.0)	縁部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。体部内面中位に切込の入った環状の仕切が付く。	ロクロ成形。仕切貼り付け。内面・口縁部外面に鉄軸を施軸。	砂粒・長石 胎土：灰黄褐色 釉：明赤褐色 青濁	P 30 20%
	陶 器	C [5.4]				Ⅲ区B4g区付近表土
						瀬戸・美濃系
5	灯明受 皿	A [9.0]	平底。体部及び口縁部は内彎しながら立ち上がる。体部内面中位に切込の入った環状の仕切が付く。	ロクロ成形。仕切貼り付け。内面・縁部外面に鉄軸を施軸。	砂粒・長石 胎土：黄灰色 釉：灰白色 青濁	P 31 20%
	陶 器	B 2.0				Ⅲ区B 5 f区付近確認面
		C [4.0]				瀬戸・美濃系
6	掻 鉢	B (4.8)	口縁部の破片。口縁部に断面形が三角形の凸部をめぐらす。	ロクロ成形。体部内面に7条以上1単位の櫛目有り。口縁部内・外面にそれぞれ2条の沈線を施す。	砂粒・長石・石英 胎土：明赤褐色 外面：灰白色 青濁	P 32 5%
	陶 器				Ⅲ区B5b区付近確認面 明石・堺系	
7	掻 鉢	B (3.5)	底部の破片。平底。	ロクロ成形。体部内面に8条以上1単位の櫛目有り。	砂粒・石英 胎土：灰白色 外面：灰白色 青濁	P 33 5%
	陶 器	C (1.8)			Ⅲ区B 5 b区付近表土 常滑系	
8	掻 鉢	B (5.2)	体部の破片。	ロクロ成形。体部内面に9条以上1単位の櫛目有り。内・外面に鉄軸を施軸。	砂粒・石英 胎土：黄灰色 釉：褐色 青濁	P 34 5%
	陶 器				Ⅲ区B 5 f区付近確認面 瀬戸・美濃系	
9	丸 碗	B (1.8)	底部の破片。底部は平底で、断面形が「U」字形の輪高台が付く。	ロクロ成形。傾り出し高台。体部外面下位に内彫りによる文様有り。高台端部以外全面に透明釉。	胎土：灰白色 釉：透明 良好	P 35 30%
	組 器	D 2.6				Ⅲ区B5b区付近表土
		E 0.8				肥前系

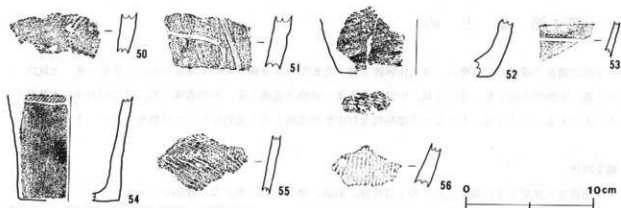
図版番号	種別	計 測 値				現存率 (%)	出 上 地 点	備 考
		最大径(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)			
第50図10	土器片鏃	(4.3)	4.9	1.0	(20.0)	90	Ⅲ区B6b区付近表土	DP1
11	土器片鏃	(5.5)	4.4	0.9	(21.6)	90	Ⅲ区B5b区付近表土	DP2
12	泥面子	2.3	2.1	0.7	2.0	100	Ⅰ区B1d区付近表土	DP3
13	泥面子	2.1	1.9	0.9	2.3	100	Ⅰ区B2f区付近表土	DP4
14	泥面子	1.9	1.6	0.6	1.3	100	Ⅲ区B4b区付近表土	DP5
15	泥面子	2.6	(2.1)	0.7	(3.5)	90	Ⅲ区B4d区付近表土	DP6
16	泥面子	2.5	1.9	0.6	2.7	100	Ⅲ区B5b区付近表土	DP7
17	泥面子	1.7	1.7	0.6	1.7	100	Ⅲ区B5a区付近表土	DP8
18	泥面子	(1.4)	1.6	0.6	(1.0)	80	Ⅲ区B6b区付近表土	DP9
19	泥面子	2.6	(2.0)	0.9	(3.2)	90	Ⅲ区表探	DP10



第50图 遺構外出土遺物実測・拓影图(1)



第51図 遺構外出土遺物実測・拓影図(2)



第52図 遺構外出土遺物実測・拓影図(3)

図版番号	種別	計測値				現存率 (%)	石質	出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)				
第50図20	石 鏝	3.8	1.8	0.4	2.2	100	チャート	Ⅱ区B4b ₂ 区付近確認面	Q6
21	石 鏝	2.3	(1.6)	0.3	(0.7)	80	黒曜石	Ⅱ区B4b ₂ 区付近表土	Q7
22	石 鏝	2.1	2.0	0.4	1.0	100	黒曜石	Ⅱ区B5 ₁ 区付近表土	Q8
23	磨製石芥	(11.1)	6.0	4.0	(493.8)	80	硬質砂岩	Ⅱ区B5 ₁ 区付近確認面	Q9
24	磨石	5.3	5.5	4.3	(172.8)	95	安山岩	Ⅰ区B2b ₂ 区付近表土	Q1
第51図25	磨石	(6.1)	(5.0)	3.0	(91.6)	40	硬質砂岩	Ⅱ区B4d ₁ 区付近表土	Q10
26	磨石	(8.5)	(5.0)	4.6	(224.5)	50	安山岩	Ⅱ区B5b ₂ 区付近表土	Q11
27	磨器	4.8	5.7	1.3	56.4	100	硬質頁岩	Ⅰ区B2 ₁ 区付近表土	Q2
28	紙石	(8.0)	3.5	3.2	(134.6)	50	硬質凝灰岩	Ⅰ区B2b ₂ 区付近表土	Q3
29	紙石	(4.8)	2.9	1.5	(38.8)	50	硬質凝灰岩	Ⅱ区B6d ₁ 区付近表土	Q12
30	紙石	(5.6)	4.2	1.3	(41.4)	50	硬質凝灰岩	Ⅱ区B6b ₁ 区付近表土	Q13

図版番号	種別	計測値				現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)			
第51図31	火打金	8.4	3.8	0.4	(60.7)	95	Ⅱ区B5d ₁ 区付近表土	M0
32	薙 美	(3.3)	1.2	1.2	(5.8)	50	Ⅱ区B5 ₁ 区付近表土	M10

図版番号	銭 種	初 鑄 年		現存率 (%)	出土地点	備考
		時 代	年 号 (西暦)			
第51図33	重永通寶 (一文銭)	江 戸	重永13年 (1636)	100	Ⅰ区B2a ₁ 区付近表土	M5
34	重永通寶 (一文銭)	江 戸	重永13年 (1636)	100	Ⅱ区B4b ₁ 区付近表土	M11

第51図35は縄文時代早期後葉の繊維土器片で、貝殻条痕文が施されている。36は縄文時代前期後葉の土器片、37及び38は縄文時代中期前葉の土器片と思われる。39-42は縄文時代中期中葉の土器片で、隆帯や角押文が施されている。43-47は縄文時代中期後葉の土器片で、縄文や隆帯が施されている。48、49及び第52図50-52は縄文時代後期前葉の土器片で、縄文や沈線文が施されている。53、54は縄文時代後期中葉の土器片で、縄文や沈線文が施されている。

55は弥生時代後期の土器片で、付加条縄文が施されている。

56は平安時代前期の須恵器甕の体部片で、平行叩きが施されている。

第4節 ま と め

今回の調査で確認した遺構は、竪穴住居跡1軒、方形竪穴状遺構6軒、土壌墓43基、火葬墓1基、土坑内貝塚2基、中世の土坑1基、井戸3基、中世の溝5条、道路状遺構1条、不明遺構1基、その他の土坑4基及び溝2条である。ここでは、主として古墳時代及び中世の遺構と出土遺物についての概要を述べ、まとめとする。

縄文時代

早期後葉～後期中葉の縄文土器片や土器片鉢、石鏃、磨製石斧、磨石及び礫器が少量出土している。しかし、今回の調査では縄文時代の遺構は確認されなかった。

弥生時代

後期後葉の弥生土器片が数点出土している。今回報告した資料は1点だけであるが、弥生時代の遺跡が極めて少ない水海道市域においては、大変貴重な資料であると言いうことができる。

古墳時代

今回の調査では当該期に属する竪穴住居跡1軒を確認した。第6号住居跡は北コーナー、竈及び貯蔵穴付近しか調査できなかったが、比較的良好な遺物が遺存していた。土器の組成を見てみると、土師器の坏、鉢及び甕である。

坏は、須恵器坏身の模倣で、口縁部と体部との境にはっきりとした稜を持ち、口縁部が内傾もしくは直立するもの、丸底で、口縁部と体部との境に弱い稜を持ち、口縁部が直立もしくはわずかに内傾するものがある。赤彩あるいは黒色処理された資料は、いずれも検出されなかった。

甕の器形は球形で、中位に最大径を有しており、頸部と体部との境に横ナデによる弱い稜を持っている。体部下端及び底部外面の手法には、ヘラ削りが施されるものとヘラナデが施されるものがある。また、いわゆる常盤型甕に属するタイプの甕が2点ほど出土し、口縁端部に弱い段やわずかなつまみ上げが認められる。

以上のような本跡の土器様相から、本跡の時期は古墳時代後期の6世紀後葉に比定した。

奈良・平安時代

平安時代の須恵器片が数点出土している。今回報告した資料は1点だけであるが、胎土に多量の蜜母を含んでいることから、新治窯跡群から供給された製品と思われる。

中世

当遺跡の中心となる時期で、Ⅰ区から方形竪穴状遺構1軒、土坑1基及び井戸1基、Ⅱ区から溝5条及び道路状遺構1条、Ⅲ区から方形竪穴状遺構5軒、粘土貼土壌墓2基を含む土壌墓43基、火葬墓1基、土坑内貝塚2基、井戸2基及び不明遺構1基を確認した。時期は中世前半の12～13世紀の第1期と、後半の15～16世紀の第2期とに分かれる。

第1期と思われる遺構は、第1～5及び7号方形竪穴状遺構と第1号土坑である。方形竪穴状遺構はその構造から居住施設と考えられる。特にⅢ区から検出された第2～6及び7号方形竪穴状遺構は、東側谷津田に面する緩やかな傾斜面上にまともな立地しており、集落的な配置を示している。遺物は第1号方形竪穴状遺構

から明道元寶、皇宋通寶、元豐通寶及び政和通寶、第5号方形堅穴状遺構から丸底かわらけが出土している。また、第1号土坑からは呑口式腰刀が出土している。

第2期と思われる遺構は、第6-12、14-20、22-48、52及び53号土壇墓、第50号火葬墓、第55・56号土坑内貝塚、第1-3号井戸、第3-7号溝、第1号道路状遺構、第1号不明遺構である。特に置区北西部からは土壇墓、火葬墓、土坑内貝塚、井戸及び不明遺構が集中して検出され、当該期にはここが墓域であったことを如実に物語っている。地形的には北西方向に緩やかに傾斜しており、一番低いところをこれらの中世遺構群が占拠している。土壇墓群の方向性は、大きく東西線上と、南北線上の2方向に分かれる。平面形は半数以上が長方形であるが、厳密に言うとも隅丸長方形もしくは長楕円形となるものもここでは長方形として分類している。また、遺体を埋葬したと断定するには多少の疑問も残るが、長方形及び方形以外の平面形を有する土坑も一応土壇墓とした。遺物は第12号土壇墓から常滑系の甕、第36号土壇墓から内耳鍋、瀬戸・美濃系の天日碗及び明の染付皿、第37号土壇墓から鉄釘が出土している。また、第3号井戸からは瀬戸・美濃系の平碗、第1号不明遺構からは平底かわらけ、常滑系の甕及び鉄鍋が出土している。

近 世

当該期の陶器片、磁器片、泥面子、砥石、寛永通寶、火打金及び鉄滓が表土層及び遺構確認面から中量出土している。陶磁器類の中には16世紀代の製品と思われるものも含まれるが、大半が近世の製品と思われる。また、泥面子が8点ほど出土している。8点とも円盤状を呈する「面打」タイプではなく、人面などの面状を呈する「芥子面」タイプである。8点のうち6点は、現況が窪みもしくはかつて畑だった置区の限られた地点からの出土である。このことは泥面子の一つの使用形態あるいは廃棄形態を意味しているものと思われ、農耕、特に畑作との関連をうかがわせる。その他、砥石、火打金及び鉄滓は中世の可能性もあるが、ここでは一応近世とした。

参考文献

- ・新宿区内藤町遺跡調査会 『内藤町遺跡一放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書一』 1992年3月
- ・中・近世研究班 「中世の堅穴遺構について」 『研究ノート創刊号』 茨城県教育財団 1992年7月
- ・中・近世研究班 「茨城の中・近世遺跡について」 『研究ノート2号』 茨城県教育財団 1993年7月
- ・櫻村宣行 「白石遺跡で検出された遺構について」 『研究ノート2号』 茨城県教育財団 1993年7月
- ・櫻村宣行 「茨城県南部における丸高式土器について」 『研究ノート2号』 茨城県教育財団 1993年7月
- ・石井進・萩原三雄 『中世社会と墳墓一考古学と中世史研究3一』（帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告案）名著出版 1993年7月
- ・吉原作平 「粘土張り墓塚についての一考察一前田村遺跡の粘土張り遺構を取り上げて一」 『研究ノート3号』 茨城県教育財団 1994年6月
- ・大関武・田中幸夫・懸江久美子 「つくば市安食遺跡出土の中・近世遺物について」 『要良岐考古第16号』 要良岐考古同人会 1994年5月
- ・中・近世研究班 「茨城の中世かわらけについて」 『研究ノート4号』 茨城県教育財団 1995年6月
- ・吹野富美夫 「八幡前遺跡における古墳時代後期の土器様相」 『研究ノート4号』 茨城県教育財団 1995年6月
- ・桃崎祐輔 「中世常陸における葬送の風景一中世墓の諸相と通史的叙述への試論一」 『茨城県考古学協会誌第7号』 茨城県考古学協会 1995年8月

写 真 图 版



遺構確認状況



調査終了状況



第5号住居跡完掘



第5号住居跡完掘



第5号住居跡炭化材確認状況



第5号住居跡炭化材確認状況



第5号住居跡遺物出土状況



第5号住居跡貯蔵穴遺物出土状況



第5号住居跡F遺物出土状況



第1号土坑完掘



第3号土坑完掘



第4号土坑完掘



第5号土坑完掘



第7号土坑完掘



第11号土坑完掘



第14号土坑完掘



第5号住居跡，第11号土坑，遺構外出土遺物



遺構確認状況



調査終了状況



第1号住居跡完掘



第1号住居跡炭化材確認状況



第2号住居跡完掘



第2号住居跡遺物出土状況



第3号住居跡完掘



第3号住居跡遺物出土状況



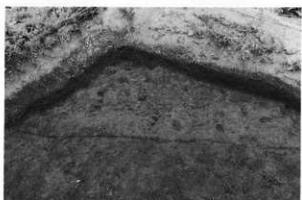
第4号住居跡完掘



第4号住居跡遺物出土状況



第5号住居跡完掘



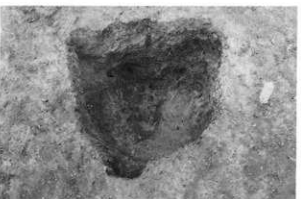
第6号住居跡完掘



第1号土坑完掘



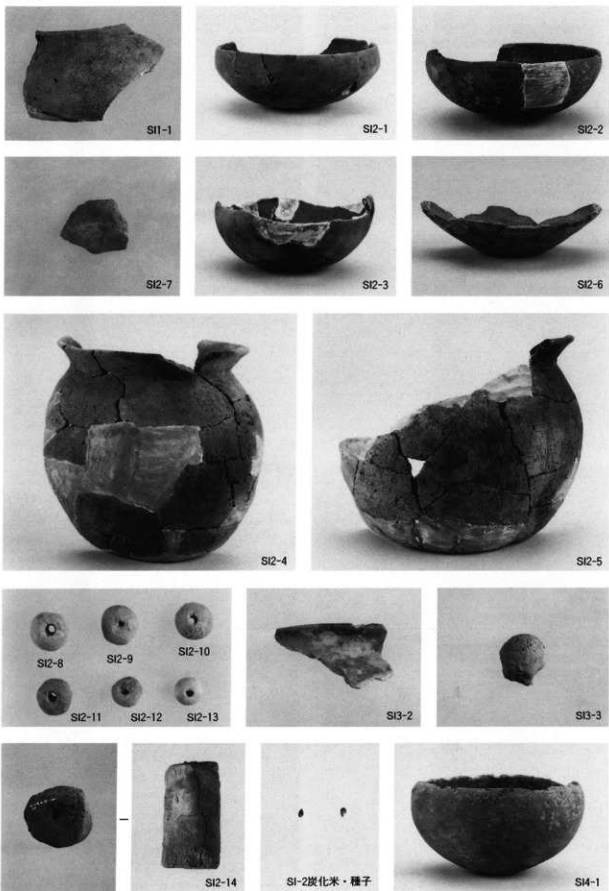
第4・5号土坑完掘



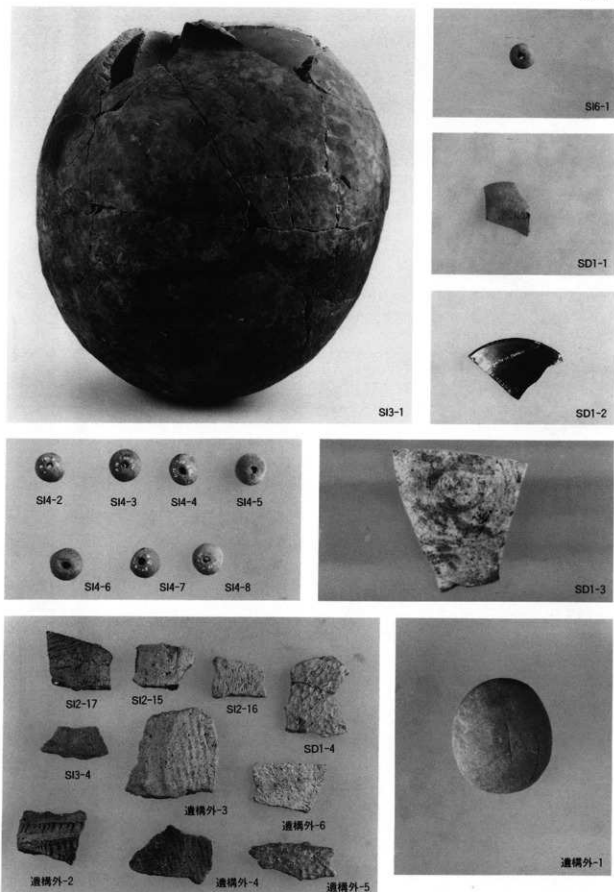
第6号土坑完掘



第8・9号土坑完掘



第1・2・3・4号住居跡出土遺物



第2・3・4・6号住居跡，第1号溝，遺構外出土遺物



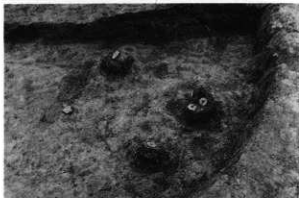
第6号住居跡遺物出土状況



第6号住居跡調査状況



第1号方形竪穴状遺構完掘



第1号方形竪穴状遺構遺物出土状況



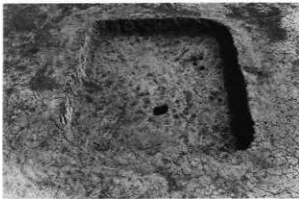
第2号方形竪穴状遺構完掘



第3号方形竪穴状遺構完掘



第4号方形竪穴状遺構完掘



第5号方形竪穴状遺構完掘



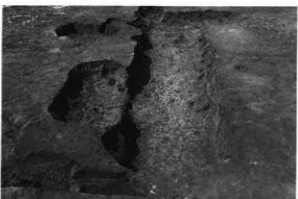
第7号方形竖穴状遗构完掘



方形竖穴状遗构群全景



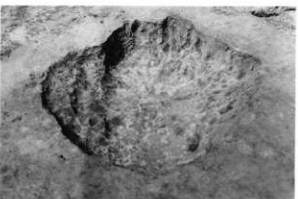
中世遗构群全景



第10·12·14号土坑墓完掘



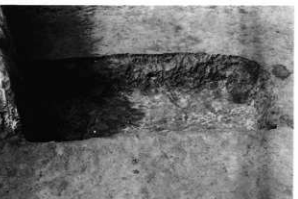
第17·25号土坑墓完掘



第23·27号土坑墓完掘



第24·26号土坑墓完掘



第28号土坑墓完掘



第29号土墳墓完掘



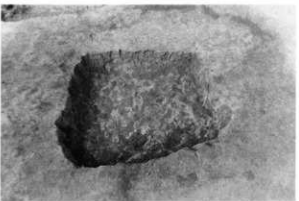
第31号土墳墓完掘



第34号土墳墓完掘



第36・37号土墳墓完掘



第42号土墳墓完掘



第47号土墳墓完掘



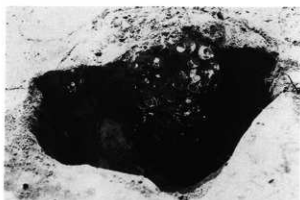
第50号火葬墓完掘



第50号火葬墓完掘



第55号土坑内貝塚確認状況



第55号土坑内貝塚調査状況



第2号井戸調査状況



第3号井戸調査状況



第3・4・5・6・7号溝, 第1号道路状遺構完掘



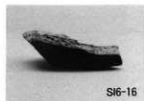
第3・4・5・6・7号溝, 第1号道路状遺構完掘



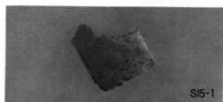
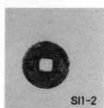
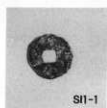
第1号不明遺構完掘



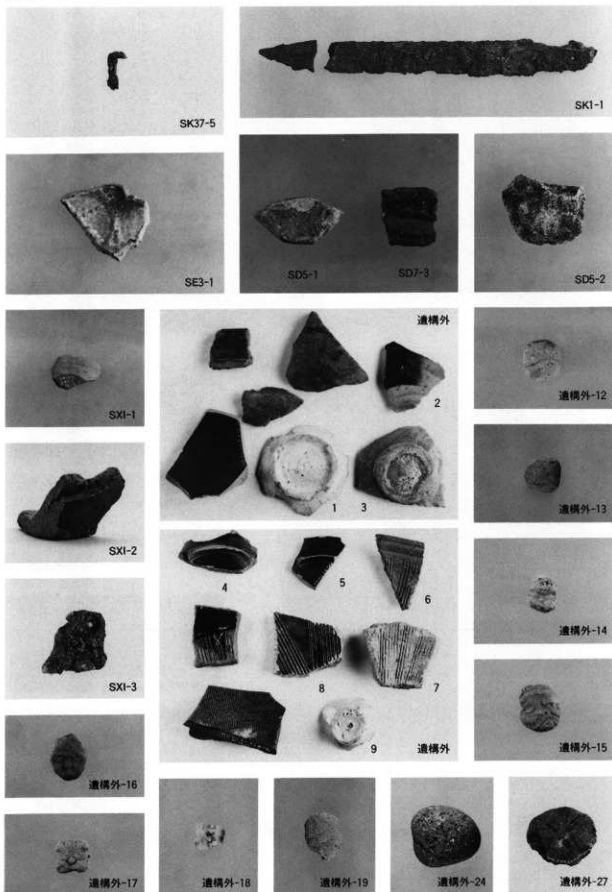
第1号不明遺構P₁貝出土状況



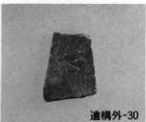
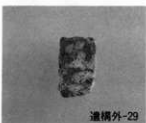
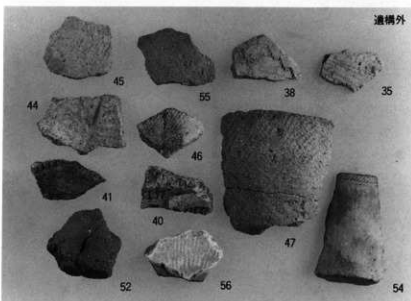
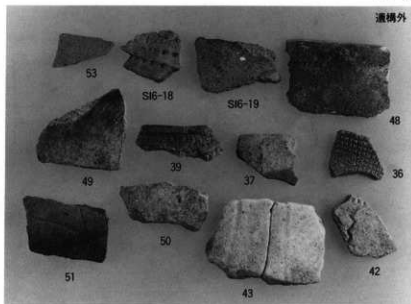
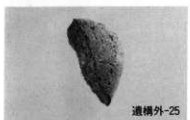
第6号住居跡出土遺物



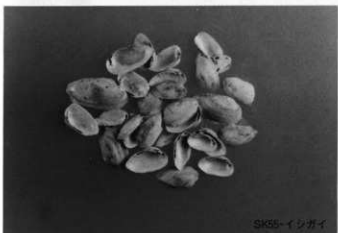
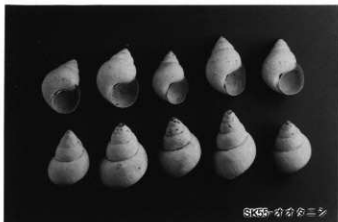
第6号住居跡，第1・5号方形竖穴状遺構，第12・36号土墳墓出土遺物



第37号土墳墓，第1号土坑，第3号井戸，第5・7号溝，第1号不明遺構，遺構外出土遺物



第6号住居跡，遺構外出土遺物



第55・56号土坑内貝塚，第1号不明遺構P1出土貝類，第50号火葬墓出土火葬骨片

茨城県教育財団文化財調査報告第114集
一般国道354号(水海道バイパス)道路
改良工事地内埋蔵文化財調査報告書

前原遺跡
大門通遺跡
三本松遺跡

平成8(1996)年6月30日印刷
平成8(1996)年6月30日発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310 水戸市見和1丁目356番地の2
TEL 029-225-6587

印刷 富士オフセット印刷株式会社
〒310 水戸市根本3丁目1534-2
TEL 029-231-4242代